

思い出の中の 旧制高等学校

私達はカルシ先生
の生徒でした

若松秀俊

どいつて、このような生徒が
世に送り出されたのか。
なにか、あるに違いない。
戦後の教育を受けた一人が

自分の学齢時を振り返って
それを考えてみた。

自由の園の気は高し

国を担う矜持と青春

カルシウ先生御自筆表題文字



松江高校 正門玄関 昭和七年当時



翠松廻る山陰の
 古都の歴史は三千年
 文化起りし源に
 冬籠もりせし文の花
 天地の精気受け伝え
 今を春辺と咲き出でぬ

あゝ青春でいのちなる
 血潮高鳴る男子らの若く
 雄々しきまなこは
 焰と燃えて果てしらず
 さわれ恵みの丘の上の
 夢文らけき思出の
 園にかんやける
 大日輪のおこりかな

翠松廻る

千鳥城頭春たけて
 若葉青葉に風薫り
 紅蓮の色に燃え出づる
 六道の湖の夕映えに
 彼岸は遠く輝きて
 幸い多かる吾が行手

嗚呼山陰の一角に
 目覚めて立ちし健児らに
 日本海の荒波は
 高き理想の試金石
 鍛え上げたる腕には
 世の濁流もものならず



校舎から 六期生アルバムより

青春の歌
 目もはるばると桃色の
 春のくも行く大空を
 仰ぎて立てる若人に
 三春清き花のかげ
 あゝこの若く円かなる
 丘にむすべる夢と夢
 永遠の命にとけてゆく
 行方は知らず霞むかな
 ふるさと遠く焰は落ちて
 四方の山脈むらさきに
 夕月登るみづうみの舟に
 遊子の思いあり

- （九）教育に関する建議……………42
- 二・四大正以後の教育制度の拡充……………43
- （一）初等・中等教育の充実……………43
- （二）高等学校の編成……………44
- （三）師範学校教員養成……………45
- （四）特殊教育……………46
- （五）その他……………47
- 第三章 旧制高校の創立目的……………48
- 三・一 人生の揺籃期……………48
- 三・二 旧制高校の沿革……………50
- （一）旧制高校の誕生と消滅……………50
- （二）旧制高校の評価……………52
- （三）旧制高校と寮……………55
- （三）高等教育機関……………58
- （四）戦争の影響と戦後……………59
- 三・三 松江高等学校設立……………61
- 第四章 生徒の出身の背景……………63

目次

- まえがき……………17
- 序章……………19
- 第二章 旧制高等学校への思い……………24
- 第三章 学校制度……………27
- 二・一 江戸時代以前の教育……………27
- 二・二 江戸時代の教育……………30
- 二・三 明治時代学制の整備……………32
- （一）新制度の制定……………33
- （二）教育機関の整備……………34
- （三）初等教育……………34
- （四）中等教育……………36
- （五）高等教育……………38
- （六）専門学校……………38
- （七）軍事関連学校……………40
- （八）社会教育……………41

(三) 拳骨教育	97
(四) プラーゲ先生の小言	99
(五) カルシユ先生との初対面	100
(六) 家を壊したカルシユ先生	102
(七) 日本人のドイツ語教師	102
(八) 独逸語教授 小林松次郎先生	105
(九) 独逸語教授 原田和二郎先生	110
(十) 藤野義夫先生・井坂清先生	110
(十一) 独逸語教授 藤野義夫先生	111
第七章 濠校時代を思い出す	112
七・一 物故クラスメートを偲んで(座談会)	113
七・二 自習寮と下宿の話(座談会)	117
七・三 運動部活動の回顧(座談会)	119
七・四 高校時代の思い出	121
七・五 松江高校同盟休校	127
七・六 勉強よりも運動	129

四・一 生徒の入学前の意識	63
四・二 入学試験と資格試験(座談会)	66
第五章 日本人教師と生徒たち	69
五・一 日本人教師	69
五・二 学科について(座談会)	72
五・三 恩師についての回想(座談会)	73
第六章 外国人教師と生徒たち	77
六・一 外国人教師	77
六・二 英語の諸先生	78
(一) ギルソン先生	78
(二) ギルソン先生	81
(三) ウッドマン先生	82
(四) 英語教師 岡潤吉先生	86
(五) 英語教師 井坂清先生	87
六・三 独語の諸先生	91
(一) プラーゲ先生	91
(二) 厳しいプラーゲ先生	96

九・四 強行軍	169
九・五 もつけた	171
九・六 学園祭の時	171
第十章 カルシュ氏のドイツ語	174
十・一 カルシュ先生	174
十・二 カルシュ先生とエンド豆	177
十・三 カルシュ先生の講義	184
(一) 段階的思考と跳躍的思考	184
(二) ヴァスイストダスターザイン?	184
(三) カルシュ先生の授業	185
(四) マルクスの逸話	186
(五) カルシュ先生と一緒に	186
(六) カルシュ先生の不在中の思い出	189
十・四 見つかった講義録	190
十・五 六十二年前のカルシュ先生	204
第十一章 旧生徒同窓会との交流	218
十一・一 カルシュ先生との四回のお会い	218

七・七 左翼風潮の所産について(座談会)	137
(一) 昭和四年のストライキ	137
(二) 理事に文乙の推薦で立候補	138
(三) 消費組合の創立	139
(四) 読書会の動き	139
(五) 提灯デモとストライキ	140
七・八 三回経験した記念祭物語(座談会)	141
七・九 大台進子その後について(座談会)	142
第八章 カルシュ先生の想い	146
八・一 カルシュ氏の足跡	146
八・二 学問を通して	154
八・三 ヨーロッパの窓口として	155
八・四 日本を去るに臨んで思ふ	157
第九章 カルシュ氏と生徒たち	161
九・一 シュパチーレンゲーエン	162
九・二 光は東方より	165
九・三 ナチヨナーレクライドゥング	168

十一・二 実業界へ	257
(一) ビジネスとドイツ語	258
(二) 松江高等学校と私	264
(三) カルシユ先生断想	270
十一・三 政界へ	272
(一) 硬骨漢政治家	272
(二) 懐かしのカルシユ先生(仮題)	273
(三) 高校中退の秀才	274
十一・四 法曹界・社会活動へ	275
(一) カルシユ先生との触れ合い	275
(二) 奇人の永井君	277
終章	290
おわりに	294
カルシユの薫陶を受けた著名人	296
主な参考文献	297

十一・二 八年後のカルシユ先生と大妻	223
十一・三 カッセルの先生	224
十一・四 カルシユ先生との再会	225
十一・五 カルシユ先生を迎えて	227
十一・六 カルシユ先生を案内して	229
(一) 十月七日 奥谷の万寿寺	229
(二) 十月八日 大社参拝	232
十一・七 カルシユ先生の旅程	239
十一・八 カルシユ先生と田島君	242
十一・九 カルシユ先生の思い出	244
十一・十 カルシユ先生奥様へ!	246
第十二章 カルシユ門下の人々	248
十一・一 学術界へ	249
(一) レーダ開発の功労者	249
(二) 俳諧の研究を生涯を通して	251
(三) ワクチン生産の功績者	252
(四) カルシユ先生のお蔭	254

ここでは、話をいたずらに拡げることなく、カルシュ先生が教壇に立っていた頃、同様に教壇立っていた先生と生徒の周囲に展開した事実を通して、外国人を含めた先生の人柄や生徒との交流を考えてみた。したがって、昭和二年卒業の四期生から昭和十六年卒業の十八期生以外の生徒については、関連した記事のみに限定して採りあげた。

まえがき

ほんの偶然のなせるわざから眼前に現れた事実が私のこころを捉えて離さなかった。

「袖すり合つても他生の縁」と言つが、全く縁もゆかりもない、存在すら知らなかった旧制高校生と教師、その周辺で生きた数々の人々を、いまこうして語ることの因縁の不思議さを思わざるを得ない。この書の端緒は、大正末期に日本政府が旧制松江高校に招請したドイツ人教師の消息の調査であつた。その手掛かりは私の手許にあつた《一人のドイツ人》フリーデルン・カルシュ女史の住所だけであつた。彼女の父が旧制松江高校の教師であつたことが、私に何故か興味を抱かせた。徐々に浮かび上がる事実の間に絡まる縁の不思議さにロマンを感じ、いつのまにかここまで辿り着いた。当時健在であつた松江高校のかつての生徒と話す中で、異質の人、異質の文化に色濃く接することが若者の成長に如何に重要であるか、四年間の大学の寮生活や留学生時代の自分をも振り返りながら痛感した。これらの人々との密な接触から、若者の目標達成へのエネルギーがどのようにして生まれるか、そして人の心に余裕を生み出すための出発点は何であるかを考えさ

序章

昨今の小学校から大学までの児童・生徒、学生の間起こった事件に関する新聞記事やテレビ放送に心を痛め、嘆き悲しむ人が少なくない。

自ら獲得した生きるすべ、それを終生にわたってサポートする方法を示唆すべきものが教育であるはずなのに、それが十分に行きわたらない。

私は三十年間大学で教育研究に従事してきた。そのなかで、学ぶ筋道をおせっかいにも懇切丁寧に与えた人ほど思考が発達せず硬直し、後の発想や仕事に獨創性

が薄れる。安心するからなのか、頼れるからなのか、とにかくそうなることが多いようだ。

一見、不親切のような態度で扱った学生の中で、自力で動機と方向を獲得していく者は、自らの仕事に程なくのめり込む。よく仕事ができ、その意義を自ら認識しできる者には不満が少ないのは勿論である。そのような者同士は議論は多いが、その間の争いには理を争うことが少なくないし、また他人と自分の仕事やその成果を比べて、あれこれ悩むことがない。

しかしながら、学問や仕事上の正当な是非のぶつかり合いはあるし、仕事上の食い違いは、勿論存在することがある。いまは教育界に限らず、社会総体にこつ

した正当なぶつかり合いとこれを通した互いの正当な評価が一般に極めて貧弱である。このような世界では正当な競争が衰えて、一攫千金的な発想が支配的になる。当然のことながらその組織のなかで学んでいる若者にその考えが伝染する。

今の教育には見られないが、往年の教育に特徴的なものは、周囲との密な接触、未熟な者同士の相互の接触と刺激である。これらを時間をかけてゆつくり体験し、仲間同士が議論できる環境の中で共

に行えた生活であろう。とくに、旧制高校には、未熟な自分に悩みながらも、他と自分を肯定的に比較し、絶えず向上心を持ち、自ずから進むべき道を見い出して行ったプロセスを見いだすことができ

る。実際にそれを自然な形で若者が行つて来れた周囲の暖かい眼差しと余裕が見られる。

戦後の教育をいたすらに非難することなく、同様に戦前の教育を、ただ短絡的に軍国主義的な教育というような一面のみを取り沙汰することなく、その長所を事実から推測しながら、正しく評価し、新しく有益な示唆を現今の高校生や大学生に示すのが大人の務めであろう。

このようなことを考える中で、自分の受けた大学教育の中の特殊な時期であった学生時代の寮生活と旧制高校の寮生活に多くの共通性を見ることができたことを強調しておきたい。自分にとってその特

ぶ過程を見ることができ、その後の行動への影響の大きさを今にして痛感するのである。一見古風な非論理的な生活を経験した者には、感覚的によく推測できることなのだ。長い人生の間には一過性のように思えるが、単なる経過ではなく繰り返し繰り返し行われる、あるときには傍から見ても極めて無謀であるような、いわばそこでのみしか通用しない規則に到るまでの理不尽な人間関係の受け入れを強要されることもある。そのようなことが許容されることが実は若者には重要である。すなわち、彼らの高校時代に学ぶ実利を離れた思考と行動および社会そのもの成り立ちの中に、実証的な社会学に見られ

殊な生活がいかに今日の生活や仕事の原動力になっているか、いまさらのように思い出される。おそらく、彼ら旧制高校の学生にとっても同様であったと推測される。旧制高校でのかつての若者の体験を聞いたときに、戦後であっても自分が古風な寮生活で拙いながら感じた共通性に率直にいつて驚きを禁じ得なかったからである。筆者の属した寮は旧制横浜高等工業専門学校（旧制横浜高等工業専門学校）の伝統を引き継ぐ弘南寮で横浜市金沢区にあった。もちろん戦前の旧制普通高校とは異なるし、当時の高等工業専門学校はやや低く見られていたことも筆者は承知している。ところで、横浜国立大

学に四つの寮があったが、筆者の四年間住んだ寮はどれも他の寮とは様相が違っていたようだった。どうやら、重要なことは、若い高校生が状況と目的を共有し、未熟から発展する相互の関係から連帯感を生み、やがて自分の小集団での役割が生じるといことであるらしい。そして、つぎに大学で知識に裏づけられて、行動力を生み、さらに社会で実践を通し、競争の世界に自然に入っていくことであつたのだろうか。そんな気がするのである。とくに、学生寮の生活では何もなかったから、あるいは小さな取っ掛かりから仲間同士が何らかの関連性をもち、子供の秩序から大人への秩序の受け入れを学べるような、継続的に一定の関係が維持されていくことが実は若者にとって後々までの意味をもっている。そして、その積み重ねの結果が若者同士の連帯を生み、それが発展し、その総体として高校生が、またそのつながりが社会全体の財産になっていったのであると思ふ。その様子が自分の体験を背景において垣間見る想いである。そこでは、遠くから果たした先生の役割、大人の世界の常識の一部の開示があつたはずである。そして《大人である教師》との柔軟な関係と、同時に一線を画す厳格な関係が、生徒の次の発展過程への起爆剤になっていたことが推測できるのである。

旧制高校への想いは、その時代の生徒にとつてそれ以前に受けた旧制中学校の教育やそれ以後に彼等が受けた大学教育を考慮してみても、その印象、思い入れとともに、実質的效果は全く比較にならないほど大きなものである。旧制松江高校の昭和四年から七年に学んだ岡崎、白石、宮田氏が、そしてその仲間（高田、森山、増田、松田氏）が肉声で語った言葉を纏

第一章 旧制高等学校への想い

ユ氏が関わったことからは、どう考えても旧制高校の高々教育の一部であり、事実その良きシンボルではあったが、彼一人だけで優れた弟子を養育し世に送り出したわけではないことは自明である。

少年期から青年期へという人生の重要な時期に、大きなビジョンをもつ教師に恵まれない今の生徒に同情を禁じ得ない。現在、大学教育を担当している教授をはじめとする教員達にどれほどの深い思慮、学問を通しての世界の認識、他分野への思いやり、正当な批判と総合力、そして自らの専門家として果たしている強いプロ意識があるのか？
真に学問に入る予科的存在の重要性をもう一度見直す必要がある。

よく、戦前は大学入学の学生の絶対数が少なく、多くの場合に、素質にすぐれた者のみが教育を受けたので、その様な優

秀な者を輩出できたという。果たしてそうだろうか。いや、必ずしもそうではない。今、問題なのは考ええる素材や時間の、社会から生徒への提供が少ないことを余儀なくされていること。考えても行動する時間がないこと。情報過多で直ぐ実利的行動を求められること。そして、この状況に対応できる適切な指針を与える教育が存在しないことである。それらが、昔の高校生と同年代の学制との諸々の精神的なまた行動範囲の差を生む要因である。

ここで取り上げる教師のカルシユ氏については、彼自身の行動と生徒の相互関係の中で不滅の価値が見いだせることを確かに強調すべきであろう。しかしカルシ

ユ氏を見てみた。彼らが揃って一様に云うことは、とにかく高校生の頃は人生の最も大切なひとコマであったということである。ロマンスもあり、良き先生、良き先輩、良き級友に恵まれて松江市民の純朴な親しみを肌感じつつ過ごした。その意味で、この三年間は後には二度と経験できなかった《最高の心の宝物》という他ない。大人になってからの人生は、松江の三年の高校生活に源をもっていたようだ。いやもつと断言できたということである。松江では一生の中の『初体験もの』も色々あった。実に懐かしい心の秘宝でもあった。松江時代は自由の意味を知り友情の価値を悟った大切な期間であった。そしてすこし背伸びをしながらも、大人の世界に少しずつ足を踏み入れて、すべてが

楽しく希望にもえた時期ともいえる。今でも淋高のためになることがあれば、小さいことでも出来る限りしてみたいと思っ
ていたという。今日までこうして生きてこれたのは松江時代に身につけた自由の賜と思っし、それを誇りに思っているのは事実である。そしてこれも「哲学とは哲学の歴史が物語る」として、アリストテレスを淡々と講じた先生の如き、筋の通った教育の結果であつたと思う。旧制高校には独特の雰囲気があつたと思つている。それは大正デモクラシーの自由の気風を背景にしたものであつた。旧制高校は未だ博士が大臣かという天下国家に必要な人物を養成する目的のもとに創立されたからである。帝国大学の予科的性格が与えられ、入学は難しいけれども

帝大進学については他種校とは大きい格差のある容易性が認められていた。これがおおらかにしてユニークなエリート意識ともなり、今なお同窓会、クラス会、寮歌祭、さらには各種競技別旧制高校OB大会等に脈々たる深い友情の鎖となつて繋がつていったものと思つている。
《高等学校は全くだいいい学校》であつた。高校での自由の精神は当たり前のこととして受けとめ、三年間に生まれた友情の絆は、それから七十年の生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなつて今に渝らない。とにかく、よき友人に恵まれた幸せを感謝したい。高校生にとつて初めて親の許を離れて暮らした松江の三春は正に青春そのものであつた。美しい風土に築かれた高校の日々には、教室で、

グラウンドでそして外の町々で、何ものにも換え難い友人との美しい交わりと最も貴い自由があつた。たまたま内外の社会には不況が拡がり、左右の争いが激化し、革命思想が頭を擡げ、治安維持法強化の所産的事件が続出するよつな暗い世情に傾きつあつたけれど、成長期の高校生が自我の認識を強め、少年から青年への精神的脱皮に進んだ貴重な時期でもあつた。こうして戦争を体験した後、国家活動の多くの部面で活躍するよつになつた。彼ら昭和初期の高校生の努力で、今懐かしまれている昭和後期の経済的繁栄が形成されたといつても差支えない。とにかく旧制高校は素晴らしい学校だつた。これが結びの言葉である。

を紹介したい。ここでも同様の言葉が見られる。
総じて旧制高校卒業生は現在では大部分の方々は高齡であり物理的に遠からずこの世から姿が消えることになる。旧制高校の授業内容ひとつの大きな特徴は語学の時間が圧倒的に多いことである。甲類(英語)、乙類(ドイツ語)、丙類(フランス語)を問わず少なくとも二ヶ国語を含めて一週十数時間に及ぶのである。あらためて言葉を学ぶ意味、文化的背景、異質の人と物に接する意味を見直す必要がある。小生が若き日にドイツに留学し激烈な印象を受けたことは何にも替えがたいことである。旧制中学時代と全く異なり紳士扱いされる。また、一年生は全寮制であり、生徒諸氏の大部分は家庭環境

も良く、心身共に国の将来を担う者としての矜持を保ち、社会も、とくに地方都市では大切に扱われた。現在の貧弱な学歴エリートとは全く異質のものである。官立旧制高校は二十五校（外地二校）定員は六乃至七千人位だったと思われる。因みに、ドイツは第二次大戦後アメリカに依る学制改革を拒否し大部分は旧体制を保っており、我が国の教育事情が将来に亡国の様相を呈しているのとは対照的である。日本は明治以来ドイツ及びイギリスを規範として来た。ドイツは青年達のあこがれの国であり、またインテリのシンボルであった。

それが、一部誤りをもたらしたこともあろうが、と結んでいいる。

次に当時の学校制度 教育制度について振り返ってみる。

第二章 学校制度

古来、日本には民間では寺子屋のような学校があつたが、制度として確立するまでの概略を述べてみよう。

二・一 江戸時代以前の教育

日本が六六三年に唐・新羅に敗れ、完全に滅亡した百済王国からの亡命者の王族である鬼室集斯にそれから間もなく天智天皇が命じて大学を創設したことが知られている。

時代が下つて、奈良・平安時代に、公式の教育については七〇一年の大宝律令の学制がある。これは、文武天皇の時代に唐の制度を模倣して制定したものである。『大学寮』と『国学』が学制として確立された。学資はともすべて官費でまかなわれた。

『大学寮』は律令制に基づいて、貴族の教育や官吏の養成を目的とする最初の公的機関である。式部省の所管にあり、五位以上の者の子弟と八位以上の請願者等を入学させた。学科は明経道・紀伝道・明法道・算道・書道の五科であった。後には明経、算道、明法、文章の四道となつた。

『国学』は下級官吏の養成を目的とした学制で、地方豪族の子弟を入学させ教育

した。学科は孝経、論語等であつた。

氏族の繁栄と勢力の拡大をはかるために設けられた別曹と呼ばれる平安時代の貴族の私的教育的場があつた。これは氏族出身の大学寮の学生や大学寮入学準備のために、有力貴族が寄宿舎を設けたことに始まつたものである。

主なものに、弘文院(和気氏)、勸学院(藤原氏)、文章院(菅原氏)、学館院(橘氏)、奨学院(在原氏)、淳和院(淳和天皇離宮を学舎)がある。

社会教育の事業として菅原道真が図書館「紅梅殿」を設けた。また「芸亭」は

石上宅嗣いすののりゆかが開設したわが国最初の図書館で、貴族文庫の嚆矢こっしで芸亭院ともいう。七十七一年、宅嗣の旧宅の一部に漢籍を集めた文庫を設け、好学の人びとに開放したが、平安初期には衰亡した。

庶民教育のためには、空海の綜芸種智院しゅうげいしゅちゆいんがあった。この学校は仏教の教えに基づき、庶民教育を目的とした僧俗貴賤の別なく広く入学を許した唯一の機関であった。

鎌倉・室町時代には貴族階級の公家の勢力が衰えて、武家勢力へと移行したのでその教育対象と方法が大きく変化した。

武士の教育は、武芸の練習が最も重要視され、剣術・弓道・馬術・水練等がさかんに行われた。また戦場で戦える精神的修養が求められ、この修養を仏教に求めた。多くの武士は禅的修養を行い、禅僧の指導を受けた。

一二七六年に北条実時が北条氏子弟の教育のために創設した施設が金沢文庫にあつた。武蔵国金沢かねさわ(現在の横浜市金沢区)の称名寺境内にあり、広く和漢の書を集めた。しかし、当時の鎌倉武士は学問への関心は極めて低く、金沢文庫の教育史上の意義は大きい。戦国時代には蔵書も多く散失した。

他には、足利学校が知られている。この学校の起源は明らかではなく、室町時代になり、上杉憲実が一四三九年に再興した。下野国足利(足利市)にある。その

歴史は遠く、小野堂おののたかむらの創立であるともい

い、あるいは国学の跡であるともいわれている。憲実は「坂東の大学」とよばれたこの足利学校に僧快元を招いて学頭とし、ここに字田を付し書籍を寄与した。

広く学生を集めて教育し、戦国の乱世になつてもその命脈を維持し、七代目の学頭九華の時には三千人の学生を容した。

徳川時代になつてからも幕府の保護を受け、明治の廢藩置県まで四三三年間存続し、明治五年に閉校した。

戦国騒乱に僧侶によつて始められた中世

寺院の教育所は寺子屋と呼ばれた。一般の子弟に、読み、書き、算盤、習字を教えた。

二・二 江戸時代の教育

この時代は「藩校」「私塾」「寺子屋」の三種の教育施設が並立する世界でも稀な教育立国であつた。

一六〇三年江戸幕府を開き、幕藩体制を固めた徳川家康は文教を奨励した。

まず、藤原惺窩せいごを、次いでその門人林羅山を幕府の文教顧問とし、かたわら経史を講せしめた。秀忠は「禁中並公家諸法度」、「武家諸法度」を定めて、学問を重んずべきことを説いた。

想い出の中の 旧制高等学校

また、《郷学》と呼ばれる学校が各藩内に設けられ、多くは土庶ともに入学が許された。岡山の「閑谷校」が代表的である。なお、私塾が盛んにけられた。松永尺五の講習堂、伊藤仁斎の堀川塾、木下順庵の雉塾、中江藤樹の藤樹書院、細井平洲の嚶鳴館、菅茶山の廉塾、荻生徂徠のけい園塾、広瀬淡窓の咸宜園、緒方洪庵の適塾、本居宣長の鈴屋、平田篤胤の気吹廼屋、大槻玄沢の芝蘭堂、シーボルトの鳴滝塾、福沢諭吉の慶応義塾、中沢道二の参前舎、手島堵庵の五楽舎、明倫舎、吉田松陰の松下村塾などから多くの人材を輩出した。

戦国騒乱に僧侶の手によって寺院の教育

文教政策として、家光は林羅山に命じて、上野の忍ヶ岡に学舎を建てさせた。綱吉は学問を保護し、その学者を忍ヶ岡から湯島に移し、「湯島聖堂」を建てた。また林羅山の孫信篤を大学頭に任じて旗本の子弟を教育させ、自らもまた経書を講ずるなどした。これが後の昌平黌（昌平坂学問所）である。この頃の碩学には、陽明学の中江藤樹、熊沢蕃山、古学派の山鹿素行、伊藤仁斎、朱子学の木下順庵、貝原益軒、国学の僧契沖などが挙げられる。

昌平黌は人道的な自己陶冶を目的とした幕府の最高学府で、教科の中心は朱子学であった。教授として専任の儒学者が数名置かれ、林家の子孫が代々これを統轄した。初めは武士、庶民とともに入学を

許されたが、寛政以後は十分に限られた。

まず「素読所」に入学し、小学・四書・五経の素読を学び、これが終わると「初学所」に入り、経義の講釈を聞いた。各藩では《藩学（藩校）》が藩士を教育する機関で、儒学や武術を教えた。江戸前期には会津の稽古堂（後の日新館）、米沢の興讓館、和歌山の講釈所、江戸中期には萩の明倫館、仙台の養賢堂、熊本の時習館、鹿児島造士館、江戸後期には佐賀の弘道館、名古屋の明倫堂、秋田の明道館、福岡の修猷館、金沢の明倫堂、彦根の稽古館、福井の正義堂（幕末時に明道館）が代表的である。幕末には水戸の弘道館、高知の開成館が有名であった。

から始められたのが変化して、寺院以外でも一般子弟相手に、読み、書き、算盤習字を教える施設である寺子屋が発達した。庶民の教育機関で徳育にも力点をあいた。教師は僧侶・藩士・浪士・神官・医師・庶民であった。生徒は六歳頃に入學し十二十三歳頃まで在學した。ここで使用された教材には「伊呂波歌」、「千字文」、「童子教」、「実語教」、「節用集」、「往来物（庭訓往来、消息往来、百姓往来、商売往来）」、女子には「女今川、百人・首女大学」、算術には、塵劫記（吉田光由）などの教材があった。

二・三 明治時代学制の整備

明治維新以前は、前述のように藩校が設

立運営されていた。とくに、徳川時代末期には、各藩が藩士に学問を奨励した。五、六万石以上の大名の城下町は知識人の密集地であった。この結果、幕末三百諸侯の城下町から政治と思想のエネルギーが噴出した。この点が欧米諸国の場合と明治維新の事情が全く異なる。

とくに殆ど独学で洋書を読み、西洋技術を学んだ軍事の天才、大村益次郎が弾丸なして事実上の革命を行ったことは欧米の人々の政治的常識から言って、想像外のことであった。全体的な教育水準がそのような結果の間接要因であろう。明治になってから、意識的に集められた権力と知識は「何をするのも東京だ」という風潮を生んだようだ。日本人の《意識転換の速さとその適応能力》への西洋人の

驚きは大きかったようだ。

(一) 新制度の制定

日本の近代学校制度は、明治五年八月二日の太政官布告第二百十四号、（おきて）被仰出書「学制序文、及び翌日に頒布された「学制」からスタートした。その内容は、国民皆学、機会均等など幕末の教育実態はもちろん、当時の諸外国と対比して、実に先見の明に満ちたものであった。

この前年に、福沢諭吉・小幡篤次郎共著で後に慶応義塾の活字版印刷物にした「学問のすすめ」の冒頭の「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」の文面は文明開化期の青少年を鼓舞した。この文句は明治五年の「小学教則」では国語教科書にとりあげられた。

(二) 教育機関の整備

太政官布告以前の明治五年五月、日本初の師範学校が東京に誕生した。旧幕府学問所で最高学府の昌平黌のなかに設立された。これを教える教師は備外国人で生徒の入学資格は和漢通例の書を修得した者である。翌六年、七年にかけて大阪、仙台、名古屋、広島、長崎、新潟にも設置された。官立なので学費は官費であった。このころは《時を定めず生徒を募集す》随時試験による選抜があったし、修業年限も定まっていなかった。

国内の《維新に遅れをとった》中規模の旧藩が、中央で郷土の秀才を政府の設立した最高学府に学ばせ政権に登用して貰い、個々の実力で対抗することを考えた

(三) 初等教育

明治初期に慶応義塾で福沢諭吉に学んだ旧松山藩士和久正辰は「子どもは精気の塊なので、教育者には透き通った乱暴さが必要だ。」と云ったこのことである。子どもは精気に負けない精気でぶつからないと教師の魂が子どもに沁み通らないということであろう。

太政官布告は、教育における学問の意味を明らかにし、従来の学問観や学校観を批判し、新制度下の学校へ子弟が入学して新時代の有用の学を修業の旨とした。

また、子弟の就学は父兄の責任であるとした。学制条文には海外留学生規則や、のちに育英制度となる貸費制規則も載った。

条文は、その多くが学校制度の体系を決定し、これを実施する行政組織をつくるための条章であった。

小学、中学、大学の三段階を学校制度の体系の基本とした。小学校は八年制で上等小学、下等小学各四年の学校とした。小学校は学校制度の基礎となる教育を施す機関であって、すべての者に入学の義務があった。小学校には種別があり、尋常小学は、基本となる普通教育を施す学校であって一般の児童を入学対象とした。その他種々の教育を施す小学校、たとえば女兒小学、村落小学、貧人小学とは区

別された。小学校は名称の違いがあるが、学制以来合計八年の学校であった。

尋常小学校の義務教育制度は明治十九年の小学校令をもって発足した。しかし、当時はすべての学齢児童を四年課程の尋常小学校に入学させることは困難であったので、半日学校で三年の簡易科を設けることも認められた。当時は就学率が半数に達していなかったため、義務修学期間は四力年（一八八六～九二）、三、四力年（一八九一～一九〇〇）、四力年（一九〇〇～〇八）、六力年（一九〇八～四一）であった。このあとに高等小学校が四年間または二年間続き、合計八年間であった。これによって、小学校教育の普及を図った。

（四）中等教育

中等教育のための中学は、小学校教育を受けた者の中から選ばれた生徒が入学した。授業科目は漢文、英語、数学、理科（物理、化学、博物）、図画、体操の六科目であった。図画は水彩用の絵具はまれで、殆ど鉛筆画、物理は幕末からでている翻訳書「ガノーの窮理書」で実験は無かった。英語は「バレーの万国史」、「ミル自由之理」の原書を用いた。前者で世界史を同時に学んだ。発音無視、意味重視の授業の伝統が生じた。当時「修身」という人間の道」は旧弊としてどの中学でも設定されなかった。この旧弊の中に国語をも含めていた。諸外国で自国語に力をいれているので反省したが、適当な教師がいなかった。旧藩時代に国学を行った者

神主を動員した。

中学校には実業教育のための諸学校や補習を行う学校などの種別を設けた。中学校を修了した者の中から選ばれた生徒が大学に入学するとし、大学教育の基礎となる外国語学習のための外国語学校やその他の諸専門学校についても制度化し、これらが高等教育を行う諸種の学校として規定に掲げた。このように小学、中学、大学を基本とする学校体系として、そのほかに多様な教育を行う諸学校も計画して近代学校の全体を展望できるようにした。

中学校は、五年制の尋常中学校と二年制の高等中学校とし、全国に設置して、小学校卒業者に進学機会を与えようとした。公費をもって経営する尋常中学校は

各府県に一校を設けることとし、高等学校は全国を五区に分けて、その区内の尋常中学校卒業者の中から選ばれたものが入学する制度とした。これによって、この学校令の規定によって制度的に整い、一時は多数設けられていた中学校が全国において五十校ほどになった。尋常中学校では実務に就く者と上級学校へ進学する者とを教育したが、この性格は高等学校においても同様であった。したがって高等学校には専門教育を行う機構も作られたが、帝国大学へ進学するための基礎教育が発展し、後に高等学校に改められて、大学への予科教育を行うようになった。この性格は大正八年の高等教育制度の改革まで変わらなかった。師範学校も小学校教員を養成する尋常師範学校

を各府県に一校ずつ設け、中等学校、尋常師範学校の教員を養成する高等師範学校は東京に一校設ける制度とした。

中学校についても、明治十九年に「学科及其程度」として規程を示したが、三十年代になってからは、各科の教授要目によって教授する内容の項目を定める方針をとり、教科書はこれを基準とし戦時中まで検定制度のもとに著作されていた。高等女学校においても教授要目に基づいて、検定教科書による教授が行われていた。このように教育内容についての行政基本方針は統一的に進め、基準の指示や、検定教科書制度からさらに国定教科書の制度への方向をとり、定まった教材で一斉教授の方法が支配的となっていた。

(五) 高等教育

明治二年旧幕府の最高学府昌平坂学問所を「大学校」と改称、機能を大学南校（人文科学）、大学東校（医学）に分けた。明治四年、十一年に学制改革が行われた。この時期の大学予備門は大学付属機関で後の旧制高校または大学予科に相当した。大学予備門の教科書は外国直輸入で試験問題も英語であった。

明治十九年に帝国大学令が施行され、帝国大学が発足した。高等教育機関としては帝国大学一校を東京に設ける制度とし、ここには大学院も設けることを規定に掲げた。しかし、明治十年代からすでに開設されていた多様な専門学校については制度化を行わなかった。

(六) 専門学校

明治一十年代後半において女子の中等教育制度を改革した。従来は中学校令の一部に加えて制度化してあったのを独立した学校として位置づけ、高等女学校規程を公布した。最大の教育制度の改革は、当時急速に興隆してきた近代産業、特に工業に従事するもののために実業学校制度の基礎を築いたことである。徒弟学校、実業補習学校、簡易農学校などが制度化され、三十年代になって実業学校の制度に整えられた。近代化と全学校体系の整備のために、具体的には三十年代前半には小学校令、中学校令、高等女学校令、実業学校令、師範教育令などを定め、三十六年の専門学校令をもって高等教育の

ための専門教育の諸学校が制度化された。それらと高等学校令、帝国大学令とをもつて、近代学校の全制度体系がすべてそろえられて制度として位置づけられ、それぞれの機能を發揮できる画期的な改革であった。四十年に義務教育年限が二年延長されて、尋常小学校六年、高等小学校二年の制度となったが、これは高等学校の一部を移行させた。この時代から第二次世界大戦後の学制改革に至るまで、学校体系の変更は殆どなかった。

学校における教育内容については、学制頒布の際から小学教則による基準があり、これをもとに各府県管内の教則が編制され、各学校は教科目を設定し、教則に示された要旨によって各教師は授業を行っていた。明治十四年の小学校教則綱領に

おいても同様な方針であったが、十九年の学校令時代から、簡単な「学科及其程度」を小学校・中学校の教育内容の基準として示した。教育内容の実質については教科書検定制度をとった。基本となる教科書は文部省が著作し、三十年代になって小学校教科書は国定制となり、戦後の教育改革まで続けられた。小学校教科書が全国一種類の国定制となって、教育内容は統一され、さらに教師用指導書も文部省が出版した。この時代には教授理論によって定まった段階による授業の方式を重視するようになって、教育内容とともに方法も定型化された。また各教科の授業内容は小学校令が公布されてから、施行規則の中に示され、教材の基準が示された。

(七) 軍事関連学校

明治三年政府は海軍は英国式とし、陸軍はフランス式を採用すると定めた。

当時官軍は薩長土の藩兵私軍を中核にした軍であった。軍隊を公式に持たない革命軍は士官養成の必要性を感じ、市ヶ谷の尾州屋敷に日本瓦の木造二階建の校舎を建設した。正式に陸軍士官学校は明治七年十一月設立、八年に第一期生を募集した。試験は漢文、英語および数学であった。歩兵科と騎兵科は終業年限三年、砲兵科と工兵科は修業年限四年であった。一年次には基礎学科として代数、幾何、三角、重学、理学、化学、地学、歩兵、騎兵の教練があった。二、三年次は専門

課程で、兵学、軍政学、築城学、兵器学、地理図学、交通通信学からなっていた。陸軍士官学校卒時には工兵少尉、騎兵少尉、歩兵少尉、砲兵少尉いずれかの身分が与えられた。

医学者と哲学者が普仏戦争後にドイツの国力を認識した。ついで、陸軍がこれを認識した。敵の意表に出る戦法と機先を制するドイツ戦法は室町以来の日本剣術の基本思想と合致したものであり、日本人には受け入れ易かった。

ドイツのメツケルは明治十八年来日し、翌年より指導実行した。明治初年以来的の「鎮台」は国内治安のための日本人の独創的産物であったが「師團」に改組され、軍隊が国内鎮圧から外征へ転換された。陸軍幼年学校入学資格は旧制中学校二年

終了者が該当し、陸軍士官学校入学資格は旧制中学校四年終了者が該当した。

明治二年に海軍士官養成学校を築地の安芸橋内に設立した。明治四年に和洋折衷校舎を建設し、明治九年に海軍兵学校に改称した。明治十六年築地川沿い煉瓦造りの洋館を建設し、組織と機能は英国を範とした。航空兵学校は後に設けられた。

(八) 社会教育

江戸時代にもあつた社会教育機能を明治初年から近代教育制度の一部として企画し、その施設として博物館と図書館を建設した。その名称は教育令の中に学校の種類とともに掲げられ、諸活動の施策を行ったのは、四十四年に公布された「通

俗教育調査委員会官制」の公布以後である。読物、図書館、文庫、展覧会に関すること、幻燈および映画、講演会についての通俗教育を振興するとした。調査委員会は大正二年に廃止されたが、この間社会教育振興の基礎がつくられた。また三十八年に文部省が地方の青年団体の指導とその設置を奨励した。地方に青年団を社会教育の一部として発展させようとしたものである。大正四年に文部省は、内務省とともに訓令を発して青年団体の性格を明らかにし、青年団体の組織を整備するための基本方針とした。しかし、積極的な振興方策は第一次世界大戦以後昭和初年に入ってからである。

(九) 教育に関する建議

学校制度全般にわたる整備拡充を進める基本方策を立てるに当たって、文部省に審議機関を設け、二十五年から教育会議の規程案がつくられた。その後、高等教育会議および地方教育会議の設置法案もつくられた。続いて二十九年に「高等教育会議規則」を勅令により公布した。このように文部大臣の諮問機関として高等教育会議が開かれ、大正二年六月廃止されて教育調査会がつくられるまで、教育制度を確立・整備する重要な期間に、多くの教育方策について意見を具申した。二十年代から三十年代にかけては学校制度改革の論議が行われ、三十五年に高等教育会議が学制改革案について意見を明らかにした。これは大学と高等学校の連

絡に関することと、専門学校を制度化することであった。明治二十六年に専門学校令を公布した。また高等女学校に家政を主とする実科を設け、四十三年高等女学校令を改正して実施することとなった。このほか重要な施策や改善方針はこの会議において審議され、可決したものはただちに実施に移された。このようにして高等教育会議は大正二年までの間に七〇件の諮問に答申し、十六事項の建議を行なった。これに続いて大正二年に設けた教育調査会は、内閣に開設された臨時教育会議が教育制度全般の改革にとりくむこととなって廃止された。

二・四 大正以後の教育制度の拡充

(一) 初等・中等教育の充実

明治時代の後半から大正時代の初期にかけて、わが国の近代教育制度は確立し、しだいに整備されてきた。初等教育より高等教育に至るまで基本となる学校体系が整い、多様な学校がその機能と国民の教育要望にも応ずるようになった。基本的には明治十九年から昭和十六年までの制度が存在した。なお、途中、日本帝国支配の台湾と朝鮮で「公学堂」、「普通学校」が設立されたが、内地の「尋常小学校」より水準は低かった。

第一次世界大戦後には、欧米各国に時代の進展に応じて改革の気運があらわれ、新しい教育の運動が起こった。わが国に

おいても教育制度改革の理念や教育実践についての関心が高められ、教育全般の諸問題の所在を明らかにし、制度や実

体全般を組み替えるような改革を行わず、築いてきた教育制度と実践を拡充する方向で諸問題がとりあげられた。従来の制度で機能を最大限発揮させ、国民教育を充実する努力をした。臨時教育会議に引き続いて「教育評議会」を、さらに十三年には「文政審議会」を設けて、昭和十年代には教育改善と拡充の基本方策を実施に移してきた。大正五年から昭和十一年までは、これらの諸会議が文教施策を進めるに当たって、中枢となる機能を果たした。

そのなかでの懸案の一つは義務教育年限延長であって、これが臨時教育会議にお

いても審議された。当時尋常小学校の就学率は九九%以上となり、卒業生の多くは高等小学校へ進学した。中等専門学校は、希望するすべての生徒が入学できないので年限延長によって高等小学校を義務制にする必要があった。その後昭和初年にも義務教育年限延長の問題がとりあげられたが、二十二年の学制改革まで実現できなかつた。

このころは中等学校への入学生徒も増加したので、中学校、高等女学校、実業学校、実業補習学校の拡充を行った。文政審議会の答申によって昭和六年から中学校に第一種・第二種の制度を実施した。第一種は、卒業後主として実生活に入る者のため、第二種は、卒業後主として上級学校へ進学する者のための異なった課

程を設けた。高等女学校も入学者が多くなったので、中学校と同様な方針で二つの課程を設けることが定められたが、これは実施されなかつた。その後、戦時中の近代工業の著しい発達に伴って、実業学校も拡充されて、産業界において必要とする技術者を養成した。

(二) 高等学校の編成

高等学校と専門学校はこの時期に学校数と生徒数が増加して、高等教育機関の大拡張方策をとった。特に高等学校は従来大学予科であったのを改め、高等普通教育を完成する機関とし、生徒を文科と理科に分けて編成した。ところで、高等学校を改称して生まれた高等学校であったので、尋常中学四年修了か、五年で卒

に基づいて、大正十四年に「師範学校規程」を改正した。本科第一部の予備科を廃止して修業年限を五年とし、卒業生のために専攻科を設けた。その際、第一部の修業年限が一年であったのを昭和六年一月、本科第一部を二年間とした。これは、中等学校卒業者を多く入学させることによって師範教育を拡充・向上させ、将来専門学校とする道を開く策となつた。また大学、専門学校卒業生も高等学校・中等学校教員の免許状を取得可能になつたので高等師範学校卒業生のほかに、多数の大学、専門学校卒業者が高等学校や中等学校教員となつた。これによつて中等学校の増加に伴う教員の需要に応ずるとともに、しだいに中等学校の中に新しい教員層をつくるよつになつた。

業し高校の入学資格を得た。年限については高等学校は七年制を本体とする制度に改め、尋常科四年と高等科三年をもつて編成することにし、高等科だけを設けることもできるとした。また、従来の高等学校はすべて官立であつたのを改め、公・私立の学校の設置も認められたので、学校数は増加し、以前は八校であつた高等学校が昭和五年には三十二校となつた。高等学校卒業生の増加によつて大学制度についても改革が行われ、官立大学だけが大学であつたのを改め、公立、私立の大学も認可した。また、単科大学の制度も実施され、大学の性格が一変し、学校数・学生数も著しく増加した。また、専門学校のうち大学に昇格したものも新しい大学令によつて運営されることとなり、

大学数はさらに増加した。また、専門学校も拡充され学校数・生徒数は著しく増加した。女子の専門学校もこの時から設けられ、高等女学校卒業生であつて専門学校へ進学する生徒が増加し、女子の高等教育機関の拡張となつた。

(三) 師範学校教員養成

教員養成のために、教員伝習所が各地方の師範学校の前身として設置された。その教員は官立師範卒業生とした。師範学校の、その他の卒業生は即座に小学校の校長に赴任した。官費修学者は三年間の教育職につく国家的義務があつた。別の官立学校に入るときには義務年限は半減された。

師範学校については文政審議会の改善案

(四) 特殊教育

明治十年代から盲教育・聾教育のための学校を設立したが、近代学校制度に加えての運営が遅れた。初めは小学校令の一部に制定されたが、大正十二年に「盲学校及聾啞学校令」を制定し、その細則も規程として公布し、この分野の特殊教育が独立の学校として体系に入った。その他精神薄弱児の教育、肢体不自由児の教育、身体虚弱・病弱児の教育についても大正十年ごろから特殊教育の問題としてしだいに拡充された。しかし特殊教育全体の積極的拡充方策は第二次世界大戦後の教育改革によつた。

(五)その他
この期は、まず臨時教育会議において、通俗教育の拡充計画として読物、図書館、博物館、通俗講演、活動写真、音楽、劇場などによる諸活動についての改善が指示され、社会教育活動と施設の形が整えられた。成人教育講座の開設、婦人教育の振興、青少年団体の育成なども着手された。産業教育の一部として発達してきた実業補習学校は勤労青年のための社会教育として取り扱われた。

これとは別に、大正十五年には軍事教練を目的とし、現役陸軍将校を配属して青年の教育を行う青年訓練所が成立した。その後、実業補習学校と青年訓練所を統合して青年学校を設け、昭和十年青年学校令を公布して制度化した。これらが社

会教育施設として、次第に拡充されてきたが、学校教育と並んで制度として運営し、積極的な方策を講ずるのは第二次世界大戦後の教育改革以後であった。

第一次世界大戦の後の不況時には、市町村の教育費支出、教員俸給支払いが困難になった。大正七年三月、市町村義務教育費国庫負担法」によって尋常小学校教員と準教員の俸給の一部は国庫が支弁し市町村との教育費の分担を制度とする教育財政方針がとられた。その後、教育費が削減され、児童教育について不況下の困難に対処した。昭和三年十月の「学齢児童就学奨励規程」による補助金の交付、昭和七年九月の「学校給食実施ノ趣旨徹底方並ニ学校給食施設方法」による学校給食の実施などは当時の状況に対応した

政策であった。

第三章 旧制高校の創立目的

三・一 人生の揺籃期

古来書生といわれたように、教育を受ける学生時代は、どつやら社会的に漠然とした立場で自らの普遍的問題とその解決策を純粹に求めよとする機会なのである。自分の器量が發揮できる場所を探するための暗中模索の時代なのである。

実際に、世に出れば、自らの力量で優劣と生存の競争に如何にすれば勝てるかそれ以外は多分に余事になってしまうの

が現実になる。従って、そのための心理的余裕が消え失せてしまつのが常である。つか。というのは、その時期には、自分を世の中で自立させる努力で精一杯である。したがって、《蟹が甲羅に似せて穴を掘る》ごとく、天性の器量通りの穴を出来るだけ深く掘ることに懸命に成らざるを得ないし、このことに集中するのは、現実にみずから選択した活動の場であり、実現するには、いたし方ないようだ。

しかし書生時代にあつては、学問に限らず生活一般にわたって、「痴けの一念の粘り」と「実利から離れた高邁さ」を考え、追い求める有効性を誰もか納得できよう。したがって、《仮想の体験に得てして納得する》要領の良い者にはこれが出

来ずに、表層の上滑りに終わることが少なくない。もちろん、思慮深いが頭の回転が早いという一見相反する性質の者も世の中にはたくさんいるし、こつた問題にもつと有利に立ち向かえる者もいるが、このような人はまれである。大部分は一定の時間をかけてひとつの結論を得るのに精一杯であるからである。

以下、本書の主たる話題となる「十七番目に設立された旧制高校」である松江高等学校の存在を位置つけたビジョンと実際の風景を確かな文献と証言で綴ってみたい。

「美しい松江でカルシユ先生とともに多感な旧制高校時代を過ごされた松高卒業

生の方は幸せである。」一人の他校のかつての高校生が言ったことが著者の印象に残っている。

著者は、ここで一人の「ドイツ人哲学者カルシユ」を登場させる。実は大正十五年から昭和十四年にドイツ語を教授した教師がカルシユ博士である。旧制高校の当時の多感な生徒にとって、数々のよき教育風景と教育者の《実に明確なシンボル》である。それを中心に展開した物語を旧制高校を今に語り継ぐ断片としてまとめ、みる決心をした。

それは、カルシユ博士の《追慕と敬愛》の念を絶やさない、老齢の《かつての生徒》にとつては今もなお、継続した風景で決して消滅させたくない、いつまでも青年のままに居られるかけがえのない

「永遠の思い出」であるからなのだ。

三・二 旧制高校の沿革

(一) 旧制高校の誕生と消滅

旧制高校は、戦後に併合、吸収により戦前の学制の中で唯一、消滅した学校である。卒業生の結束力は戦後依然として強く、また旧制高校への憧れともいっべき感情をもっている人が多い。

旧制高校は本来は七年制、実質上は三年制の戦前の高等教育機関であった。ここでは旧制高校とは三年制、七年制の高等科、大学予科の総称として述べる。

明治二十年に高等中学校が、東京、仙台、京都、金沢、熊本の順に五校設置された。同じく山口、鹿児島にも別個に設置された。同二十七年にはこれらが高等学校と改称され、以後明治四十一年までに岡山、鹿児島、名古屋に設置された。途中、鹿児島高等中学校は明治二十九年に一旦廃止され、また同三十八年に山口高等学校は高等商業学校に改組された。

この二校を除く、八校は設立順の番号を校名に冠したナンバースクールで、以後大正まで高校の新設はなかった。この種の別格のような地位を占めるようになった。この他には学習院があった。大正期になると、大正デモクラシーの影響もあり、高校が各地に新設された。

の卒業生は三年制の旧制大学へと進学した。したがって、昭和二十八年は新制と旧制の両大学が卒業生を出した。

(二) 旧制高校の評価

旧制高等学校は厳密には公私合わせて三十五校で、これを狭義の旧制高等学校とし、これに加えて三帝大予科があった。以上を広義の旧制高等学校としたことは前述した。ところで、三商大、一工大のうち旅順工科大は帝国大学昇格に予定されていたので除外し、三商大また山口高商のような学校と戦後の特設高等学校や愛知大学予科、戦前の官立大学予科、公立大学予科、私立大学予科を以て、より広義の旧制高等学校と定義する。

旧制高校は位置づけとしては高等教育

大正八年には新潟、松本、松山、山口に九年には水戸、山形、佐賀、十年に松江、弘前と続々と設置され、官立二十七校が大正期までに出揃った。また公立も浪速私立では武蔵、甲南、成蹊、成城が設立され、一気に拡充された。予科では北海道帝国大学予科が明治四十年に、京城帝国大学予科が大正十三年に設置された。

昭和になると、府立が設置され、唯一国外に設置された旅順高校が十五年に、また台北帝国大学予科が十六年に設置されて、旧制高校全三十八校が揃った。これとは別に内務省管轄で神宮皇学館があった。これは昭和十五年に文部省に移管され、その後昭和二十一年三月に消滅した。

戦争の影響は高校に及び、二年制への短縮、文科の学生の中途卒業と出陣と、多難な時期が続いた。そして戦後、すぐに三年制に復活したが、学制改革で事実上消滅した。戦後特設高等学校といわれる高等学校が秋田、山梨等に設置されたが、いずれも医専等の併設のような形で、

独立することなく消えた。

ジュニア・カレッジとして一高、二高を存続させ、新制高校の先輩格として三高を残す案があったが、結局、外地の高校に続いて、国内の全ての高校が完全に消滅した。専門学校は四年制のため、二十六年に消滅した。当時の高校二十四年修了組はそのまま新制大学に移行し、入試を経て新制大学に移行した。また、最後

機関の一つとされていたが、実質的には大学の準備機関であったのが戦後残存できなかつた理由がもしいない。実業校の場合、大抵は新制大学の学部に移行したが、旧制高校は教養部に移行した例が多く、明確に学部継承されなかつた。例外といえるのが第一高等学校で、東京大学教養学部はその生き残りである。

つまりその存在理由が必ずしも明確ではなかつたところに弱さがあったようである。単に大学進学への準備というのなら予科で十分である。すぐれた教育のために優良教師の確保、行事遂行に費用がかかり過ぎることもあったようだ。旧制高校の特色として、大卒の試験で大学に進学が容認されたこと、そのための三年間を自由に過ごせたと言われたし、確か

に自由であったことは事実であつたらう。しかし、教育の費用と自由を目的として高校が存在したわけではないので、これを廃止の理由とすべきではなかったのは当然である。が、このあたりに、旧制高校が生き残れなかつた理由があるかもしれない。

ところで、なお旧制高校の教育というものが魅力を持つて語られるのはいつたい何故か。一つにはやはり今日と違って、三年間の受験からの自由が保証されていたことと取りも直さず全人教育であつたことであろう。そして、その背後に将来を担う精鋭としての保証があつたことが、大らかな余裕の勉学に密接に関連していたことである。これらは、今の教育に必要なもので分かり易いことである。

まず受験という枠内の拘束から自由にいられることである。このことは人生の揺籃期に、神経を消耗する、もろろん厳しさや競争心を養つに役立つが、目標を将来の彼方においた人生設計とそのため

の大局的競争であり得ない。このような受験の近視眼的努力の愚かさからみたらきわめて魅力的な時間と空間を保証したのである。狭い専門性を掲げて受験に終始した人々の実態は人生内容において「貧弱かつ脆弱」である。思想的、人格的に、体力、精神力においても同様である。今日でも、少ない科目で受験可能にした結果、逆に細かい知識を入試では要求され、大きく周囲の必要な知識を動員して考えられない環境を造られた。少なくとも共通一次試験が世に現れる以

前には、総ての科目をまんべんなく学習し、試験に臨むのが所謂国立大学であつた。いま、考えてみて、政治も経済も社会もそれなりに短絡的ではなく一応見られるのも、新制高校や新制大学卒業ではあるが、受験時代のすぐれた教師の言葉での影響を今感じることができの、何とも不思議に思っている。

今日の学生を見ると、利害にはさといが、根本的問題に関して、与えられた思考回路の中での回答はともかく、枠を越える思考が受容できずに自己崩壊してしまつし、逃げ込むところが安易な居直りであることが多い。人格形成訓練に利となるものはないし、全人教育からはほど遠いものである。

主要な国で、本邦のような「妙な平等教

育」が行われている国はない。また、どの国でも行われているような英才・精鋭教育が行われていない国もない。このよ

うな国は世界の主な国の中で日本だけといつてよい。英才教育が悪といわれた戦後教育はまさにそうであつた。そこに、横並びにならねば「安心できない」といふ、そしてそれとは逆に、少しでも差を付けようとする無用の低次元の争いの原因が新たに生じてくる。ところが欧米、中国でも他のアジア諸国でも特別教育は実は厳然として存在しているし、万人が認めるところである。ただ日本と違つのは、特権に伴つ義務を自らの心底に深く刻みつけた信念として備えているかどうかの違いである。

現在の日本は事実上、精鋭といえる層

として一心、高級官僚や政治家といった者が該当するが、その実態は全く異なる。彼らにあるのは特権に伴う義務ではなく、特権に伴う利権である。

ところで、若者にはある年齢、ある時期まで、ある種の精鋭扱い、特別扱いを望んでいるところがある。これは必ずしも甘えではなく、早く一人前の人格として扱ってほしいと思う若者の心の別表現であり、これを認め、満足させるという意味において、優秀な者には精鋭教育が必要である。

没個性化され、自己の存在が個として認識されなかったことへの不満は時に暴発することは今までによく見られたことである。このあたり、今日の教育の欠落点のように思える。

人が内包する精神、人間性が特に旧制高校が持っていた自由な環境と全人教育のなかで発揮できたことは、注目すべき教育の根本であり、今にして最も強く求められている欠落部分である。となれば、これらのものを総体として考えるなら、旧制高校の教育はもつと注目されてしかるべく、その精神、理念の再展開可能な制度である。単純な復活は不可能であるが、せめて旧制高校の再評価再活用のビジョンを求めるべきである。

(三) 旧制高校と寮

旧制高校の特色に寮生活がある。全国各地から生徒が集まってくるので、二高の明善寮、松本高の思誠寮というように、各高校とも寮を有していた。寮も一つで

はなく、同好の志が集まってできた寮もあった。本質は異なるが、運動部の寄宿舎が、今日ではそれにやや近いものであると言えるかも知れない。

その寮では多くの人間との出会いがあり、そこで得られる人間形成が評価され、多く全寮制が敷かれていた。とはいっても一年生のみ全寮制というように部分的なところも多かったようだ。一高と旅順高は完全な全寮制であった。

寮生活についての価値については、旧制高校に関する成書には大抵述べられている。今日の大学の寮というのは単なる下宿であったり、学生の政治的運動の本拠地だったりする。しかし旧制高校の寮というのは、それ自体、教育の場として位置づけがなされていた。「高校あつて

の寮ではなく、寮あつての高校である」というのは名言で、それだけ寮生活に興味があった。ではそれはいつたい何であったのか。一言でいえば、それは周囲と自身の価値を納得するための、既存の価値の否定と再構築であったと思われる。戦後一十年未満のころ、戦前の古い体質を残した学寮が存在した。その中で著者も生活したことがある。入寮の日に即日退寮しようと思ったほどの不潔さが見かけ上の怠惰、理不尽な先輩との付き合い。どれをとつてもとても肯定できるものではなかった。しかしやがて、その大きな意味とその生活の価値がわかる。一晩かけて共に大声で議論し、ある日はストームで大暴れをし、またある日は酒を呑み心底をさらけ出す。これはそれまでの親

元では決して存在しなかつたような滅茶苦茶な生活であり、また過去の価値観を根底からひっくり返す毎日であつた。親から与えられた価値観、社会から与えられた価値観に対する根底からの疑問とその解決である。かのアインシュタインは十七歳までの知識・経験は総てひとから与えられた偏見であるといっている。これを根底から自ら検証するところにその人の獨創性を培う下地があるようなことを若き日に読んだことがある。これが、旧制高校寮にあつたのだ。少なくとも著者は住んだ大学の寮にもあつたと思われれる。同レベルの仲間と四六時中顔つきあわせて人間的にも総合的に相当採まれる筈だし、このあたりに寮で生活してみなければ、わからない価値が潜んでいる。

たよつた。

そこで出会わした人間関係は熱いもので、終生のつながりをもつ。したがつて他の同級生以上に繋がりがあつたのは勿論で、寮で培われた人間関係は一生にわたつて続くものであるといえる。自分の経験から、そう断言する。

価値の破壊の見直しは、情報が入りやすくなつているので容易であるように見える半面、実は強烈な人との切磋琢磨に欠けているので完全にそれを納得できない。また、強烈な出会いというものに会う機会も減つていいる。人生の揺籃期、胎動の時期であつたものや人々というのは一生にわたる財産なのであるが、この意味でもとくに旧制高校の寮というものにはもつと評価されて良いはずだ。

(三) 高等教育機関

さて中等教育が過ぎると、その上に高等教育機関である高等学校が控えていた。本当は四年制の尋常科と三年制の高等科の併せて七年制であつた。殆どが三年制で、七年制だつたのは府立高校、浪速高校など一部の高校のみだけであつた。戦前は男子のみであつたが、戦後ごく少数ながら、女子高校生も登場している。学級は文科、理科と語学によって分けられ、英語が甲、独語が乙、仏語が丙とされた。もつとも仏語をおく学校はほとんど見られず、一高に文丙、大坂高校に理丙、東京高校に文丙、理丙があつたのみであつた。高校に類似のものに大学予科があつた。有名なものでは北大予科がある。具体的

な違いは不明だが、高校に準じた扱ひであつたよつた。

女子の高等教育機関としては女子専門学校があつた。東京女専、仙台女専、奈良女専がそうである。期間は四年で、授業は語学、家政学、国文学などからなつていた。

実業系では高等工業、高等商業、高等農林、高等商船などがあつた。異色の学校に秋田鉱山専門学校があつた。期間は三年または四年で、戦時中に、例えば高商を経済専門学校に改称した。

なおここで注意しなければならぬのは、専門学校と実業専門学校は、制度上は別物であつたことである。つまり前者は法学、文学なども含めていたのに対し、後者は、工業、商業、農業などの実業を

主体としていたことである。戦前の私立大学は制度上、専門学校扱いから始まっている。

教員養成には、師範学校、高等師範学校があり、師範学校は小学校教員を養成する学校、今日の教育学部小学校教員養成課程にあたる。高等師範学校は中等学校の教員を養成する学校であった。女子が入学する女子師範学校や女子高等師範学校もあった。年限は四年であった。これらの上に三年制の大学が続き、さらには研究科や予科などが存在し、旧制の高等教育体系は複雑なものであった。

(四) 戦争の影響と戦後

満州事変に始まる太平洋戦争までの、一連の戦争は学校教育にも影響を与えた。まず当初予定されていた高等小学校(こ

の時点では国民学校(高等科)の義務教育化が延期となった。実業補習学校などをまとめた青年学校という、十九歳まで五年間の義務教育の学校が設置された。建前は青年、社会人層への教育ということだが、国民総皇軍化の下準備であったようだ。ただこの青年、社会人層への教育という理念は、戦後に青年学級という形で受け継がれた。戦時中には中等教育が四年制に短縮化、高等学校は二年制になる。文科は一九四三年をもって繰り上げ卒業、戦場へと駆り出されていった。「学徒出陣」とはよく聞かすが、大学生ばかりではなく、高校生もまた銃を取らざるを得なかった。その後、ついに一九四五年にはほぼ完全に学校としての機能は停止し、生徒は工場などに動員されていった。

学制に関して言えば、熟練した工場労働者を戦場に駆り出し、その後を素人の学生に任せるといふ暴挙があった。当ても、これらのことは指摘されていた。

戦後は、軍事関係の学校や、それに類する学校と進駐軍に認識された学校が廃校となった。海軍兵学校や陸軍士官学校、神宮皇学館は廃止された。在校生は転入という形で他の同格学校に移っていた。そんな中で登場したのが愛知大学で、予科には八十校から集ってきたという。学制については、高校が三年制に復旧され、高等小学校が義務教育化された。その中で教育制度の改革が行われた。これは進駐軍が押しつけたものだといわれるが、実際には南原繁東大総長らの手によった日本が自ら導入したものだ。

その改革で、まず高等小学校が新制中学校に移行、ついで中等学校が新制高等学校に移行した。この時中等学校の新二年・三年生は、併設中学校に編入され、そのまま中学校卒業まで在籍した。そのため年度によっては、旧制中学生と新制高校生が同時に卒業したり、また卒業生のいない時もあった。

戦時中からの流れではすでに中学校、実業学校の統一化は行われていたし、高等小学校(正確には国民学校(高等科))の義務教育化も予定され、戦後、新制中学への移行の過程で実施されていた。つまり、旧制の中学校を前後期に分け、前期のみ義務教育(含高小)としたのと同じ効果で、本質的な改革であった訳ではない。完全に消滅したのが高校、専門学校で、

小樽高商のようにそのまま新制大学に移行したところはともかく、他は数校まとめられて新制大学となった。高校は一部は新制高校として存続させようという運動もあつたが、結局新制大学の教養部となつて消滅していった。その過程も杜撰で昭和二十四年に一年生が二十四年修了組として、すぐには大学には行かず、『白線浪人』として問題になると六月に追加入試により進学させる混乱振りであつた。まともに学校として体が継続して残つたのは新制高校へと移行した早稲田高等学校だけのようだ。

三・三 松江高等学校設立

の人情風俗の頗る醇朴敦厚にして質実勤勉なるの點是なり、此等の長所が、不知不識の間に被教育者に及ぼす感化は、蓋し少なからざるものあらん。其他風光明媚、天下多く其の比を見ざるの點など、逸すべからざるの長所頗る多し。

松江市に高等教育機關を設置するの希望は頗る古し。明治二十三年第十四議會に於て、當時の方針に基き高等實業教育を以て地方開發を促すの主旨より、島根縣選出代議士が、山陰道に高等農林学校設置の建議案を衆議院に提出し、全院一致可決を得たるに始れり。然れども其の設置は容易に實現せず、遂に大正六年に至り漸く實現の運びとなりしも、而かも隣縣鳥取市に設置せらるる事に決定するや、更に大正七年政府に高等教育機關擴

以下は、松江高校設立の趣意書の原文である。

教育機關の所在地は、利便の點よりも寧ろ周囲の感化の點を多く考慮するを要す。松江高等学校の所在地は利便の點に於ても、山陰地方第一の都市にて、同地方の中央部に位し水陸交通の要衝に當れる等洵に其の宜しきを得たるものなり。而して感化の點に於ては、特に注意すべき長所を有せり。即ち我が國の神聖なる古典に載せられてたる、最初の地方にして、古来、敬神尊王の氣風盛なる事はなり。更に附近に散點せる後鳥羽上皇、後醍醐天皇の御遺蹟の如きは、この地方の尊王心を一層熾烈ならしめたる所以なればなり。次に注意すべきは、古来、この地方

張の議あるに際し、島根縣會の決議を以て、島根縣に高等学校設置に関する意見を内務大臣に提出し、遂に大正八年三月貴衆兩院を通過せり。斯くて同年五月高等学校創設寄附を主とする臨時島根縣會の開催を見、次いで大正九年十一月松江高等学校官制を制定せられ、翌十年五月起上せらるるに至りたり。其の間、縣市當局要路者は勿論、縣有力者の斡旋、努力は真に筆舌の尽くし得ざる所たり。

第四章 生徒の出身の背景

四・一 生徒の入学前の意識

澤田弘夫（六期理乙）¹

《高校受験から憧れの白線帽を冠る迄》
明治も終りに近い頃に、北陸の城下町金沢で生を享け、其処で小学校も中学校も卒えた私が不思議な縁で、気候風土も似かよった山陰の城下町松江で、二十才前後の多感な青春時代を過ごしたことを、今省みて沁み沁みと懐かしく想い出している次第である。

¹ 澤田弘夫氏は富山出身で昭和四年に卒業。その後金沢医科大学（現金沢大学医学部）に進学。本書に卒業アルバムや資料を提供してくれた。この頃の思い出や社会の様子が描かれている。

大正十四年三月金沢二中を卒業と同時に、受験した四高の入試に思いがけなくも失敗し、悶々の日々を送っていた処、文部省から翌大正十五年の高校入試は、

全国の官立（国立）二十五高校を二班に分けて、引続き二回受験の機会を与えることに決定したと発表され、全国の高校入学志願者を喜ばせたのだ。

即ち第一班は一高、五高、七高、新潟、水戸、山形、松江、大阪、東京、浦和、静岡、姫路、広島の十三高校、第二班は二高、三高、四高、六高、八高、松本、山口、松山、佐賀、弘前、福岡、高知の十二高校とし、受験生は各班から一高校を選び、志望順位を決めて、受験する高校へ入学願書を提出する仕組になっ

た。
私は第一志望校を四高とし、松江高校を第二志望校として四高で受験し、両高とも第一志望を理乙、第二志望を理甲としたのだが、松江高校の理乙に入学を許可された。

私等の時は二月十日から四日間（第一日は国語、漢文及作文、第二日は世界地理、日本史、物理及び博物通論、第三日は数学、第四日は英語）が一班の入試（各高校同一問題）一日休み、更に四日間同一科目で二班の試験（同一問題）を受け、四月上旬に合格者発表であった。

然し此の方法での入試制度は、各高校の事務係が東京に集まって、合格者確定の打合わせを行わねばならぬ繁雑さに加え

て、補欠入学者を決定する際にも、甚しく手間を要するために、私等の時と次の年即ち昭和二年の二回だけ試行されて廃止されたが、此の制度は、全国官立高校合格点数のバラツキ是正と、浪人救済に役立つことは確実であった。

私が第二志望校として松江を選んだ理由が一つある。私の学んだ中学の国語担任の老先生が島根県出身で、松江中学在学中にラフカディオ・ハーン（小泉八雲）先生に英語を教わったと言われ、又先生は古くから栄えた出雲の国は名所、旧蹟に富み、宍道湖に望む水の都松江は、東洋のベニスとも称せられ、風光明媚な落着いた城下町であると賞讃されたことが私の耳に強く残っていたからである。

れたことを有難く思ったものだ。
私等が入学した大正十五年の松江高校理乙合格者三十九名中で、島根県内からは、松江中学一人、浜田中学三人、大田中学一人の計六名が入学したに過ぎず、其他は東北の仙台一中、九州の鹿児島一中や全国各地から集って来たので、クラヌは大変賑かであった。
私が松江高校に入学する前には全く知らなかったのであるが、当時の学校長は富山県出身の乗杉嘉寿先生で、独逸語の高畠喜市先生は石川県出身、法制経済の加藤恂次郎先生は福井県出身で、何れも四高を経て東大を出られた方々で、私は北陸地方御出身の先生方の居られる高校へ入学出来たことを感謝し、今後三年間此の風光明媚な落着いた土地で、勉学に

さて私は松江高校に入学を許可されたものの、如何なる道順で、松江駅に到達すべきかと列車の時刻表をめぐり、同じ日本海側にある土地だから、北陸線、小浜線、山陰線の順に乗り継いで行くことに決めて、入学式の二日前の午後一時過ぎ金沢駅発の列車に乗り、夕方敦賀駅で小浜線に乗り換え、更に深夜綾部駅で山陰線に乗り換えて、翌午前六時過に目的地の松江駅に到着し、約十七時間の長い旅を終えてホッとした。特急や新幹線を乗り継いで短時間で行ける現在とは雲泥の差であるが、時代の推移なので致し方ない。
列車を降りて駅前に出た私には高校が何処に在るやも全く分らないので、先ず

人力車に乗り、行先を高校までと云った処、松江大橋を渡り、市街地を通り抜けて田園地帯の真中にある高校前で車から降ろされた。私は意を決して校内に入り、事務室の方に合格通知書を見せて、新入生の方が入寮致し度いと話した処、先ず入学手続きをとるよつにと言われ、それ迄の落着き先として近くの民家を紹介された。其後自習寮の南一寮三号室に入ることになり、同クラスの安藤貞君岡山医大卒 戦死と一年間起居を共にすることになった。同君は香川県の三豊中学を卒業後一浪して八高(第一志望校)で受験したとのことであった。彼は特に理数系に強く、理科生であり乍ら、それらの科目に弱い私を三年間何かと助けてく

勵まねばならぬと固く心に誓つと共に、第二志望校に入学したと言つ心の底にあった不満感も一気に吹き飛び、前途に明るい希望が湧いてきた。また石川県小松中学出身の徳田英義君が同じクラスにいて、一緒に学べることになり嬉しい思いがしたが、同君は高校卒業後体調を崩し、若くして病死されたのは残念であった。

つぎに、年代は三年ほど後になるが当時の生徒が入学試験と資格試験について座談会形式で語っている。

四・二 入学試験と資格試験(座談会)

白石 なつかしい面が揃ったな。始める

前に一言。厚顔にも司会を勤めるが、これは入学間もなく学級総代の互選があった。故朝日重雄と俺が選ばれて卒業までのクラス小使役をつづけたその延長ということでお認め願いたい。

(異議なしの声)

それでは早速話題に入ろう。まず入学。

《何故松江高等学校を志願したか》

岡崎 静岡中学のとき、当時静高生の次兄が「代数が弱いならその入試がない高校を受ければよい。中学生ではあるまいし親の許から通う必要はない、松江なんかいいではないか」というアドバイスが原動力になって受験することにした。

高田 僕は埼玉の深谷商業学校から受け

るのだから当然数学をさける必要があり、弘前、佐賀と他にもあったが義姉が境港にいたので近い松江を選んだ。

森山 僕も数学コンプレックスだったから松江にした。大体母方の祖父小林竹陰が優秀な数学者だったことが周囲に知られていたために反動的に嫌いになった。

増田 私も同じく入試に数学がないことが主因だが、大都会嫌いだったせいでもある。試験問題は全科正解だったと今でも確信している。

白石 昭和三年の秋当時すでに六十四歳になっていた祖父が来春せむ『四修』で高校をつけて入学せよ、との厳命。仕方なしに数学のないこと、中学の成績が良

い学科の多い処を探したら松江しかなかった。俺の合格を父が一番喜んでくれたが、二年後にはその父は他界したので只一つ「始めて終り」の親孝行ができたことに満足している。

松田 二文乙佐中壮先輩のアドバイスで家から近い松江を選んだ。私は数学をむしろ得意としていたので、数学のない入試が十二倍余の激戦を呼んだことに却って不安を感じたが、『四修』だからと余裕をもって受けたのが良かった。大体私の第一志望は高等師範学校だったが、松江に入ったのでよく境港の実家に帰り、皆からまたオツパイかと羨しがられた。

宮田 僕は大阪育ちだから地方の高校へ行きたかった。「高校一覽」を眺めていて

しきりに遊び心をそそられた松江にきめた。その松江にはじめて着いた時、人力車にのせられて市内を走った初体験は鮮烈だった。

今にして入試問題を省みると、現在の共通一次などは天地の差があつて人間味のある全人格的テストであつたことを懐かしく思つね。

岡崎 成程ね、「脱数学」でないのが二人いたね。何れにせよ皆が全国最高の競争率を突破して顔を合わせたので、我々は得がたい友人に恵まれているといえる。

(その通りの声) 皆さんも同感の人が多く、前時代的のくすんだ町で、早春には雨が多く、何だか一人で住むことにたじろぎ

を覚えたものだ。私は入試後に大社詣でをして帰ったが、そのお陰で合格したのかも知れない。合格通知は慶応受験中に受けとった。何だか淋しい気がしたがそれなら行こうか、と腰を上げた次第だ。

第五章 日本人教師と生徒たち

五・一 日本人教師

教官は教授、助教授、講師よりなっていた。多くは帝国大学を卒業した学士で、師範学校などのレベルとは異なっていた。なかには学位所持者の川邊喜三郎教授（ユウ）、大坪併治教授（文学博士）も見られた。

クラス全体をみるクラス担任と個人的に相談に応じてくれる副保証人の制度があり、後者の結びつきが強固であった。現在の大学初期からの学内行事と比較すると、大学や他高校からの教授の講演がよく設定されていたことに気が付く。校内の行事も主体的に行っていたことに気が付く。配属将校による教煉以外の生徒主事、書記、学校医（嘱託）などについては、類似のものである。

松江高校への赴任について教師の立場から松原武夫教授が語っている。

昭和二年に、東大物理学科卒業生の就職主任は、田丸卓郎先生であった。先生は力学の大家で、ローマ字論者であった。

先生曰く、「君は身体が弱いから松江高等学校へ行かないか。郷里の滋賀県も近い。丁度、松江高校の乗杉校長が来ておられるので紹介する。」と。私曰く、「先生に任せします」と。別室に案内され乗杉校長の面接を受けた。おかげで私は松江高等学校へ行くことになった。

昭和二年四月一日頃、京都駅から山陰線に乗って夜行寝台車で約十時間かかって松江駅に降り立った。もう六十年も前のことだから、SLで、トンネルがやたらに多く、窓を開けたら煤煙で大変だった。確か朝八時頃着いた。山陰特有の雨がそれほど降っていた。降りる人も少なかった。「ああ僕はこんな淋しい松江へ来たのかな!」と思いながらプラットフォームをゆつくり歩いていた。その途端に、東大

物理学科の清水吉之助先輩が出迎えて下さり、俄然明るくなった。そして北堀町の下宿に案内して下さった。

当時は有名な松江大橋は一本しかなかった。タクシーもなく清水さんの案内で静かな街を歩いた。

松江大橋をわたるとき、雨の晴れ間から出雲富士が見えた。これでいよいよ松江高等学校の先生かと覚悟が決まったようだ。

当時は、月給がいくらか聞きもしなかったし、言つてもくれなかった。就任後聞いたら年俸千六百円だった。

学年初めは四月一日だったと思つ。高島善市教頭が新任教師三人を教室を廻つて学生たちに紹介された。その三人は金山竜重さん、新谷三郎さんと私とであつ

気の毒な男もいたよ。(誰だの声)
白石 その他の学科で何でも……

岡崎 青山先生の『歴史学』は中学時代に学んだ日本史・東洋史の概念を根底から変えたすばらしいものだったね。それから松原先生の『物理学』で分子、電子、原子の話聞いて大体どんな物かわかった。
柳井先生の『動植物学』では、性の決定とか遺伝子とか今の生化学の講義は頭に残っている。

松田 そう、それに山口先生の『天文、土肥先生の『化学』、『エントロピー』の実験付講義は面白かった。『国語の水木先生の百人一首と狂歌・川柳は忘れられな

い。
白石 先生のお名前がだいぶ出てきたから、次は先生の思い出についての話だ。

五・三 恩師についての回想(座談会)

宮田 まず『平賀先生』。三年生の時の担任だった。大学進学の相談に行ったら大黒様のようなお体をゆすって「国文に行きなさい」とすすめて下さった。或る時教室で「茶化しては文学はわか

〴〵本名平賀財蔵 筆名平賀春郊(ひらがしゅんかつ) 万葉集東歌の研究者 宮崎県出身 明治四十五年東大国文科卒 歌人で若山牧水の親友牧水の主宰する雑誌『創作』の撰者、新万葉集 全十一巻昭和十二年改造社刊に工首掲載 死後「平賀春郊歌集(昭和三十四年)有志により刊行。

りませんよ」といわれたお言葉が妙に耳について離れない。『水木先生』は副保証人として三年間お世話になった。当然ご指導も蒙る筈にて北堀のお宅を訪問すると、大てい鹿野、白石、武内の級友が先生の麻雀のお相手をしている場合が多くお話を承る場ではなかった。しかし京大の国文科で卒論を書く時に「雑俎史」を題目にしたのは先生の感化によるものだった。そのため大変なお世話になってしまったが、その大恩にいまだに充分にお報いしてないのを申し訳なく思っている。
『加藤先生』には原書でリーフマンの終済原論の講義をつけた。昭和十一年に大阪府の視学官になられ、当時ゆるんでいた大阪府の綱紀の引締め尽力されたが

私個人も大変お世話になった。頭に特徴がある先生だ。

白石 さつき宮田が話していた『水木先生』は俺も副保証人だったが、教室は典薬之介、川柳の教授で、お宅では専ら麻雀の教授で最初から手ほどきを受けた。特に三年生の時は下宿が北堀のお宅から八十米くらい、鹿野と同宿だけによくお呼び出しがあった。武内も常連の一人だった。川柳の我国最高の学者、全く勿体ない麻雀師範だった。俺はそれにもう一人の先生の話がしたい。漢文の『佐川先生』。同郷の山口県人で俺の名前の隣を正しく「きよし」と読んで最初の人で流石と思った。黒板いっぱい中国本土の地図を書くことで有名だが河川の曲り方な

ど殆ど本物どおりだった。

岡崎 僕は今にしてもその佐川先生についてもつと「史記」の勉強をすべきだったと思っっているよ。「学成り難し」の言葉通りにね。そして次に「高橋敬視先生」について一言したい。

我々のつけた哲学の講義「ゼーレについて」はアリストテレスの著書、難しく分かりにくいものであったが、後日少々哲学がわかってきた時に高橋先生の話を出し松江高校の代表ともいえる偉い先生の教えに感謝したよ。

見事な講義であった。「君たちは及第したと思っっているが六十点以上をとつた者は数名だけだぞ」と一発かませ「支那非国家論」を堂々と展開して、ジョンやジャックなどが「ラフカディオ・ハーン」と呼ぶ小泉八雲は松江市役所に出した文書に「ヘルン」と自署している、ヘルンが正しいんだといった調子。漢文で佐川先生の得意の堯舜禹の講義をボロクソに批判をしていた青山先生の雄姿がなつかしいね。

増田 『山下左平先生』は心理学の教授で厳しい人柄のようだが胸の中は優しい温い心の持主であった。偶々私の叔父が東大で山下先生の先生に当るので私のことも陰から色々気にして頂いたようだ。

私の副保証人はさつき岡崎が話していた高橋先生で、私が一年生の三学期に病気になるって欠席日数が多く心配になって先生に相談に行ったら、「健康の方が大切だから無理せずもう一年残ってやりなさい」と超然とした哲学的「返事」で大慌てで私なりに無理してやつとこさ及第したことがあった。その時の私を山下先生も気にしておられたらしく先生もホツとさされて私の叔父宛に無事及第すと電報を打つて下さって却って私が慌てたという思い出がある。日教組の幹部に知せたい話だ。

岡崎 白石と小沢もたしか山下先生の温情に浴したことがあったのではないか。

白石 その通り。後のクラスメートと

下宿の項でも話すが、二年の時は北田町で小沢と一緒に下宿生活をした。二人とも夜の町が好きで帰宅がおそくなり従って朝寝が多く二学期の試験で山下先生の心理学がある朝も目がさめず、大急ぎで登校したが答案を書く時間はない。それで先生に二人揃って「寝坊して遅くなつてすみません」と謝ると、先生は「二人とも病気だろう」といわれたので再びいや寝坊して…」といいかけると先生は話が聞えない様にして「病気なんだろう」。病人の来る処ではない。二人ともすぐ医者に行つて診てもらいたまえ。これで先生の真情が胸をつち、直ちに知り合いの医院にいくと「いい先生だね」といいながら「偏頭痛」の診断書を下さったので

急いで先生の処に最敬礼して提出した。後で試験の結果が最低合格点がついていゝるのを見て小沢と二人で感激おく能わず先生の温情をかみしめた次第。(嘆声)

第六章 外国人教師と生徒たち

六・一 外国人教師

文部省は大学では傭外国人による専門教育を行った。この時期は専門教育については十分に日本で再生産された教官が行えたが、言葉についてはネティウを必ず一人傭って教育に当たった。日本人の給

料とは歴然とした違いがあった。

英語の講師については以下の通りで、大部分は学士であった。

シーボイド・バウマン(英国) BA、アーノルド・ミアーズ(英国) BA、エチ・エス・ベッセル(英国)、ウイティカー、エチ・エス・ギルソン(英国) BA、ハロルド・ジョンソン・ウッドマン(米国)が記録に残っている。

ギルソンは昭和四年にカナダから来日し

一九二五年十月にカルシュ氏が自願俸給閉戸二十五圓でドイツ語教師として採用されたが昭和二年四月東大出身理学士の松原武夫教授は年俸十八百圓であった。税を考慮せずに単純に見て、カルシュ氏は三倍強の報酬を得ていたようだ。

名前の発音は概ね当時の表記に従った。

た。ベッセルもウイティカーも満鉄から来て、日本語も片言は出来たし、ケンブリッジ大学卒業後直ちに来日した数学者であったと当時の生徒が証言している。多くは臨時の講師であったようだ。

ドイツ語の諸先生については、すべてドイツ人で、着任時にはヴィルヘルム・プラーゲは第一次大戦次の捕虜、フリッツ・カルシュは無職、ゲルハルト・ハーマツヘルは牧師で、ハンス・シュヴァルベは大学卒業直後の青年であった。カルシュのみが博士号所有者であった。なお、カルシュは終戦まで大使館付き副武官として奉職した。なお、シュヴァルベは松江高校退任後、戦後の大使館報道官として奉職した。

以下、生徒が語る外国人講師の姿を紹介

する。

六・二 英語の諸先生

(一) ギルソン先生

有田圃二(九期文甲)。

ギルソン先生は、私達が高校へ入った頃カナダからはじめて来日した人で、入学式の直後に河合校長がわざわざ文甲の教室へ案内して紹介せられたホヤホヤの外人教師であった。ところがその翌日私が自宅から歩いて登校の途中で石橋の街角にさしかかると、すぐ前をギルソン先生が初出勤の途上ゆっくりと歩いている。私の歩度からいけば当然すぐに追いつく。

有田圃二(九期文甲) 島根出身東大政治学元日本貿易協会専務理事平成五年十一月二十一日逝去

それまで本当の外人と英会話した経験など全くなかった私は、相当躊躇はしたが、物珍しさも手伝って思い切って追いついて「Good morning Sir」と挨拶した。一言二言話しているうちに、「君はどのクラスか」と聞かれたから、「一年の文科甲類」と答えると、「それでは自分は今日君のクラスで my first lesson in Japan をもつことになっている」と言われた。この出会いが非常に印象的だったのか、先生は私の名前をよく覚えていてくれて、その後も授業中によく私を指名して、又奥谷町にあった先生の宿舎にも誘われて行った。この先生について印象に残っているのは、或る時オッポン (offen) をどうしても「オフテン」と発音してゆ

らなかつたことである。しかし、それから二十六年後の一九五五年に初めて米国へ行った際に、NCCのDr. Brut Johnsonの家庭に夕食に招かれた帰途、同博士の自動車でメンフィスの街を走っていると、「前方に見えるあの大きなビルディングはハスピタルだ」といつ、「ハスピタルとは何だろう」と聞くと、「病人が行くところだ」とのこと、「それではホスピタルではないか」と言っても、「いや、ハスピタルと発音するのだ」といつてゆずらなかつたので、往年のギルソン先生の「オッポン」を思い起こしたのであった。ギルソン先生の申送りがあったのが、次の年に来たベッセル氏もその次のウイテーカー氏も私の名前を良く知っていて

時々子宿舎にも招かれた。満鉄から来て日本語も片言位は出来たベッセル氏について覚えてるのは、或る冬の朝、石橋の町外れから高校までの田舎道は一面に霧が立ちこめて、樂山の上に昇った太陽は満月の如く白く霧の中に浮かんでいた。そのような朝、登校の途中ベッセル先生に追いつきそになったので、いろいろ考えて「It's very misty. The sun looks like a moon.」と科目を留意して追いついた。しかつ「Good morning Sir」と言つて「Oh Good Morning.」と答えたベッセル先生はそのまま「It's very misty.」云々と、折角私が用意していた科目を、一気に自分でしゃべってしまったので、その話に困つたことがあつた。

三年生の時に来たウイテーカー先生はケンブリッジ大学卒業後直ちに来日した数学者で、まじめ一方、話題も少なく極めて愛想のない英国人であったが、やはり私はよくつき合った。丁度その頃、『婦人公論』の巻頭に掲載された左翼評論家猪俣津南雄氏の「社会的自覚なき生活を恥じよ」という論文が当局の検閲にひつかつて削除を命ぜられた。私の家は前述の如く本屋だったので、当然その削除部分も残っていたが、私はいたずら半分にそれを英訳してウイテーカー先生に渡し、添削をお願いした。数日後学校の廊下で会つと、「君の英訳を読んだから今晚来てくれ」とのこと、早速その夜先生の宿舎に行くとき「Are you a communist?」

との質問。「いや、ミスター・イノマタが「コミニニストかも知れない」と答えて事情を説明した。いろいろ添削したあとで、ソビエト連邦を私が「U.S.S.R.と書いたところ」に先生は赤インクで注釈して「Union of soldiers and sailors republics」と書かされた。勿論 Soviet Socialist's Republics とうまく駄洒落れたこと位はわかっていたが、その頃の私の英語ではそのシャレがわかっていくということをうまく表現することが出来なかつたのでそのまま頂戴した。今から考えると、先生としては私がそれを文字通り信じたものと思つて、中曽根首相流に言えば日本の高校生の知的水準を余程低く評価したことであろう。ともあれ、

英語にまつわる高校時代のそれらの出来事は、すべて永く印象深い思い出であり、後日私の生涯にも大きな足跡を残したものであった。

(二) ギルソン先生

田総武光(八期文甲)

私が瀧高に入学した当時の外人講師はドイツ語のカルシユ先生と英語のミアーズ先生の二人であった。二年の時であったと思うが、町で外人に出会ったので話しかけると、新任の英語講師ギルソンさんであることが分かった。当時奥谷町に外人講師のために、欧風の白亜の官舎が、まるで双子のように、行儀良く二軒並んで建てられていた。ギルソン先生はその

一軒に入居したばかりであった。偶々、私は近くの井原家に下宿していたので、片言の英語で会話をするのが楽しみで、よく先生の所に話しに行ったものである。先生も日本語が分からないので私と行動を共にするのを喜んでおられた。そのうち、一人暮らしの不便さから、私の下宿している井原家の離れに引越して来られた。先生は六畳の間に、私は三畳の間に住むことになった。こうして二人は親子のように行動を共にすることになったのである。夏休みになると、二人は一緒に隠岐観光や大山登山など方々一緒に歩きまわった。隠岐では、西郷の近くで、珪藻土の山肌に無数の穴居があつて、その一つに、壁画のあるのをみた。どうい

訳か今でもその壁画がはっきりと記憶に残っている。ギルソン先生は僅か一年で松江を去り、アメリカに渡られた。その後全く消息が絶えてしまった。

(三) ウッドマン先生

近藤 茂(二十一期理甲)

山陰なる松江の地は中央とは少しく離れておりまして、神代から続く出雲の人々は矢張り大陸系かと思われる容貌が多いのですが、時にふれてダーク・ブラウンの髪に鼻筋の通った二人の美少女を見かけました。松江は小さな都市です。日曜日など出歩いておりますと入出の多い松江大橋畔や県庁付近などでよく見かけたものです。

誰やろっと思つていましたら、某日、大橋付近の大山なる喫茶店に、スキー山岳部の先輩と入ってましたところ、突然先輩が紅茶のカップを置いて私めの背後へ視線を送りました。振り返りますとその少女が一人の婦人と入って来て「コーヒーを注文していました。」「あれはウッドマン先生の娘のエレナとモニカや。」と先輩は申します。「そして、あれはウッドマン先生の奥さんや。」

さて、そのウッドマン先生とは旧制松江高校で英語を教えていた小柄なアメリカの老人でありましたよ。昭和十六年入学の私どもには独逸人のシュヴァルベ先生と此のウッドマン先生とがおりました。

ところで当時、ナチス独逸と我国は同盟関係でしたが、高校の学園は何よりも自由を尊ぶ風潮がありました故、私どもはナチズムには反発を感じる毎日でした。従つて、若くてナチズム一辺倒のシュヴァルベ先生よりも穏和なウッドマン先生の方に親しみを感じる教官や生徒が多かつたと思います。

然し、時勢は次第に変わりました。松江高校へ合格し城山の校花の下を道遙した四月には、対独戦準備中のソ連と日本との間に日ソ中立条約が結ばれました。その頃には私め、ウッドマン先生のお宅へ、英会話の練習を口実に時々伺いました。令嬢には殆ど逢つておりません。その内、六月二十二日には独ソは交戦状

態となり、独逸機甲部隊の破竹の進撃にシュヴァルベ先生の方の意気は大いに上ります。そんな物情騒然たる内に夏休みが来て京都へ帰省しますと、「その内に大変なことがおこる。どつやらアメリカと……」とのひそひそ話を耳にしました。七月二十八日には日本軍の仏印進駐が報じられました。やがて英米と衝突する南進の始まりでした。

秋が来て松江に戻りますと、此の都も何となく緊張が漂い始めておりましたが、ウッドマン先生のお宅は戦争の騒りを感じさせない唯一の場所でした。お互いに戦争や政治の話は避けていたためかも知れませんが。

先生の奥様は日本人であり、当然二人の

令嬢は混血児であります。あの時代、日本人社会に囲まれて暮らしていた先生の心境は果たしてどの様なものだったでしょうか。

昭和十六年も十月に入りますと、東京では外交交渉の是非をめぐって近衛首相は東条陸相と対立するに到りまして、その十六日には近衛内閣は総辞職に追いこまれます。こうなりますと、在日外国人のなかでも独逸人は背を簞やかし、英米人は肩を窄めて歩く様になりました。

秋が深まるにつれて、喘息が持病のウッドマン先生は健康も勝れなかつた様で休講が続きましたが、お見舞いに参上します私めに、「モンペはアングリーだ。」とか言つてられたのは日本の時局に対する

柔かい風刺を含んでいたのかも知れませんが。それでも、世間には既に不足していた甘い菓子や本物の香高いコーヒーを出していたのだいたのは、日本人生徒に対する思い遣りだったのでしょか。

先生この話題はアメリカ映画の「駅馬車」とか「オーケストラの少女」があり、またスタインベックの農民小説なる「怒りの葡萄」に及びましたのも、私め「髙のふもと」の若き日の一駒でありました。ところで当時の日本は外国書籍の入手などは今の様に容易なものではなく、外国人（欧米人）と接する機会も、ミッシヨン関係の例外を除いては殆ど無く、勿論テレビ等はありません。欧米の生活や習慣を窺うのは彼の地で作られた映画が

唯一の覗き窓であり、これ以外にはその様なインフォメーションは皆無と言った次第で、此の窓を通して私どもは彼の地の生きた生活様式や考え方、将又日常話される会話の発言を吸収していた訳です。しかし、やがて運命の十二月八日が参りました。先生の一家は軟禁されたと聞いて私め、お宅を訪れる足も跡絶えておりましたが、年が代わったある寒い日、厚い毛皮の外套を着たウツドマン先生夫妻とふたりの令嬢が大きなシェパードをつけて散歩しているのを見ました。

奥様は「あらま、近藤さん、宅にはもう刑事もさんいませんから遊びにいらっしやい。」と言ってくれましたが、あれが先生と御家族を見た最後でした。御一家は

その後 交換船で帰米したと聞いております。

今でこそ、欧米は勿論、世界の何処でも一とびで行ける様になり、多くの日本人が海外の風物に触れたり、其処で生活したりしております。

しかし、私めの旧制松江高校の時代、ウツドマン先生のお宅は、狭いが海外を覗くことの出来た、そしてやがて非常に閉ざされていた窓の一つでありました。

(四) 英語教師 岡潤吉先生

神田好雄(十四期理甲一)

英語の著名人のエッセイ集をテキストに選ばれその講義をされた。夫々の論文に

は傑出した人々の考え方が述べられており、強く訴えるものを持った内容に満ち溢れたものであった。人間としての生き方、考え方、批判する力を養うのに役立つもので、中には今でも覚えているものもある。少し難しい所があると、「分かりましたか、もう一度訳して見ましょう」と、文の構造に至るまで詳細に説明されてから次へ進まれたものであった。期末試験には必ずそのような部分から和訳問題が出たものであった。何時かお宅にお伺いした時この旨をお話申し上げたら、

「諸君らには試験問題の山を当てさせてあげてるんだ。」と言われた。理甲の英語勉強には若干手加減して戴いていたのではないかと思われる。

たいへん寒い晩だった。私と同級の長岡君は、大井町駅近くの赤提灯に居た。井坂先生のお通夜の帰りである。私たち二人のおじいば、ただとめどもなく涙を流しながら、かんばんになるまで銚子の数を重ねていた。客は私たち二人だけだったが、店のねえちゃんが困った顔をしていた。

箱根でクラス会をやったときのこと、翌日は周遊の予定になっていたが、だれ言うことなく、周遊はやめてやめて、これから皆で井坂先生のお宅に行くのではないかということになり、そうした。人数が多いので大井町駅近くのうなぎ屋に陣取り、先生ご夫妻に来ていただいて夜まで歓談した。私たちが教える子どもにとっては

先生ご夫妻と歓談することが、何よりもたのしかったのだ。

私たちの在学中、各生徒は先生の一人に副保証人になってもらうようになった。年に二度くらい、その先生のお宅に招かれて、うちとけて懇談するわけである。

井坂先生宅の副保証人会では、いつもお酒が出て、最後には大國屋の「なべやき」が出た。奥さんがいつも快くもてなしてくださるので、私たちは先生の奥さんのような女性を、将来のベターハーフの理想像としていた。

先生の講義は、正直に言ってあまりおもしろくはなかった。ことに私にとっては、五十分間、目を開けているのに苦勞する

副保証人になって戴いたのは、岡先生が英語の教授であったため文科の学生が殆どで、水泳部の関係から理甲よりは小生一人だけで、一人だけ別にお宅にお招き戴いた。奥さままで同席され話に聞き入っておられた。先生はお酒がお好きで、小生一人を相手にしながら、小肥りの体格にもかかわらず、キチツと正座を最後まで続けられ、決して途中でくずされる事がなかったのは、今でも記憶に鮮明に残っている。小生のごとき学生一人に対して一人の人格として接しられ、自ら目下の者へもおそろそかにしない態度を保つものだという身を以て教えて戴いた。

酒の後御飯になると、先生は必ずあついで

御飯にカンした酒をトックリからかけられ、お茶漬けならぬお酒漬けにしてサラサラとさもつまそうに召上がったのが思い出される。酒を愛し、家庭を愛し、本当に円満な人格を以て明るい健やかな家庭生活を楽しんでおられ、此頃言われるようになったつらやましいような生涯を送られていたものと信じられる。

後、鹿児島の高七高に移られた事を風の便りに聞き、それから間もなく亡くなられた事を知った。お世話になりつ放しで申し訳なく思っている次第である。

(五) 英語教師 井坂清先生
《先生の追慕》

佐伯哲朗(十四期文甲)

あの頃、仏蘭西映画はルノアール、デュビエ、クレール、そしてフェーデと言った大監督が輩出しました黄金時代で、「モンパルナスの灯」がその映画館にかかっていまして、中学校と浪人時代を通じて、それは映画狂の私め、見逃していたフィルムでありました。そして、何やかやでその目を除いては見に行く機会がなかったのではありません。

映画はジョルジュ・シメノン原作のメーグレ警視シリーズによるサスペンスものだったと記憶しますが、デュビエ特有の巴里のノスタルジイが嫺々と描かれており、たしかダミアも出演していたと思います。なかなかの力作ではありましたが、極東は松江なる水都で遠く巴里を思

ことが多かった。先生の魅力は講義ではない。私たちが先生を追慕する気持ちはなかなか言葉では言い尽くせない。先生の追悼録の出版を考えないでもなかったが、「つまらねえものを出しやがって……」と、叱られそうな気が先に立った。先生のエスプリは、私たちの骨とともに灰ににしてしまつのがよいのかも知れない。

《先生の休講》

近藤 茂（二十一期理甲一）

井坂清先生には英語を教えていただきました。先生は仲の良かった藤野義夫先生（独乙語）に比べますと肉付きがよく、失礼な言い方も知れませんが、神経も

太い感じの方であります。仲々風格のある講義をしてくださいましたが、またその講義によって御自分を律しておられたのかも、私め思っております。

その井坂先生が、某忌某日の最終時限を休講されたのです。さては御病氣？それとも何か御不幸か？と私どもは心配したのですが、そこはそれ、若さに溢れていた時期のことです。先生のことにはさておきまして私め、早速映画に行こうかと思いつき、松江駅に近い山陰線の東にある映画館に向きます。映画館の名前は忘れましたが、当時松江にあった三館の内では最も「近代的」な劇場でしたよ。何しろ椅子席だったし、下駄を脱がずにも入場できるのですから。

いやった一刻ではありませんでした。ところがですね。一寸したハプニングがおこりました。EONの字が出て映画が終り、パツと電燈がつかましたところ、横に見覚えのある人が坐っているのです。ギョッ！それは井坂先生だったではありませんか！

恐らく、先生も此の作品が見たくて休講されたのではないしょうか。先生なら私めなどと違って御研究や御講義の肥料にもなりましようしね。たゞその時の私めとしましては、御挨拶をして良いかどうか判断に困りましたねえ。先生は顔を彼方に向けておられます。恐らく生徒の私めが横に坐っているのに気が付いておられたのでしょう。

れます。「
 「こんな噂話を耳へいれてくれるのは、家へよく来てくれる百姓女のおきさんだった。喜んで聞いていると、「まだ変わった話があります。」と言って聞かせてくれたのは、その外人さんの家に女中奉公している人の話らしかったが、手伝いとしての仕事は何でもはつきり決められていて時間厳守なので、その点はただらしてしまりのない日本人の家庭より気楽で、居心地はいいそうだが、駅へ用があつて使に出されるのに、ちゃんと時計を見て歩くのに何分と勘定して、何時何分に帰つて来いと決めて出されるのは、「閉口だ。」と言っていたとか。」

出雲のこの土地風に困っている私には、めざましい話だが、このパンクチュアリズムの徹底ぶりには恐れ入る。これはブラーグ先生に違いない。
 松江高等学校理科乙類へ入学すると一週に一回一時間のドイツ語会話の時間があつて、その先生がブラーグ先生、通称ブラーグさんだった。この先生は始業のベルが鳴ると、「ぱっ」と教室へとびこんで来られる。普通五分位遅れて来る先生が殆どなので、それ位に思つてベルの音を外で聞いて悠々とはいって来ると、「にっ」と一睨みされて、閨籠帳に遅刻のマークをされる。
 さてそのブラーグ先生の授業だがこれ

更にこれは時効になつていと思ひますので書かせていたゞきますが、井坂先生に接して彼方の席には美しく上品な御婦人が坐つておられました。恐らくは先生の奥様だったのでありましようか。
 第二次大戦の戦雲は全世界に拡がりつつありましたが、旧制松江高校時代の私の記憶に残る古き良き時代のひとつの思い出であります。

六・三 独語の諸先生

(一) プラーゲ先生

このころの外国人教師の印象は変な外人さんであった。「何しろ変わった人ですよ。頭の髪の毛が茶色で目が青いから、

確かに外人さんに違いないが、それにしちゃ小柄で日本人の中でも背の低い方です。だが道を歩かれるときやとても普通の人間にやあの真似は出来ませぬ。きつい目で真っ直ぐ正面を見ながら小股でとつとつと歩かれますがその速いこと速いこと、今ここを通られたと思う間に、ぎぎに向つの方へ行つてしまわれます。その人の朝の散歩が又変わつていきます。毎朝だから散歩だと思ひますが、朝運動がもしれませぬ。朝決まつた時刻に、決まつた道を、てくてくてくてくと歩いて来られます。何でも住居は奥谷だそうですが、道は浜佐陀街道です。それであの浜佐陀の大橋の袂まで行くと、くるつと向きをかえて、もと来た道を、おんなじ早さで、後も見ずに帰つて行か

た。
 最初の時はまあこれぐらいで済んだのだが、次の時間からはなおきびしい。いっぺん教わった事を忘れて返事ができず、へどもどしているとき、
 「だめ、だめ。」
 というのはつきりした日本語の叱声がとんで来る。
 そして黒い表紙の闇魔帳に何やら記入されるのだが、これが度重なるひどい。
 「お前のような者は、こんな学校へ入ってくる必要はない。家に帰って田の草取りでも手伝った方がいい。今、百姓は忙しいのだ。」
 噂によるとこの先生は青島でドイツ軍側の日本語通訳をしていたのだが、青島

が又大変だ。ドイツ語なるものに初対面でまだアーベーツエーを修業中のこのクラスへとび込んだ最初の時間に、いきなり黒板に大きく横文字の文章を書かれたのである、それも今迄見た事もない。後で聞くとドイツ語の古書体だそうだった。だが、そんなので書いて、これを一字づつ指して読めと仰言る。「無理だ。読めるわけがない。」と思っているいとまもあらはこそ、どんどん全員に当てられる。この先生はこうして当てるのに決まった順をこしらえて居られる。教室で着席最前列の右から左へ順に、一人もぬかさず規則正しく当てて、次第に後列に及ぶのである。だが新入生では誰もこんなのは読めん。当てられて、口をもごもごしている

と、「ナ、ナ、ネヒスト。」といわれる。ネヒストはどうやら英語のネキストの事らしいので、次の席の者が眼を白黒させていると指名は次へ移る。そしてこの指名順番は、見る見る教室全員に行きわたる。「どうなる事か?」と思ったのだが、やがて「なーんだ!」と思うことがあった。それはクラスの中に、昨年入学して留年した人がいたのだ。このクラスメートの存在によって、問題の文のアルファベットが、まず一字づつ読みつくされ、言葉も発音されて文章全体が、「ダスイストアインティッシュユ」(これは一脚の机である。)というのだとみんなにわかったのは、始業四十分ぐらいで、三十人の全員に指名が三、四回まわった後だっ

陥落で捕虜になった人だとの事だった。日本語にも通じていて達者だった。或る時こんな事があった。日本語の訳語についてちよつとした意見の違いが、我々との間にあつたのだが、その時突然この先生が黒板に立派な漢字で大きく『蘆』と『萩』の二字を書いて、
 「この区別を知ってるか?」と聞かれて、みんな閉口させられてしまった。
 又或る時、神様の話が出て、「ヨーロッパには神様が一つしかない。日本には、大黒様、恵比寿様、弁天様、稲荷様それぞれにお釈迦様まであつて人々がおがむ。これを多神教の国といつて、サヴェエツジの国がそうである。」これを聞いて憤然とした永井隆君は、直接この憤懣を先生にぶ

つつける言葉を知らず、私に向けてもらした。
 「日本を馬鹿にしている。ギリシヤには神様が沢山あるのに……。」と言ったが、しばらく考えて、「でも、もともと敗戦国の捕虜なんだから、怒ってみても仕方ないね。」

日本人の自尊心を逆撫するこのやり方だったが、もともと我々はヨーロッパの学問を志してこの学校へはいつて来たものなので、こんな事では怒れない。猛烈な会話訓練だって、我々の将来を思っているこの人のサービスピ精神の発露なのだろう。ひよっとしたら、私達が志向しているドイツ文化の魂が、こんな所にむき出しにされているのかもしれない。この先生

は好かれてはいなくても、会話訓練の辛さを理由に嫌がる人はなかった。

誰かが教室で、突然大声をあげた。ドイツ語の字引を見て、大発見をしたというのだ。「あった。あった。ドイツ語に、プラーゲンという動詞があって、日本語では『苦しめる』とか『いじめる』という意味なんだ。」このプラーゲさんは、一学期だけでやめて、帰国された。

酒井氏のプラーゲ先生に続いて学年は一年先輩の高校時代にドイツ語に精を出し、東京都庁に勤務、画集も世に出している米田勇次郎氏と昭和二十一年四月松江で内科医院を開業。昭和五十三年有志とともに寮の台地に記念樹と記念碑を贈った

鈴木繁徳氏のプラーゲ先生に関する思い出を語って貰おう。

(一) 厳しいプラーゲ先生

米田勇次郎(四期文乙)

最初の授業時間のこと、よく覚えている。生徒の一人は先生の指名で、「アラ、マー」と黒板に書かされた。先生の意図するものは、英語でハコネをヒヤコネ等といったのは邪道でアはどこまでもアで、ドイツ語はそのつもりで発音しろということだったらしい。

先生は、熱心は熱心だったが教え方が厳格で、質問した答えをいちいち、えんま

帳に記入したようだった。そんな風だったので生徒の反発を受けて学級全体がサボタージュし、楽山に逃げて行ってしまったりしたことがあった。ドイツ語主任の小林先生が心配そうに教室へ来たことを覚えている。そういうことがある前に、プラーゲ先生はドイツ語の歌をつたって聞かせようなど言っていたが、それは沙汰やみになった。先生は「私はプラーゲといわれているけれど、本名はプラーギウス(苦惱)というのでよく当たっているでしょう」と自分のことを皮肉っていた。

後年東京の音楽界で、『プラーゲ旋風』と

。米田勇次郎(鳥根出身四期文乙) 東大法学部卒、鈴木繁徳(鳥根出身五期理乙) 九大医学部卒 医学博士

称して音楽の版權」をブラーゲさんがや
かましく言つて騒がれたが、これあるか
なと思つた。先生は西洋人としては小柄
なひとだった。

(三) 拳骨教育

柴田午郎(四期文乙)

旧制松江高校から同窓会誌が送られてき
た。開いてみると、以前に同校で教師を
していた外国人教師のニュースがかなり
のページをとっている。私が同校に通学
していたのは大正の末頃という古い話だ
が、私はどうした嵐の吹き回しか、入学

音楽著作権の概念を持ち合わせてなかつた日本人か
ら著作料を徴収し、政府を巻き込んだブラーゲ旋風を
起こした人である。

許可になつたのは文科乙類という主とし
てドイツ語を教える科で、英語は従であ
つた。理科乙類という、やはりドイツ語
を主とするグループは、殆ど医者志望の
連中ばかりであつたが、ドイツ語などど
いう思いもしない外国語を主とする科に
入れられた私は、中学一年の時に初めて
英語を習つた時のことを思い出したりし
てやや憂鬱であつた。当時の外人教師は
ブラーゲというやかましいドイツ人で、
教えられるわれわれは毎日戦々兢兢であ
つた。一年半あまり経つてその先生は独
逸に帰られ、代わりに来られたのはカル
シュという先生で、笑顔を見せる大男で
あつた。以前と違つて教え方もやさしく、
ほつとした記憶がある。奥谷に新築され

た外人官舎に住んで居られ、可愛らしい
女の子が居た。後年その女性はアメリカ
で結婚、松江に来遊された時には、私も
みんなと一緒にその奥さんに会い、うる
覚えのドイツ語のうたを歌つた記憶があ
る。ところがである。今日この外人教師
ブラーゲ先生と、カルシュ先生とのこと
を思い出してみると、この二人の先生は
性格も教え方も全く正反對なのである。
一方は拳骨をふりあげる程のこわい先生。
一方はいつもにこやかで、甘えたい程の
大男の先生。しかし私が今でも思わず口
をついて舌に乗せるドイツ語は、やかま
しいブラーゲ先生に教えられた詩である。
ある時ブラーゲ先生が暗唱して来いとい
われた「インメン湖」といつ詩の一遍を

私は覚えていなかった。「シバタハコノ
ゴロ、ベンキョウシナイデス」ときんざ
ん叱られた。しかし今でも私の口をつい
て出てくるドイツ語は、ブラーゲ先生か
ら拳骨をはらんばかりに教えこまれたこ
とばかりである。あれだけいいねいに教
えられたカルシュ先生なのに、ドイツ語
に関する限り殆ど記憶がないのである。
戦後五十年、この頃青少年の教育問題が
やかましく、我々の若い頃に較べると、
その教え方などもずい分変わったらしい。
少きつく生徒を叱つて、新聞で非難さ
れている先生もある。しかし六十年前に、
拳骨をはらんばかりにしてブラーゲ先生
から教えられたドイツ語が、今でもすら
すらと私の口から出るのに、やさしく丁

箱の底からさがし出して、二本指の先にツマンで、やっと書ける位の小さな字で書かれる。

その頃生徒間の噂。「プラーゲさんは毎日カルトツフェル（ジャガイモ）ばかり食うツオルゲナ。あとを全部本国に送金しつちよるとや。それに、となりのポーマン（英）さんなど、月給が足りなくて、まだアルバイトまでしつちよるとや。」など。

一十年後、思いがけず、私どもがこの前轍をそのままふんだ。あの頃はこのドイツ魂のあれこれを想い起こしてガンバツタことである。

(五) カルシュ先生との初対面
酒井勝郎（五期理乙）

二期期の初め、会話のその時間に、教室でみんなが待っているとき、ドイツ語主任の高畠先生の後ろへ背の高い偉丈夫の人がついて来られた。「これがこれから諸君のドイツ語話を受け持つて下さる、ドクター・カルシュです。」と頗る簡単に紹介して、高畠先生は「はい」と教室を出てしまわれた。後に残されたカルシュ先生は、やたら大きな身体を教壇へ運んで挨拶らしいことをいわれるのだが、とんと我々にはわからない。話される言葉はドイツ語だろうが、プラーゲさんに猛訓

寧に教えてくださったカルシュ先生に習ったことは殆ど忘れてる。平凡な学生であった私の経験では参考にもならぬが私は「拳骨先生」の効果を価値あるものと信じて疑わない。

(四) プラーゲ先生の小言

鈴木繁徳（五期理乙）

外人の先生から直接外国語を習うなんて、生まれて初めてののこと。ともあれ珍しくもあり、嬉しいことでもあった。ところがこの先生案外ときびしい。何分にも毎日コツピドクやつつけられるのである。日とつげん、わるどもがいたずらをするに思いついた。チヨーク一本のこらずすかくしてしまった。……先生来て見て、

ちよつとさがしていたが、それと気づいて、ひらきなおった。「……日本の将来を背負って立たねばならない君たち……」に始まってジュンジュン。「今ドイツは敗戦国として復興に立ち上がったってけんめいである。（ものを大切にすることなど）外国人の私が、外国でこのようにしているというのにどつしたことが。将来が案じられて仕方がない……。」

一人立ち二人と立つて、スゴスゴと。純情な小学生そっくり。チヨークはもどり授業再開。なるほど、先生の如き、毎時間ま新しい長いやつで大きな字を書かれ、折れるとまた新しい分を出す、といったくあいだった。それにひきかえプラーゲ先生、小さなチヨークのヒトコゲを

練されたからと言って、一週一時間の一学期間では高の知れたものだ。一同ちんぶんかんぶん、とつとつみんなわからず先生は立往生の格好になってしまった。日本語は片言も御存じない様だ。「これで会話の授業ができるのかしら…」どうなるだろう。」と心配していたら、先生の方から打開策が出た。それは、英語が使いはじめられたのである。聞き慣れない訛があつて、わかり難かつたが、それでもこれだと中学時代の訓練が役に立つ。聞き返したり等もできたり、いよいよわからなきや黒板に書けばいい。こうして先生との間に会話の道が開かれると後は何でもなかつた。早速ドイツ文が書かれ、発音から会話の訓練になつた。こ

こで我々にとって実に目を見張らせる程意外な事があつた。ドイツ語会話の授業といえば、プラーゲさんの猛訓練しか知らない当時の我々だったので、又あんなやり方が、こんどはもつと強そうなの後任のドイツ人先生で、「どんな強行をされるのか」とみんな腹を据えていたのに、話を通じたら一向にそれらしい気配がない。いやむしろ温厚であつて、その親切さでは他の日本の先生より勝るとも劣らない。真面目さでも際立っている人だつた。一時間にも足りないこの会話の時間だつたのに、先生の思いやりの深い人柄と、日本語なしの不利ををしのいでやるうとする熱意がみんなの心にひびいた。授業の終わりには、「にこっ」とした笑顔

を見せて行かれた。
「プラーゲさんとはまるで違つのお…」
後でみんなは話し合つた。

(六) 家を壊したカルシュ先生

前田俊明

昭和十年の頃、私の年齢は昭和と同じですから、いまで言えば小学四年生のころ、両親が松江高校生相手の下宿をしていました。私も高等の教師をやっていたので、先生が生徒の下宿を訪ねることなど考えられないのですが、カルシュ先生はそのあり得ない訪問をやつてのける変わったひとでした。というのも、当時外国人といえれば子供にとって怖い存在で、生徒を

たずねてきたのはよかつたのですが、二階でドスドスンと音がしたので、天井の方を見ると座板を支える梁が折れてしまつたからです。とにかく大柄な先生の体重がこんな珍事件を起こしたようです。この梁はもちろん補強をいれ、今も健在ですが、これを見るたびに当時のことを思い出します。このときの高校生は十三〜十五期生と思われれます。

(七) 日本人のドイツ語教師

《ドイツ語よもやま》(座談会)

岡崎道夫、白石磷、高田富之、増田輝男

松田美太郎、宮田正信、森山岩治。

岡崎道夫(静岡出身)(九期文之丞、東大経済二菱
鉱業、住友金属工業を経て、住友物産 元副社長・白

高田 何といつても『カルシユ先生』だ授業前の点呼「アッサヒ、アダチ、イシワラ、イジユミ、イジユイン……」を思い出すね。(同感の声)辻が言いにくかったようで「ツチ」と発音したのではな

石澤(山口出身)(九期文乙卒(京大経済)日紡、ユニチカ、レナウン社長など歴任・高田(富之)(埼玉出身)(九期文乙卒)東北大法文法通算十期 衆議院議員 共産党後に社会党所属・増田(輝男)(東京出身)(九期文乙卒)京大経済、日本鉱業、三井精機、東洋精機など歴任・松田(美太郎)(鳥取出身)(九期文乙卒)東大政治、日本興業銀行、大興製紙、宮田(正信)(大阪出身)(九期文乙卒)京大国文、文博、滋賀大文学教授、著書「雑俳史の研究」、森山(岩治)(新潟出身)(九期文乙卒)東大法独法、日本穀産鉱業、経済企画庁、行政管理局、本州四国連絡橋公団など歴任

いかな。(その声)

松田 大体高校は自由の学園で特に文科く充分な余暇がもてるいい学校だったと思う。それで文乙はドイツ語だけは夜必ず復習して予習もしてないといつてゆけないと思つて、語学以外は合格点だけとつておけばよて一心に勉強したよ。藤野先生、高島先生の音読、カルシユ先生の会話と歌は思い出深い。

増田 叔父から大学で経済学部に行くなら独逸語をやれといわれて文乙を志願したが、藤野教授の文法は一時間に二十頁のスピード講義で楽ではなかったね。(全くの声)

岡崎 ABCの発音さえもできない我々に何と高島、小林、藤野、高橋、カ

ルシユ先生達で毎日二時間ペースで鍛えられた独逸語は大変なものだった。同じ文乙にいた次兄から中学校の英語みたい

逸語で演説しようと思つて、大新聞の社説に出た「階級闘争の弊害」を自分なりに翻訳して小林先生に見せたら全面的に訂正されたものの、とにかく全部暗記して「ファルシユ、フォン、クラッセンカンフ」の題名で演壇に立つて一席ぶった。

でやるしかないぞ、と釘をさされていたので独逸語だけは熱心にやっただよ。

森山 片山双解独逸語辞典もひけないままに「ペーター、カーメンチント」の独解をすすめ、更には「デンケン、ウント、レーベン」で独逸的生き方を学ぶ毎日であったと思う。グラマーのテストについて今では独逸でも余り使わない『ヒゲ文字』で直して返して下さった藤野先生の情熱には今でも胸つつものがあるよ。

これをカルシユ先生が聴いておられて「シエーネ、レーデ、ゲマハト」と大変褒められた。戦後に同じ衆議院議員として一緒になった七文甲福永健司。先輩から「一年生のくせに独逸語で演説するんだから驚いた奴だよ」とよくいわれた。(感嘆の声あり)

高田 独逸語はよく勉強したね。一年生の秋恒例の弁論大会が開かれた時に独

。福永健司(七期文甲)滋賀県出身、陸上選手(棒高飛び) 国会議員連続四十年、国務大臣七回、衆議院議長

白石 独逸語が大事だとはよく知っていたが一学期はいつも落第点ばかり。それは放課後はランニングの猛練習で疲れる上に夜はストームや『活見』に費やして明かに勉強不足だ。二、三学期は大慌てで岡崎に試験の『ヤマ』をかけてもらう等してギリギリの及第点に辿りついたのが実情。ただ高畠先生の独逸語の時間は劣等生なりに面白く楽しかった。

森山 『小林先生』もユニークな教授だった。快適な音読だったが、訳すときの日本語がうるさかった。

詳しいことは次に岡崎に語って貰おうではないか。

よろしく頼む。

岡崎 しからば、

には厳しく、言葉の選択に慎重な先生の性格によるものと私は考えている。

こんな事を申し上げたら先生は例の「下らん」「問題にならん」もう一つ甚だ教授らしからぬ表現だが、「糞にもならん」の三つの常套語で片付けられるだろつ。

先生は吾々が入学した昭和四年の初めに二年間の独乙留学から帰朝されたばかりだった筈だが、坊主刈りの先生がいかつい肩に黒い教授ガウンを引っかけて、のっそり教壇に上がる画には、所謂洋行帰り等の風情等は少しもなかった。

言葉の少い先生は、教室でも挨拶とか訓辞のような余計なことは一切喋らない。遅刻の弁解、代返も聞き流して授業に入

(八) 独逸語教授 小林松次郎先生

岡崎道夫(九期乙)

先生は寡黙、素朴な風貌、超然的態度の故に名物教授に列せられているようだが先生の本質はその様な点にはない。先生の言行が風変わりに見えるのは、まわりの世間的平均人間の方からで、先生御自身は極めて、先生御自身は極めて天然自然、正直に振舞って居られるだけで、何がおかしいのか考えてみた事もなかったのではなからうか。

「頑固松」の異名もあつた。確かに御自分の考えに頑固なまでに忠実で、他人の彼是の思惑など毛頭気にかけるような方ではなかつたが、俗に言われる超然とか、冷やかな無関心等とは全く異なる。己

る。生徒の読む下手な独乙語を黙然と聞き乍ら、宥越しに遠い山並みに見入っている生徒の横顔は口ダンの「考える人」のようであつた。

独乙語の教授について、先生は確りとした信念を持って居られて、全く頑固なまでに忠実であつたから、生徒は面喰つ事が多かつた。

一国の言葉は、其の国の歴史、文化、国民生活の所産であるから、外国語を学ぶには其の国を学ぶ態度でなければならぬ。夫々の言葉の持つ本當の心を解することが肝要で、単純に辞書にある日本語を引き当てれば済むというようなものではない。外国語を書物の上だけで勉強すると

あれば、まず情緒あふれるロマンを読むがよい。文章も美しく、音律も良い。理論書を読みたがる青年が多いが、哲学のない理論は役に立たない。美しい文章を正しい発音で繰り返し読んでいると自然にヴォルトゲフールが分かかって来るものだ。独乙語は独乙語で理解した方がよい。無理に日本語に直すと文章本来の意味を失う。文法の修得も其の為に必要である。

以上のようなことから、教室では問題が起る。時々先生はテキストを自分で読み初める事がある。美しい発音で流れるように読んで行かれる。時々独り言のように注釈されるが、逐語的には訳して

れないから頁はどんどん進む。初めの一、二頁は下調べもしてあるが、次第に生徒の方はあわて出す。

ご承知の通り年間の試験の総点が及第の境であり、文乙で独乙語が一つでも注意点なら落第は必至だから気が気でない。他の先生ならば何とが講義を脱線させて進行にストップをかける悪知恵もあるが、小林先生には一向効きめが無いのである。

処が先生も時々妙な日本語を創出される。例えば、「よし登る」という言葉はあっても「よし降る」という日本語は無い。独乙語は大変律儀だから両方がある。此の場合先生は平気で「よし降る」のである。生徒は得たりと大騒ぎするが、先生は平

然として、日本語に無ければ無理にせんでもよい。分かればいいさと片付けてしまつ。又雪崩がシュトツセンするを「衝く」と訳された時、暖国産の私にはそのような言い方があるのかどうか分からなかったが、実感のある表現だと思つと申上げると、先生は嬉しそうに「僕の国の新湯ではそう言つんだよ」と遠くを見るような表情で答えられた事を思い出す。

テキストが「法律学入門」のような理論書となると面倒である。試験に出たのが、先生が吾々の辞書の日本語を認めなかった処で、さてどうしたものか。答案を提出し乍「これで宜しいですか」と聞いた

ら、先生は一読「フン、くだらん」と横を向かれたが、減点にはなっていないかった。

学年末になると低空飛行組の陳情で、最も苦手とされる先生の御宅に押しかける。先生は何の用かとも言われず平然と会つて下さるが、話が要点に及ぶと「あれは独乙語が全然分かかっておらん。問題にならん」の一言で終りである。当人は悲観するが、試験に出席して答案を出している限り、及第最低点だけは頂戴出来るのが常であつた。

副保証人をして頂いている生徒は、時々先生のお宅に呼ばれて夕食の御馳走になつた。吾々の御膳には御心盡の料理が並

ぶのに、先生の方には豆腐一丁入った鉢がのっている。それで手酌の酒をうまそうに飲む。こんな時でも先生は教室同様言葉少ないのだが、吾々の勝手な会話に耳を傾け、時々合槌を打ったり、例の常套語を呟いたり、珍しい笑い声を発したりし乍盃を重ねる。静かな楽しいお酒だが本当によく飲まれた。一度皆で相談してスコッチを掲げて行ったら黙って見ただけで全然飲まれなかった。

先生は御自分から話題を出される事は殆どない。文部省の期待した思想善導は固より、教訓めいたこと、経験談等全く口にされないから何を伺ったか記憶に残っていないが、一度故郷新潟の話をされたときは、心から楽しそつで初めて先生の

感傷にふれたと思つた事を覚えている。飲む程に陶然とした先生は、言葉も態度も少しも変わらない。特に酒仙の感があつた。

先生の遺稿『高級独乙文典』の序文にカルシウ先生も「盃を傾け乍物静かに沁々とした口調で話す彼の姿が今も眼のあたりに浮かぶ」と書いて居られる。「あの過ぎ去つた美しかりし日々の想い出の、如何に夥しく浮かび来る事が。」そのカルシウ先生も世を去られた。

私は思つ。先生は決して奇人でも変人でもない。良寛和尚に似て天然自然、あるが儘の無心で人に対する事のできた大徳として、名物教授の筆頭に列せられて然る可きである。

(九) 独逸語教授 原田和二郎先生

森永 寛(十七期理甲二)

たしか二年の折クラス担任をして頂いた原田和二郎教授は、また理科甲類のドイツ語担当でもあつた。ドイツ留学から帰朝されて間もなくの頃であつたように聞いていたが、講義が始つた初日、自分は将来小説を書いてみたいと洩らされたように記憶している。教科書は、『スイスのゲート』といわれたというケラー(『緑のハイブリット』の著者)の小説を使用されたように思つたが、内容は殆ど忘れてしまひ、表題だけを臆げに覚えている。また、何時であつたか講義の途中で、自分は眼鏡があわなかつたため、ノイローゼ

になりかけていたが、幸い松江駅北の古瀬眼科で眼鏡の処方が間違つていたのを見付けて貰ひ(恐らくは乱視があつたのであろうか)助かつた、古瀬博士は名医であると述べられたことが、不思議と頭にのこつており、後年、医療に従事するようになつてから、いわゆる不定愁訴をうつたえる病人を診、視力について話すとき、いつでも、原田教授のお話をうけ取りすることにしている。学校の授業では、こつした余計なようなことが、案外のちになつて役立つのかも知れない。原田教授のご健在をお慶び申し上げます。

(十) 藤野義夫先生・井坂清先生

古山甲子男(二十三期文二)

昭和十八年秋、或る休日の午さかり、端底部クルーの私たちは、両先生を松江大橋の北詰で「やくも艇」に迎え湖上に漕ぎ出した。戦局は既に敗色濃く、校内では専ら国民服姿で通されていた両先生も、今日ばかりはくつろいだ浴衣がけて乗込まれ、私たちを相手に明るく談笑されていた。そして湖心に近くなつた頃、藤野先生がふと独り言のように「湖はいゝなあ。本当に湖はいゝよ」と繰り返して洩らされたことが、その白生の風貌とともに今なお耳朶によみがえる。外国語を専攻教授されていた名コンビ気鋭の両先生が山陰の田舎街にも例外なく追つてくる厳しい時局の下でどのような想いで過ごしいられたか、お二人とも逝かれた今とな

つては確かめようもないが、さり気無いこの言葉のうちに、仕舞い込まれていたりペラペラな胸襟が秋天の湖心でほんの一時ほころびたと推察するのは思い過こしであるうか。余りにも短すぎた両先生との出逢いではあった。

(十一) 独逸語教授 藤野義夫先生

藤田 田(二十五期文二)

藤野義夫先生はドイツ語の先生で、大変御世話になりました。私のある学期の成績が七点だったので大変喜んでおりましたところ、先生が「ちよつとこい。」とおっしゃるので先生のお宅に参りました。すると先生は「藤田君、君のドイツ語は七点ではなく四点だよ。」とおっしゃるの

です。「ではなぜ七点戴けたのですか。」と尋ねますと、「君は面白い男だからだ。高等学校と言つのは学校の成績だけで点数をつけるところではありません。人間全体で点をつけるのです。私があなたに七点あげたのは、あなたが非常に面白い人間だからです。決してドイツ語が出来るからではありません。ドイツ語自体は四点です。」との事でした。

それから私が東京大学を卒業した後、東京で先生にお会いする機会がありました。その時、先生が面白いことを言っておられました。「昔の旧制高等学校の時は、教室に入っていくと人間的にこれはかなわん、こいつは恐ろしい男だなという感じのする男が沢山居たのもです。最近はそのような学生がいなくなつたので

寂しい。」との事でした。私も六十二歳になつた現在、若い人を見てこれは相当な大物になる男だなと言つことがよく解るようになつてきました。自分が若い人を見てその人の将来が読めるという立場になつた時に初めて、先生がおっしゃつていた自分が見て恐ろしいような男がごろごろいるとおっしゃつた意味が、よく解るような気がするようになりました。

(昭和六十二年記)

第七章 淞校時代を思い出す

このような時代において社会思想問題が起こり、社会における思想運動とともに学生の間にも思想運動が現われた。この

対策のために昭和三年十月、専門学務局内に学生課を設けたが、翌年これを拡大して学生部とした。七年八月には国民精神文化研究所を設けて、思想問題の研究と指導にあたった。さらに九年六月、学生部を改めて思想局を設けて、学校および社会教育団体の思想上の指導や調査にあたった。十年十一月には数学刷新評議会を設け、思想問題に対応して、国体観念、日本精神を根本として、学問と教育の刷新を図るための思想を確立することに努めた。この評議会は、戦時体制にはいる前夜に設けられた審議機関であった。間もなく開設される教育審議会に対して教育改革の基本的な路線を用意したのである。

平成元年九月大阪市北浜大阪俱樂部にて当時の世相・校風・先生・友人などを知る一助として語った今にして思う松江三春の花の影を紹介する。

七・一物故クラスメートを偲んで(座談会)

松田 『竹下勇』だ。米子中学からずっと同じコースを歩いて崧高自習寮も同室の生活だった。品行方正で童顔の美少年のため上級生から目をつけられて誘われてカフェーなどの酒飲み屋に出入りするようになった一方、次第に左翼方向に傾き遂に三年生秋の提灯デモで首謀者と見られて退校処分になってしまった。後

日いろいろ苦勞して九大の専科生から本科に移って法学士で卒業して宇治川電気に入ったが、召集されて惜しくも太平洋上で戦死した。皆から愛された好男子だった。

高田 東北大学関係の二人。一人は朝日重雄』で松江からずっとあの温和な人柄にずい分世話になった。他の一人は、宇佐美清』。東北帝大入学では先輩、柔道マンだったが、左翼で松江を放り出された似た経歴の主。戦後役人にもなったが、神田の学士会館で最高の囲碁の名人で七段だった。僕は八目おいてやったが三年前に他界した。体や面は、こついが気の優しい男だった。

岡崎 入学最初に訪ねて来てくれた

『伊集院郁三郎』、『杉山一太郎』の両人がなつかしい。二人は北三寮七室の住人だったので私もよく行ってストームまで一緒にやり園山寮主任に嫌われる因を作った。杉山は戦死、伊集院は東大から五十年七月の逝去まで仲良くつきあっていた。

白石 一緒に下宿した二人と、卒業後仕事で世話をかけた一人について話しよう。一年生では『小沢精一』が同宿人だが、皆もよく知っている多喜子夫人との恋愛結婚で名をあげた好男子で思い出はつきない。三年生の同宿は『鹿野明』だ。教室の席も『シカノ、シライシ』と並んでいた。崧高には珍しい大連一中の卒業生。気持ちのいい男だった。後の下宿の

間もなく通訳までしたと今でも伝えられている賢人が私たちのクラスメートの一人だった。(惜しい男だ！の声)

宮田 『小沢精一』、中学の一年先輩で元気もの。出征の際大阪ガスビルで在阪有志が集って壮行会をした後、夕闇の御堂筋を北へ歩み去る後姿を『竹下勇』らと見送ったのが最後。その竹下もしばらくして三宮駅で送られて出征したが、二人とも南溟に鬼人と化した。いずれ劣らぬ純情正義の熱血漢だった。惜しみても余りある友。

次は『鹿野明』だが戦争で一番貧乏くじを引いた男といえる。彼の思い出を書けば一冊の本になる。重傷の不運にもめげず後半生は郷里津和野の町長を二期つと

項でまたこの二人の話をすることになるが、宮田からも色々話があるだろう。

卒業後仕事で世話になった男は三和銀行で若くして常務に進んだ『田中収』。仕事のしすぎで昭和五十年入院。秋の臨終一週間前に見舞いに行ったら、「仕事より先ず自分の健康が大切だぞ」と握手しながらの話が『収』の遺言になった。

増田 一年生の時に質屋の効用を教えにくれた同県人『大日方』。二年連続トッペった勇士だった。もう一人は『松浦安一』で共に独逸語の成績不良者、小林先生の試験の前夜一緒に勉強をはじめたのは良かったが、すぐ寝てしまつて当日は白紙答案を出したら教官室に呼ばれてこつびどく油を絞られた思い出がある。提

めて貢献度も大であつた。良妻良子に恵まれた生活は最も幸せな時期であつたろう。一つ彼の友情秘話をきいてほしい。

私は戦後山口市にいて彼と行き来していた時に塩が不足しているのを知つた彼が或る日リュックサックに一杯塩をつめて戦傷の不自由な体で山口まで運んでくれたのである。私は嬉し涙にくれた。その彼の葬式には増田と二人で参列したが、もう去年のことになつてしまつた。次に『多久和興』、クラス一番の変り者だつた。京大在学中のある日、新京極でぼつたりあつたが同じ文学部にいながら久し振りに顔を見たので、「どつしてる」と声をかけると、「歩いとる」の返事、二の句がつけなかつた。戦後に山口在住の頃この男

灯デモで竹下同様退校処分、後に戦死した。全く善人の快男子だつた。それに忘れられないのは数え年十六歳で入学した秀才の『辻久一』。驚いたね。

森山 その『辻久一』だが、クラス一番の若年、クラス一番の学業成績。巨大な頭に強度の近眼、上体を前屈しても手の指先が膝までしかつかない固い体、五十頁くらいのノート記入文なら見ずにその通りが何時でも書ける、漫才のレコードは一回かけたらずくに真似が可能、毎夜寝る前に小説を一冊必ず読了して筋書きはすぐ書ける。ヘビースモーカーで映画娯楽論にこだわつた異色秀才、語学は短時間でマスターする天才で兵役で上海にいる時一週間の研修をつけた中国語で

一晚とめろ、とやって来ただけで消息なしだったが、後で聞けば神戸少年鑑別所々長を最後に引退して松江に帰り数年前に逝去したとか。

白石 次は自習寮と下宿の話だ。

七・二自習寮と下宿の話(座談会)

松田 竹下勇と同室から始った自習寮の生活で忘れられないのは昭和五年に寮に払っていた食費が十五円から十一円に下がり小遣銭が三円も増えたことである。当時寮の食堂の担当者は八理乙の田村忠雄さんで賄側との長時間に亘る交渉において二割値下げを要求して譲らず理をつ

くして説明して相手の説得に成功したお陰である。その時の田村さんの言動は実に立派だったことをよく憶えている。彼は当時陸上競技部の主将をつとめその年の夏のインターハイで松江高校が全国制覇した時の機関車の存在であった。(快男児だったの声)

宮田 一年生は下宿、二年生は寮、三年生はまた下宿で過した。入学時入寮許可を得たが費がへりのない荒いものに辟易して直ちに川津村役場裏の野津さん方に下宿をきめた。岡崎が橋の上から大声で呼んでいる声が今も聞えるようだ。二年の時は南一寮にある籠球部の一室に入った。三年生はまた下宿にして川津村の石倉さん方に行って比処で先住の岡崎、

森山と同宿になり同じ釜の飯を食って卒業した。今でも松江に行った時には寄っているが、温かい心で歓迎してくれるのが嬉しい。

岡崎 三年間寮をやめて下宿住いした。入学直後は石橋の自転車屋の二階に一ヶ月いてすぐに北堀の材木屋に移ったがこれも一ヶ月でかわって川津村の橋本地区の石倉さん方に入居して卒業まで落ち着いて過した。先住者の森山と一緒に三度の食事も主屋の炬燵で食べて家族以上に親切にしてもらった。三年生の時に宮田が同家に来て川津の三人衆といわれることになった。寮の伊集院と杉山の室によく通ったのは前に話した通りだ。

森山 もつ私のいうことではないようだ。

増田 私も三年間下宿だったが、今から思えば寮なしでは高校生活の気分を半分しか味わってないような気がするよ。

白石 一年生は陸上競技部のいる北一寮で級友の『小山定』と同室でたのしかった。寮生活の思い出はストームと『寮雨』⁶⁾。ストームで窓ガラスを割って園山寮主任から「二枚の始末書をとられ、ために翌年は入寮不許可で北田町に小沢と同じ下宿生活となった。二人とも『活

6) ストームとは生徒たちが紋付き、袴に下駄履きの出で立ちで、「富士の白雪ノエ」を歌いながら宿舎の廊下をカタカタ音を立てて歩き、皆をたたき起こす。記念祭の時などは街に出て、松江大橋の行き着くところに交差があって看板をはずしたり、お巡りさんを冷やかしたりする悪さをしたが、大目に見られた。酔つと二階の窓から並んで一階放尿するのを当時『寮雨』と言ったのであろう。編者が寮生であった大学紛争以前はこのようなことが伝統として一部残っていた。

見、正直屋、東京庵通いで朝寝坊が多く山下先生の試験におくられて温情に助けられたのは前述の通り^ニ。翌年は一学期が南二寮で一学期から北堀の水木先生の宅に近い持田久栄さん方で鹿野明と同宿して彼の優しい心根に恵まれ、持田さんの親切なもてなしで卒業まで楽しい下宿気分を味った。水木先生の麻雀のお相手は前に話した通りだ。

高田 下宿ばかり。石橋通りにある寺の裏の小部屋に住んでいた。左翼に走り出した頃は当時非合法の共産党との連絡

ニ オテン屋（正直屋）、ウドン屋（東京庵）でいわば松江高校生の溜まり場でもあった。自習室には門限十時に遅れるとシートにその理由を書いた。その理由としての活動写真物のことを見（かつけん）^ニといった。

過した。伊集院、朝日、理科の里村、落合、小林と一緒にいた。今年の四月に松江でOB総会が開かれて久振りに出席したが清水部長先生との昔話で若き日をつかひむことができた。

白石 最初から陸上競技部に所属した。二年生の昭和五年に東京の神宮競技場で開催された全国高校大会（インターハイ）でわが松江が強豪六高を破り全国制覇し大優勝旗を松江に持ち帰った。これは淞高史上を飾る壮挙で今は亡き八理甲一小川卓三、八理乙田村忠雄両先輩の自覚しい活躍によるものである。俺は次年度の主将だったが、痔のため大事な時に不振だがこれを機に陸上競技にずっと関係し、今も各競技団体の顧問をつとめている。

に使われていたなつかしい住いだ。連絡オルグの千金貴次さんが横の墓地为ぬけて「第二無産者新聞」等の秘密出版物をもつて周囲を気にしながら訪ねて来てた頃を思い出して感無量の思いである。

白石 次は運動部に進もう。

七・三運動部活動の回顧（座談会）

森山 スキー山岳部にいた。スキーでは大山、三瓶山に出かけたが、低いわりにはアルプス的景観があつて良かった。競技会は試験を前にした悪条件の下で行われていたが面目は保てる成績だった。

岡崎 馬術部で三年間楽しい部生活を

増田 白石と一緒に陸上競技部に入ったが、運悪く傷、病に妨げられ応援部員に終つて残念でならない。しかし好きなスポーツだったから部のOB会に毎年出席している。

松田 入学時勉強より健康と信じて自分の体力相応と思つた籠球部に入部。部員も少く中学時代に無経験の私が二年生でレギュラーになつたがこの年のインターハイで浦和高校に勝つたのが創部以来の最初の勝利であつた。ここにいる宮田がマネージャーだった。卒業後に大変強化され昭和十年前後インターハイで毎年優勝候補になっていた。今OB会も行われている。

白石 次は当時の一般傾向として左

翼運動が非合法の壁を少しずつ押しつけて頭を出し、高校界でもこの風潮が次第に高まりを見せて各校生徒に退校、停学等の被処分者が次第に増加し更には警察力の介入が見られて学外の左翼団体との関係が取締の対象となる傾向が出てきた。大都市程ではないが松江でも例外ではなかった。従って此処ではこの左翼風潮の先頭部隊々長ともいえる高田元共産・社会党代議士がいるのでその頃の事情を話して貰おう。

七・四 高校時代の思い出

澤田弘夫(六期理乙)

《高校入学から卒業迄の回想 一年生の時の組担任は菟道日出男先生で、ご専門

は動物でしたが、私等には英語を教えて頂きました。音楽愛好の歯切れの良いモダンな方でしたが、病弱で昭和四年に惜しくも亡くなられました。国語の水木先生からは、百人一首の個々に就いて懇切丁寧な詳細な解説をして頂き、先生の授業時間に出席するのが楽しみでした。植物の古海先生の講義は早口のために、級友一同はノートをとるのに、一方ならず苦労をしました。

独逸語の会話を習ったカルシユ先生は顔面に絶えず人懐こい笑みを湛えられて時々書取りの試験をされましたが、成績を発表する時は上位から順番に直接手渡されるのが常で、誤記の数により例えば、ツバイ、ゼーヤ、グートと嬉しそうに、

又ツバンツヒ、ゼーヤ、シュレヒトと態良く笑い乍ら、少しも嫌味も言われずに返されるので教室の雰囲気も極めて和やかで、後味の悪い思いをしたことは一度もありませんでした。

其の年も終わりに近い頃に、年号が昭和と改められました。

一年生の時の組担任は数学の神山信二先生でしたが、実に温和な方で、代数の授業時間には、何時も黒板の前で考え乍ら、正確に教えて頂きました。

一学期の物理の期末試験の問題が非常に難しく、担当の松原先生からクラスの大半の者が五十点以下という余りにも粗末な成績を頂き困っていた処、敬けんなクリスチャンの先生は、厳かに口を開

かれて、「真理の前に忠実に採点した」と言われたが、クラス一同の懇願を容れて、一律に十点を加算されたので、私は辛うじて及第点を頂くことが出来てホッとしたのが深く印象に残っています。何年か前に、名古屋で開かれた同窓会の全国総会の席上で、何十年振りかでお目にかかった先生に当時のことを申し上げた処、先生は未だ若葉マーク時代のことを明瞭に記憶の中に残しておられ、唯々苦笑しておられました。

一年生に進級した私等三十五名に前の残留組十二名を加えて、理乙は四十七名の大世帯となったので、秋の学校創立記念日に、各クラスから出す催物に、誰れ言つとなく、播州赤穂浪士忠臣蔵四十

私は自分の性格とは正反対の不破数右衛門役となったのですが、其後テレビ等で忠臣蔵や赤穂浪士等の放映があり、同氏が出る時には一種の親近感を覚えるよう



喜びましたものです。

になったことは申す迄ありません。私等は此の入賞を喜ぶ余りに、玉造温泉で盛大な打上げ懇親会を開催した処、クラス全員が出席し、往復共皆で青春の歌「目もはるばると桃色の」を声高らかに歌い乍ら、隊を組んで歩いたことを想い起こす度に、感激で胸が一杯です。二年生に進級した時には、正規の一クラスの人数となり、組担任は数学の曾我部忠四郎先生で、先生からは難しい微分、積分をお習いしましたが、小柄なお体で実に良くクラス一同の面倒を見て頂き感謝したものです。校長の乗杉先生は東京音楽学校現東京芸大の校長として栄転され、代って四高教頭の河合義文先生（富山県出身）が

七士を演じて、学校内は勿論、一般解放で集まる市民達を喜ばせてやろうと衆議一決し、当日使用の衣装全部を、松江大橋詰めの劇場から借り受けることにしたのです。記念日は幸にも快晴に恵まれたので出場者一同は互いに何とかメイクし合い、一かどの浪士姿となったが、家老の大石内蔵之助良雄役には、剣道部の名マナージャーで、猛者の堀賢朗君（熊本医大卒 故人）を最適任者として祭り上げ、其他は抽選で義士名が割り当てられ、出場者一同はキリッと鉢巻きをしめ、紋付羽織袴姿で、山鹿流の陣太鼓を勇壮に鳴らし乍ら進む堀君を先頭にして、隊伍堂々と運動場の真中へ繰り出し、最後は西南役で西郷隆盛配下の薩摩兵士等が歌った「孤軍奮闘困みを破つて帰る」を出

場者全員で声高らかに歌い乍ら意気揚々と引き上げた時には、詰めかけた大勢の見物人達からは一斉に破れんばかりの大拍手、喝采がおこり、何時迄も続いたので、クラス一同は大いに面目を施しました。そして審査の結果、後日学校当局から格別に最優秀賞を頂戴した時には、皆で大

記念祭のポスター 澤田氏による



校生徒が登校するよう取りまとめられたいと懇望された。ドイツ語の主任教授であり、私はもてが良い方であったので、大いに面くらいなやんだが、先生の説論には応せず、つらい思いに沈んだ。京大に入學して、西田哲字の伝統にあこがれ、純哲を専攻して、フィヒテ著スピノザに取り組んで沈潜していた矢先に、母校の在校生が同盟休校の拳に出た。その応援のために、来校せよとせ数本の電文が届いた。当時、母校の同盟休校支援のため馳せつける先輩の大学生は、ほとんど例外なく、車中で検挙されるのが常であった。私は思惟が乱れ、勉学の中断をおそれるばかりでなく、検挙さわぎにおおつけもついで、応援をちゅうちゅしていた。

しかし、かつては同盟休校の首謀者の一人であったという責任感にさいなまされ、意を決して、途中、検挙されることもなく、やっとの思いで、母校の正門前の岸という商家の二階の一室の闘争本部におちついた。東大経済学部在学中の同級生山本勉君は、私の顔を見るなり、そくさに、引継ぎをおえて急ぎ東京へ引き上げた。自習寮にはところきらわず、ところせましく、《先輩の隋彦漢》と朱書したアシビラが張りめぐらされていた。正門前の校舎の二階会議室で、在校生には一人も犠牲者を出さぬことを骨子として受結の労をとった。その席上、谷田生徒主事から、中西君は在校中は激情的な面が強かったが、京大生となって理性的な

殆ど毎年出席し、殊に三年間の青春時代を過ごさせて頂いた心の故郷松江へは、万障繰合せて、出掛けることを楽しみにしていました。そして急速に近代的に変貌した町並を驚異の眼を持って眺め乍ら足の赴くままに、島根大学周辺や桜花爛漫の千鳥城公園内を散策し、更に新しく出来た宍道湖大橋上に佇み臉に灼きついているあの美しい「宍道の湖の夕映え」を思い起し乍ら波穏やかな湖を眺めたり、又近くの松高の庭迄足を延ばし、若き日に白瀉や袖師ヶ浦から親しい友とボートを漕いで嫁ヶ島へ行つたと等を思い浮べ、其の場を去り難いことが一再ならずありました。

三春つたた夢の中に過した松江を懐

しく想うことしきりの今日此の頃です。夢の多い魅力ある街である松江市の今後益々の発展を心から祈って止みません。

七・五 松江高校同盟休校

中西利理（七期文乙）

文科三年乙在学中の卒業前に、全校生徒が自習寮に一週間箒城という同盟休校を実施した。

私はその首謀者の一人である。六日目であつたと思う。自習寮の医務室で、高畠教頭先生と単独会見する運びとなつた。貴君は同盟休校打ちきり反対の急先鋒の一人であるそつだがと、前置きして、強い反省を求めて、諄々と説き、直ちに全

紳士になったとほめられて、面はゆいかぎりであった。松江を去るに当り、高畠先生の官宅に招かれて、夫人の手によるウチワで涼風を送られながら、御馳走を頂き、恐縮汗顔の至りであった。この真夏のひとときの刻印は忘れがたく、いまでも念頭を去らぬ思い出の一つである。¹²

さらに白石磷氏が書いた自らの生い立ちからカルシユ先生との交流が伺える。

¹¹これについては、「第八章 滋校を思い出す座談会 左翼風潮の所産的出来事について」でも語られている。

後半は、「十章カルシユ氏のドイツ語

見つけた護身録」で触れられている。見方が違っているのが興味深い。

彼は山口出身で後に京大経済に進学した昭和七年第九期卒である。彼は大正になって最初に生まれた赤ん坊として地方新聞に紹介された、《ビルマ激戦の生き残り》である。後に、(株)ユニチカエスノート会長、(株)レナウンホームズ社長・会長を歴任した。日本の陸上競技会発展に貢献されたスポーツマンで、現在も高校時代の陸上競技部員の陸友会の会長として、現役で働いている。彼の人柄が文章にじみ出て来るようだ。

七・六 勉強よりも運動

白石磷(九期文乙)

昭和三年の年末近く、全国の高等学校毎

の入試学課の発表があった。その時に、自分の力に何かしら合っているという感じのする学課が多くある学校は何処かと考えた結果、松江高等学校であるという判断をすくもつことが出来た。早速、入学志望学科は(第一)が文科甲類、(第二)が文科乙類と書きいれて、その他の必要事項も完全にした入学試験申込書を、松江高校宛てに郵送した。たしか昭和四年三月十六日、十七日が受験日だった。少々小雪も舞っている中やつの思いで試験を終えてホツとしたが、受験した学課で、どうしても不可解だった問題は一つもなかった。ので明るい気分で校舎の出口辺りに来たら、生徒さん達が大勢たむろして、壁に貼られた紙掲示を見るといわ

れた。それには運動部毎に、名前を知られているスポーツ受験生の氏名が書かれてあり、陸上競技部の処に白石磷の名もあつた。私は「陸上競技の白石です。」と名乗った処、「私はマネージャーの長尾正(故人七期理乙)です。貴君の名前は山口縣大会などで承知しています。君は合格するだろうと思って部員も私も一緒に祈っていますよ。」というお話し。そして、合格発表の日には電報で知らせますから住所をこの紙に書いて下さい、といわれたので、その日の夜行列車で行く予定の大阪市にいる次兄の住所を書いて渡した。たしか十日ぐらいたった日の夕方、「ブンカオツルイニゴウカク オメデトウ、ナガオ」という電報が届いた。と

りいそぎ朝日新聞社の次兄の処に電話をかけて合格の旨を伝えた。「ああそれはよくやったな、親父の処には俺から知らせしておく。」と喜んでくれた。翌朝「ゴウカクヨロコブチチハハ」という祝電がきた。これを読んで、今まで私の心の中にたまっていた《中学校四学年を終了してすぐ官立高等学校に入学せよ》と言う父の厳命をやっと果たし得て「何とか親孝行ができた」という嬉しさが爆発して涙で顔中ぐしょぐしょになったことも一生の思い出である。

松江高等学校におけるドイツ語と陸上競技 昭和四年三月末頃、四月一日入学式出席のため早めに松江に到着して、寄

宿舍「自習寮」北三寮に入った。親の許を離れて自分独りの生活するのはこれからが初めてのことである。その時に一つ、私の心にかかるものがあった。一つは第一志望を文科甲類にしておいたのが文科乙類になって合格していること。しかしこれは、松江の受験者が非常に多く特に文科は甲、乙合わせて八十人の合格者予定数に対し、受験志願者が九八五人という十二倍強の激しい競争率になり、しかも志願者数は文乙より文甲の方がだいぶ多数だったためこの結果になったと副保証人の水木教授から後で説明された私にとつては、この為にドイツ語が本格的に正課目として勉強の対象となったのだから、寧ろ喜ぶべき方向であったと今

でも思っている。もう一つ気になったことは、陸上競技部のことである。前述の如く、私が山口県の中等学校短距離フンナーとして松江高校にまで知られていたことがわかって正直なところ嬉しい気持ちではあった。しかし毎日授業を受けている学課は中学時代とは大変ちがった格の高いものであり、また難しいものであった。特にドイツ語は、はじめて見る文字であり文法であるため、いくら勉強きらいの私でも予習復習はどつしても必要と思っていた。処が競技部の練習は僅か約三ヶ月しか余裕のない毎年七月に挙行される全国高校陸上競技選手権大会（通称インターハイ）を目指した厳しいもので、授業が終わると練習着衣に着替へ、

スパイクシューズをさげてグラウンドにかけつけ、夕方まで走ったり跳んだり。その間腰を下ろすものなら「コラーツ」とどなられるので、ハアハアと肩で呼吸五〇〇メートルくらい歩いて、また走り出す練習を繰り返し人の顔がよく見えなくなつてから「よし、今日はこれまで」というキャプテンの声で這うようにして寮の石段を上がって浴場に辿りつき、入浴後の夕食をタラフクに食って部屋に帰り、着替えをすましてホッとすればもう眠くなり、布団にもぐつて朝まで熟睡するか、この時、同志が揃って夜の町に出かけてストームを演ずるか、オデン屋かウドン屋に入って一杯やるか、あるいはおとなしく活動写真（映画のこと）を見

田村先輩の後をつけて、昭和六年度の主将になったが、強い選手は皆卒業し、後

昭和五年七月、明治神宮外苑競技場における優勝の記念写真(白石氏提供)
 後列中央が総合優勝旗をもつ田村忠雄主将
 その右隣がトラック優勝旗をもつ小川卓三選手
 (前列右より二番目白石、前列左端赤木、後列右端高橋の三名が生存)



て帰って寝るかで何れにしても勉強の方は何もできない状態になるのである。いくら陸上競技が勉強より好きであっても初めて習うドイツ語には始めから打ちこんでおかなければいけないとよく分かっていながら、それが出来なかった。その時の自分を情けないと思っている。昭和五年三月には私がやっと二学年に上がって来た時の松江の陸上競技部には、二名の名選手田村忠雄(八期理乙)、主将と小川卓三(八期理甲)選手が、共にぐんぐん調子を上げていて他の選手もそれに引っ張られて、松江制覇の気運はすでに出来上がっていた。大会は、七月中旬に明治神宮外苑競技場(現在の国立霞ヶ丘競技場)で開催された。二日間、暑中の激

戦であった。そして総合優勝とトラック優勝に輝いたのは、わが松江高等学校であった。

上載の写真で田村主将の左隣で陸上競技部々旗をもった人は、松村博(八期理乙・カルシユ先生門下生、後に戦死)選手であり、この日、棒高跳びで誰も予想していなかった三位に喰い込み、貴重な得点をして優勝に貢献した勇士である。上載の写真にいる十人中、文甲、理甲は四人だが文乙理乙のカルシユ弟子は六人いる。田村主将は翌春、九大医学部に入学して後に北九州市の病院長まで勤めた人だから、増田義哉名誉教授(六期理乙)はよくご存知の後輩であろう。私は

に残ったものと、新入部員で戦ったが、主将の私がインターハイの当日、京大病院に入院手術する惨状で、後々の立直しもできず、申訳なく今も思いつけている。しかし、私の後、松江高校陸上競技部は後絶たず若いOBの諸君が陸友会を結成して、その会合は今日まで続いている。私のドイツ語の勉強を妨げてくれた松江の陸上競技についてはこれで終わることとする。

高等学校におけるドイツ語とカルシユ先生の思い出 前述の如く私の入学試験の成績が、『第三志望の文乙』だったので思いがけなくドイツ語専攻に変わり英語以外の一外国語が新たに勉強できるのだから、むしろ喜ぶべきと気がついた。そ

れにドイツ語の教授は五、六人いらしゃつて、それぞれ専門に応じて哲学、文学、経済学、長編小説等々ドイツ語で書かれた一冊の本を教科書にして講義をされる日課が三年間に亘り組まれているためドイツ語の授業がない日は、一週に一日くらいだった一学年の第一学期がはじまる時に各々の先生がどんな人かが感心の的であったが、特にカルシユ先生がどんな授業をされるか皆興味をもって昭和四年四月（何日かは忘れた）のその日をまつた。その日が来た。はじめて経験するドイツ人教授は、白い顔に微笑をたたえ、六尺豊かの大男、黒っぽいセビロ服(?)の上に教授ガウンを着て、大股で教室に入つて来られ、教壇の上で出欠簿(アイ

ウエオ順にローマ字で生徒名が書かれている)を持たれ、いきなり朝日(アッサヒ)足立(アダチ)伊集院(イジユウイン)石原(イシハラ)と次々に読上げて、全員出席を確認された後、出欠簿を机の上においてから、右を向いてこれまた大股で窓際まで二、三歩歩いて、いきなり木製の窓枠を両手で持って「WAS IST DAS」と第一声を発せられ少し左の方を向いて、優しい笑顔で私たち生徒の顔を見られた。私たちからは発言がないので「DAS IST ENTFESER」と第二声を発して、教壇の上に戻って、顔一杯の笑みをたたえて何かドイツ語で話しかけられた。当然何の話か全然わからなかったし、後のことは今は忘れてしまったが、ここま

での最初のご対面はよく覚えている。だんだん時がたつてお互いに馴れてくるにつれカルシユ先生から、教室では色々のお話をきいた。勿論、お話の全部が理解できるはずはないが、その頃「WESTEN ZU OSTEN(西部戦線異常なし)」の日本版はよく売れて話題も多かった。先生からもこの話を聞いたことがあったが先生は「この本は本当のドイツ精神がこもっていない」と深刻な表情で語られていた。また、当時は大学生、高校生の間で関心をもたれていた人物はカール・マルクスであり、共産主義を中心とした種々の論議が当時の警察の取り締りの対象となっていた。わがクラスメートの中にも退学処分になったり、自ら地下にもぐっ

た友人もいた。カルシユ先生の「マルクスはこんな男であった」という我々の質問に答える形で面白く話して下さった時の写真は私が若松先生に提供した資料の中にあり、本誌の三四、三五マルクスの逸話で掲載されている。最後に、カルシユ先生が我々によく教えて下さったものの中に唄(歌、謡?)がある。一番初めに教えてもらったのは有名な「LORBE」であった。これを先生、級友と一緒に教室で合唱した時の気分は格別であった。その他、いろいろの歌を教えてくださいたい中に、私が今でも覚えていて、時々何気なく口ずさむことがあるものを紹介しておくことにしたい(但し題名はどうしても思い出せないので省略する)

その頃は次の通り
 「 Wenn die Soldaten durch die Stadt
 marschieren öffnet Mächen die Fenster
 und die Türen.」

アイバールム、アイダールム、ブローヌ
 ベーゲン、チンダララッサ、ブンダララ
 ヅサ、サー（カタカナの日本語の処は自
 分もよく覚えてない歌詞）。この外、多少
 の個人的な接觸はあったけれど皆さんに
 紹介できる思い出としては本誌三四、三
 五頁に記載されている写真とその記事く
 らいのものしかない。結局、カルシュ先
 生とは、教室において、できの悪い生徒
 が、いい先生だなあと思ひつつ授業を受
 けた平凡な弟子という間柄に終わってしま
 ったとしかいえないであろう。かくして

昭和七年二月が来て、卒業証書を頂き、
 一生忘れられない処となった松江を離れ
 京都帝国大学に進学した。平成十二
 年九月十五日 敬老の日日記す。

七・七 左翼風潮の所産について（座談
 会）

高田 その話をする前に一言述べて
 おきたいことがある。それは、

（一）昭和四年のストライキ
 のことである。これは行動は同盟休校で
 あってもその由つて来る事情は左翼的要
 素など全然感じられない事件である。即
 ち河合校長の教育勅語の読み違いを糾弾

するストライキで珍しいケースといえる。
 僕たち一年生はただ上級生のいいなりに
 面白気分です少々騒いだ程度であつて、
 森山のいう『純情そのもの』⁵⁶といえる。
 ただ僕はクラス委員に選ばれていた記憶
 がある。

では本題。私は入学迄はクリスチャンで
 あつたが、級友の同じ商業学校出身の寺
 本義雄が「高田これを読んでみる」と佐
 野学の「無神論」を貸してくれた。読む
 ほどにだんだん心ひかれる状態となりこ

⁵⁶後に京大哲学科に進学した中西利理氏（七期文）
 は、教育勅語を誤読した校長の排斥運動に直謀者の一
 人として七日間のストを決行、校長を缶詰にしたり、
 文部省に退官を直訴したり、裏切り者とわたり合ふな
 ど熱血漢の本領を發揮した。（川津富美子氏による、利
 理は彼女の夫の叔父）

れが僕の左への出発になった。それから
 進んでマルクス主義等の本を読みあさり、
 一年先輩八文甲の石谷龍さんという恰好
 の指導者が現れて学校内外における具体
 的運動について立案し実行に移していっ
 た。校内の動きとして地下では既存の読
 書会を強化し、表立っては学校行事の理
 事改選に

（二）理事に文乙の推薦で立候補

文乙の推薦で理事に立候補することにし、
 文甲の吉田嗣延も立候補して争うことにな
 ってから、文乙級友が集つて選挙運動
 を起して「学問研究の自由」「消費組合の
 創立」を主な目標として掲げ、前に述べ
 た僕の下宿で応援演説の練習まで始めた。
 投票日が近付いたので一度校長室にデモ
 をかけた処案外激しいものとなった。処

がこのデモに加わっていた吉田が突然立候補を辞退した。当然選挙はなく自動的に僕が選任され理科からは最初から無競争の酒井正仁が出てこの二人の新理事が生まれたわけだ・僕はそれで理事選の公約だった

(三) 消費組合の創立

に力を入れた。まず我々の文乙全員が協力を約束してくれた。文甲の細田吉蔵の応援、新理事酒井正仁が理科の方を支持ってくれたこと、など多くの校友が力を貸してくれたが、やはり一番の味方は文乙の力だった。かくして無事に消費組合が出来上って新時代たる昭和六年が始まったわけだ。ここで左翼的運動として関心が高まったのは

(四) 読書会の動き

であった。僕と一年上の石谷龍さんと二人で責任を引受けてからほとんど拡大され全校で七、八十名くらいの組織になり、文乙でもここにいる白石ほか十名くらいだった筈だ。

白石 その通り。しかし同志は殆んど死んでしまつて今何人が残っているかな。それはそうとこの十人程度の同志は十月に皆学校に捕われて停学になったが、『ガウス』はもうその頃には我々の前から姿を消していたようだ。

高田 そうだ。前に云つた通り共産党などの非合法組織と地下で連絡しつつ運動をつづけている中に松江地方の左翼の一斉検挙が暑い盛りに行われて僕は松江署

のプタ箱入り。しかし持病の喘息で入院させられて少し回復した処で検事局に廻され起訴猶予になったが、学校は取敢えず学年末まで停学、という処分であった。僕としてはもう松江には帰れないと覚悟し、専ら地下で非合法活動をする決心でその準備で密かに埼玉に帰って表に出なかつた。それで級友の停学も年末の提灯デモも二回目のストライキも僕は関与していない。

白石 それでわかつた。今でもわからないのは十月の読書会停学処分を喰つたのは我々文乙だけで文甲も理科も処分者がないことだ。何故だろう。それから、いま高田の話した夏の斉検挙は大規模であつて大戸幸平も宇佐美清も酒井正仁も

時日はちがつても一緒にやられて学校も退校になつている筈だが、詳細を知らない級友が多いと思う。次にいこう。テーマは、

(五) 提灯デモとストライキ

についてだ。この二つの出来ことは左翼的風潮をめぐつて学校と生徒の対立の典型だが、皆も思い出深いものであつても語らんとすれば同じ話で量も少いと思うので、このテーマは本件の立役者の一人者たる細田吉蔵が「忘れ難き人々」に詳細に書く筈の記事を後日読むことにしてここでは終わりにしたいと思う。(賛成の声)

では次はたのしかつた記念祭の話

記念祭の出し物を考えたことだ。結局「キングフラウ」という名の喫茶店をやることにして専門家に色々教えを乞い分担をきめた。その内停学組も次々に帰ってきてにぎやかに開店してみると予想外の好評で大勢のお客さんに恵まれた。ために、あれがない、これが足らんと慌てたこともあったが結局、めてみると相当の黒字なので一部を赤十字社に寄附し、残金でクラス揃って玉造温泉の長楽園で大祝賀会をやった本当に楽しかったよ。全くいい時代、いい学校だったなあ。

白石 次は大学及びその後の話にしよう。

七・八 三回経験した記念祭物語（座談会）

松田 私たちが入学した年に浜口内閣が成立して国民に節約生活を強いていた。そして世界金融恐慌の波が押しよせ金解禁問題とも重って、農村も工業界も窮乏のため打つ手を失った惨状にあった。こうした内外苦難の中に一年生の記念祭をのんびりと迎えた幸せな我々だった。しかもその『出し物』は当時浜口首相の政策を皮肉ってきた「咲いた花でもしばまにやならぬソウジャナイカ……緊縮しよう緊縮しよう」という流行歌を歌った。想像行列なんだから大したもんだよ。（大学は出たけれど）の時代に、の声）

高田 金解禁をテーマにしたこの文一乙

のショーの発案者は実はこの僕だったが、これに「レビニュー緊縮時代」と命名したのは辻だったよ、流石だね。皆でハリボテのライオンを作ったりして大変だったなあ。

白石 二年生の時は理事選挙で忙しかつたのか、前年のような凝ったものはやめて、「一問の大黽」という展示物にしたよ。誰の発案が忘れたが、六尺の木の板を買ってきて赤インキをぬりつけて血にみせて板血を作り張り幕の中に展示する人を食った見せ物だったよ。

岡崎 三年生の時に忘れられないのは、さつき話に出た読書会の停学処分が十人位もいて教室はガランとして淋しいものだったが、その最中に残っている連中

七・九 大学進学とその後について（座談会）

岡崎 我々の三年生三学期は、提灯デモとストライキに荒れて延期になった二学期の試験がずれ込んで、それにすぐ続いて所謂卒業試験が行われ、その間を縫って進むべき大学の入試についても備えるという多忙な日程であって大学を選ぶことについて色々悩んだ連中もいたよ。うだ。しかし私は淞校受験の時に次兄からいわれた、「高校は松江で親や兄弟と別々であっても、大学は兄達と東京で一緒になれば親父はそれで満足するよ」という言葉を守って最初から東大の経済に行くと決めていた。兵隊や戦争の話はし

たくないね。

宮田　私は平賀先生のアドバイス通り京大の文学部国文科に進んだ。入つてみると文甲の大坪、南波、藤原が一緒に皆真面目に勉強した。昭和九年は前述の卒論の仕上げに努力したが、まず松江で水木先生に一方ならぬお世話になり、八月から東上して上野図書館に日参した。九月に入り私は帰洛の日をきめ離京際に東大組の岡崎、松田、伊集院の三人と逢う手筈をきめて楽しみにしていた処、当日になって三人が急に午前中の講義に出ることになったので私も夜行列車の予定を変更しすぐ帰ることにして三人は東京駅まで見送ってくれた。これが命拾いなるうつとは。近畿地方はその翌朝に室戸台

風の襲来をうけ、私が乗る筈の夜行列車が瀬田の鉄橋上で脱線する大事故故にて大騒ぎとなった。今でもこの三人を命の恩人と感謝している。

森山　大学は東大法。時代は二、三人集つて話しても特高の私服がつきまとう状態で、未弘教授の労働法をゼミにした僕はヘーゲル左派だということ、志望の三井鉱山は入社出来ず、三菱関係の米国系コーンプロダクツ会社に入り平壤に赴任してそこで終戦になった。それで話は終戦後になるが聞いてくれ。平壤は北鮮の都となり僕たち日本人は北鮮保安署に捕われの身になったが、取調べに当って僕の蔵書を人民委員会が評価するところとなり、

北方送りを免れて帰国できた。そして経済調査庁に身を置いていたが、その頃GHOのコミッションの長として前職会社の工場長だった米人が来日して僕の株が一躍上った。また僕がずっと勤務した行政管理庁の監察局長が、在学中に厄介かけた本富士署の当時の署長で、東大で騒いだ奴は君たちか、ということで大変親しくなれた。若し三井鉱山に入社していたら農林行政関係で認められることもなかったろうし、人間万事塞翁が馬の言葉が身にしみている。

増田　我々文乙は京大に入った者が多く法、文、経に分れて角帽姿になった。私は経済学部に入ったが、特に経済には松江時代から親しくしていた連中が多く

互いに下宿を往来して麻雀をやり、カルタをやり食事などで時々集つて、松江の延長みたいに愉快な京都生活を楽しんだものだ。

白石　大学は増田の話と同じだ。一つ附加すれば京大の陸上競技部から熱心に入学を勧誘してくれたのも京都にきた一因だった。戦争中は兵役でビルマに放り出されて死ぬる目にあつたが幸運にも帰還できた。

高田　僕は皆さんのように順調に帝大に入り学士になつたわけではない。前に話した通り松江生活を諦めて地下運動に専念する決心で一時帰郷したが、その脱出の時は文甲の細田から変装用の服を借りてバスで逃げる方法をとつた。その時

は夕日に沈む嵩山を眺めて夢のような高校生活を振り返っていきさかセンチな気分で涙を押えたのであったが、全く大学生になれるなんて考えたこともなく、先の闘争生活の不安ばかりが胸にあった。帰省した後しばらくして運動を再開して石谷龍先輩と連絡しつつ頑張っていた処で川崎警察署に捕ってまたブタ箱入り。やっと出してもらって家業の呉服屋を手伝い機を見ていた或日、上野公園で宇佐美清にパツタリ会った。僕のすぐ後で同じく退校処分になったはずの彼が帝大の角帽をかぶっているので大変不思議に思い尋ねた処、東北帝大に「聴講生」という制度があり、これに合格すれば勉強次第で学士になれる道もあるという説明だ

った。大学を諦めていた私は希望に燃えて、夢中で勉強して昭和九年に聴講生に合格した。処がその夏休み中に退学処分の命令が来た。松江高校に在学した履歴を隠していたのがバレたためだったが結局、宇野弘蔵先生等の「保証」が効いて「退学を命ず。但し宣告を保留す」に変わった。即ち執行猶予のような形で卒業まで退学の「宣告」がなく、その間に試験にも合格して本科編入を果し、法学士の肩書きもついて苦労つづきの卒業を上げた次第であった。宇佐美清のお陰だ。(いい話だの声)

白石 まだ話はつきないが回顧すれば

第八章 カルシュ先生の想い

八・一 カルシュ氏の足跡

カルシュ氏存在を偶然知り、彼の足跡を追跡する中で私は彼の偉大さを知った。カルシュ氏に直接・間接に接したところのある人以外には誰も彼を知らないほど、日本では残念ながら名の無い哲学者となつてしまった。そこで、隠れたまたは紛れた彼と生徒との交流を彼の縁者の生の声を通して収録した。実際に、縁者達も自分が元気なうちに統一的に記録して置かなければ、遠からずして、すべての旧制高校に関する記憶が消滅する運命にあると心配していた。ここでは、カル

シュ先生を軸として旧制高校の生徒の暮らしぶりを描いてみた。嘗ての生徒達の手記をみるなかで、先生と生徒の双方が作用しあつて、ともに精神の高揚をみたことが推測される。

戦前、旧制松江高等学校(現島根大学)のドイツ語の教官として、十四年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ(Fritz Karsch)が亡くなつて本年度三十年になる。いまや、ほとんど忘れられている彼は、人がどのような段階を踏みものを認識が広まるかを考究する人智学を提唱したドイツの哲学者、シュタイナーを日本で紹介した人物でもあった。二十一世紀を迎えて、日本を第二の故郷とし

ている。

また、当時の松江の貴重な写真を数多く残している。彼は生徒にヨーロッパの精神生活を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げ、自分のライフワークである人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著書には『カントとハルトマンの比較論述』（日独文化協会、昭和三年）があり、その他ドイツに関する著書（同協会、昭和九年）も出版されている。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は彼の紹介と協力によるものであった。同博士に関しては、門下の酒井勝郎氏が

て愛したカルシユ氏を顕彰することは日本だけではなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。

彼は一八九三（明治二十六年）年、ドイツ東部のブラゼビッツで生まれ、一九七二（昭和四十六）年、カッセルで没した。大正十四年に松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、昭和十五年からは外交官として終戦まで東京で暮らした。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの影響があつたと思われる。彼の薫陶を受けた生徒の中には各界の著名人がたくさん居る。彼は明治四十四年、ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に

志願兵として従軍した後、軍隊を退き、マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下として哲学を学び、一九三三（大正十二）年に哲学博士の学位を取得、人智学の研究組織に加わった。あこがれていた日本に來た彼は、ドイツ語講師として松江市奥谷町官舎に住んだ。そして一時帰国をはさんで、昭和十四年三月まで教壇に立ち、松江で妻、エツメラとの間に、長女、メヒテルト（昭和三年生まれ）、次女、フリーデルン（昭和十二年生まれ）に恵まれた。彼は絵が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた六道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村の風景画が現在も一人の娘の手許に半分ずつ保存され

『カルシユ先生』、『田舎の大学』（私家版、昭和四十五、五十五年）で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「髙のふもとに」でその人柄を当時の生徒が語っている。松江高校を離任した彼は、予備役将校であることから、親交があつたドイツ大使オット氏の仲介で在日ドイツ大使館の武官補佐官として昭和十五年十月まで国会議事堂近くの大使館に勤務することになり、そこで終戦を迎えた。彼の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関するものである。スイスのドルナッハの「ゲーテアナム」に収録された彼の未刊行原稿は後に家族のもとに戻されている。原稿は解読困難な箇所が多いが、古代のインド、中国、ギリシャの哲

学から始まる一冊四百頁余のファイル三十七冊にのぼり、現在、米国に住む長女らが整理中だ。彼の研究は有史以来、人の思考が哲学とどのように、関わり変化してきたのかを示すことであつて、彼が大きな興味を抱いていた禅と西田哲学への入り口がやがて明らかにできるはずである。西田幾多郎や鈴木大拙らは松江に住むカルシュを訪ねたらしい。彼はまた、遺した資料の中で、学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかを示そうとした。

彼の大部分の仕事はシュタイナーの哲学がいかにカント哲学に勝るかを示そうとしたことにあり、彼自身が自らを称し

て、行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると言っていたという。彼の娘たちは人智学の基本に関する影響を両親から受けた。後に長女は自らその研究を行い、次女は帰国後、ヴァルドルフ学校に通い、マールブルク大学で学んだ後、ヴァルドルフ学校の教師になった。

終戦二年後に帰国。一九六一（昭和三十六）年には病気のため年金生活に入ったが、キリスト共同体の古巣のカツセルに移住し、ライフワークである人智学的知識からみた東洋哲学史に専念した。昭和四十三年には、戦後も文通を続けていた、かつての生徒から招待を受け、二十一年ぶりに日本訪問。各地を回つて、多

くのかつての生徒と親しく過ごす時間を得た。この時、彼は出雲大社で、至聖の神に対面する願いがかなえられ、ここで自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。一ヶ月の滞在後、帰国した彼は金婚式を祝い、翌年、脳腫瘍（しゅよう）のため亡くなった。七十八歳だった。

私は滞在したドイツで偶然にカルシュ博士のことを知り、帰国後、彼の教え子の多くが、いまなお彼を敬慕していることを聞いて、彼の業績を調べる必要性を痛感した。彼は少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたという。

カルシュ氏は第一次大戦後マールブルク大学で学び、後にニコライ・ハルトマン(D・Noel a Hartmann)に師事した。ハルトマンはマールブルク大学教授であった。ポール・ナトルプ(D・Paul Natorp)およびルドルフ・オットー(D・Rudolf Otto)らと共に同大学哲学科のミスターといわれたうちの一人であった。カルシュ氏は、ハルトマン教授の許で論文「Christoph Gottfried Barthelemy Vertreter der logischen Realismus in der Zeit der deutschen Idealismus」(ドイツ理想主義の時代の理性的リアリズムの代表的人物、クリストフ・ゴットフリート・バルデイリ)をまとめた。この研究により、彼は哲学博士の学位を一

九三年に授与された。本邦ではハルトマンは昭和期の高橋敬視らへの影響より先に、明治後期の画家青木繁に強烈な影響を与えている。彼の芸術は「もの」の社会から脱却し、想像力により構築した世界である仮象の社会¹⁴に自らを没入するものであった。ヨーロッパの物質文明の発達により、その精神は物質的成果のみの社会に閉じこめられてしまった。そしてまた、できあがった結果としての物質文明が流れ込んだ日本では、自らを支える精神的根拠が見られず不安定な状況にあることを直観した青木繁はこれに対して自分の想像力を培うことで自らの支柱を求めるハルトマンの影響を強く受けた。どこに自らの表現の動機を求めるかを模

索するなかで、日本の古代のなかに自分の仮象をみつけた。それを自分の中に具現するために、青木は古代の姿と生命観を合体し、仮象の力を彼の現実の生活のなかに実現し絵画に表現した¹⁵。根本の精神の欠落している性急な歩みに対する批判として、人間を肯定する可能性として仮象の世界を描き仮象の社会を実現しそこで生きることを目指すことの重要性をカルシュ氏も門下生に語っている。このことを別の角度から酒井氏が述べているのが興味深いし、日本を離れるに際し

¹⁴ 言葉は違つが薄田泣篋、藤島武一、夏目漱石らにも共通する時代的主張であった。「自画像を描くまなざし」第一回粟津則雄文芸論家日曜日9.9.20.00.00より

て自らも若干触れている。

生徒から見たカルシュ氏との影響と親交の具体的根拠はなんといつても、現在元気な人の「生の言葉」である。また、『高のふもとに』（旧制松江高等学校校史）の【恩師列伝】と【忘れ難き人々】のなかに「田舎の大学：酒井勝郎」、「カルシュ先生：酒井勝郎」、「カルシュ先生、ギルソン先生：田総武光」、「六十二年前のカルシュ先生：木村登」がある。そこではドイツ語を全く知らない生徒に僅かな手がかりをもとに教える才能、ショーペンハウエル、マルクスなどの解説、そして日本の当時の代表的哲学者の一人の高橋敬視教授にハルトマンを紹介し、その翻訳を彼自身が協力したとの記述がある。

「高橋敬視先生：勝部真長」にもそのことが書かれている。その後については、「カルシュ先生と田島君：奥野良臣」に直接の師弟関係にない生徒との交流が書かれ、「高を思い出す座談会：岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山では、生徒へのカルシュ先生の絶大な影響がにじみ出ている。その他、メヒテルトさんを訪ねて：田島康弘、彼の薫陶を受けて成長した「ワクチン生産の功績者奥野良臣君：青山博」の記事は、如何に彼の授業が旧生徒を当時のドイツ先進科、ヨーロッパ合理主義へ眼を向けさせたかを雄弁に物語るものである。『翠松』（旧制松江高校同窓会報）にはその後の「チャタヌガの町メヒテルトさんからの便り：

木村登、「チャタヌガの町メヒテルトさんを訪ねて：田島康弘」、「カルシユ先生の長女メヒテルトさんふるさと訪問：竹原敏夫」、「東京でのメヒテルトさん：田島康弘」、「メヒテルト女史・大阪の四日間：奥野良臣」、「メヒテルトさんよりの回想録」など、極めて人間的なドラマが種々語られている。その他、カルシユ先生の旧生徒の手記については枚挙に暇がない。例えば大阪支部会報『友』で「カルシユ先生を迎えて」、「老博士はるばるドイツから」、「カルシユ先生を悼み」、「カルシユ先生の授業」などが繰り返し、繰り返して語られていることは大きな意味があると思っている。同じように教師の身である私からみても、重要な意

味があり、問いかけでもある。「Queen Elizabeth's」もドイツ語で書かれたエッセイ夫人あての旧生徒による慰めの手紙である。東京松高会報には「カルシユ先生の訪日について」およびカルシユ氏の招待を計画しながら不慮の事故で自ら完遂できなかった田村氏のための、追悼田村清三郎君：暉峻凌三「やこれらに載せた新聞記事がある。その他 雁信、「メヒテルト・渡部 忠」や私信を含めてたくさん、如何に旧生徒から個人的に慕われていたかを知ることができた。

八・二 学問を通して

カルシユ氏の生涯にわたる意図は有史以来人の思考がすなわち哲学どのように変化してきたのかを示すことであり、実践を通して自らの思想を愛情とともに実生活に実現することであった。彼が人智学からシユタイナーの哲学に入り、人智学・神智学における精神深化の方法との関係から、日本の宗教哲学に入ってきたようだ。本邦の宗教哲学者の鈴木大拙氏や哲学者西田幾多郎氏との親交は在日中も、帰国後も確認されている。また、彼自身が高野山で禅の修行の経験がある。彼は自らの学問や内的修練を通して、シユタイナーが教えた新しい思考への到達

努力した。これらの事柄は彼の残した仕事の中に見い出せるものと確信している。彼は松江高等学校の授業の中で人智学という生徒にとって、当時全く新しい哲学の分野とルドルフ・シユタイナー (Rudolf Steiner) の哲学的洞察法を生徒に自然な形で伝えた。人が知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識とは異なるが、接近可能な形而上学的な人の信念に大胆に入り込むことよって、見い出したものが彼の哲学であり、これを自然に受け継いだ彼の門下には多方面にわたって優れた人間味あふれた人材が揃っている。彼の授業の中にはショーペンハウエル、カントなどその名がしきりに登場したそうである。彼は行動的人智学者であ

のことである。現在でも、なかなかできないことを当時の生徒に身をもって教えたことが、後に専門教育を受けて自分の将来を直接的に決定する基礎となった大卒での思い出よりも優先した思い出であることを大部分の旧生徒が一致して語っている。このことは私にとって、印象深いものがある。旧制高校時代の学友、先生はもちろんのことであるが、それにも増して外国人のカルシユ氏をかくも絶えず思い出し、とくに彼の最初の授業を鮮明に覚えているのはなんと評価して良いのか分からない。しかも当時、新しい思想であったマルクス、エンゲルスなどを生徒に易しく説明したことを伝え聞いている。こつした授業の中から学問に対する

自然な興味が養われ、生徒自らの学問の方法と生き方の哲学が生まれたのである。このことは旧制松江高校の出身者である実業界での多くの成功者を見れば理解できよう。また、赤澤氏が理想を掲げて堂々と論を張り、当時の政治家と渡り合い、後に自ら政治家になったこと、放射線医学の永井氏、免疫学研究者、国文学者など優れた人物をも輩出したことはカルシユ氏が日本の伝統を尊重しながら生徒にヨーロッパの精神を伝え、合理的な生活と思考を彼らに根付かせた証拠である。これとは逆に、日本人の心を理解して日本的なもの、日本の生活様式、日本の宗教を自らの精神生活に取り入れたこと、日常的に注いだ生徒への愛について

り、シュタイナーの「精神科学」を世に広める任を感じていた。若者にも真剣に対応して人智学に関するいくつかの基礎的概念を教えたのもその表れであった。今日、彼らの考えを基に築いた学校と教育方法が評価され、日本に限らず、世界中で実践されているのを見れば、何もなかった当時の日本国内で、旧生徒に伝え広めることに地道な努力したことはひとえに彼の功績であろう。現にこの教育方法を採用したドイツのヴァルドルフ学校で次女が教育に専念し、日本では「シュタイナー学校」として普及しつつある。なお、彼が自分の師ハルトマンの著書と同僚の高橋敬視教授に紹介したこと。その翻訳協力を通じて、高橋は自らの哲学

に大きな影響を受け、最終的に「ニコライハルトマンの哲学／高橋敬視／光の書房／一九四九」としてまとめ、戦後に他の著書と共に第九章のような形で出版したことも間接的な彼の功績であろう。八・三ヨーロッパの窓口として
 当時は、異人さんと言われるほど外国人が珍しかった時代に、十八歳前後の多感な生徒を自らの家庭に招き、ヨーロッパの生活を紹介し、またドイツからの訪問者を積極的に生徒に会わせ、稚拙ながらもドイツ語で議論をさせたり、妥協のない彼らの姿やそこから生まれる新たな認識を自然な形で生徒達に浸透させた

は、生徒の今に続く思慕が直接間接の証拠であり、その日本的な精神は連続して自らの二人の娘にも受け継がれている。彼らが私にカルシユ氏を語るときに涙して語るのにはなぜなのか。単なる懐古趣味からではないと思う。おそらく、今忘れられている教育の本質をカルシユ先生の言動のなかに感じることが出来るからであり、それを現実に体験してきた重みがあるからなのであろう。

八・四 日本を去るに臨んで思い

松高校友會報 第三十二號に掲載された Gedanken bei m. Abschied von Japan の翻訳文である¹⁵⁾

⁵⁾ 翻訳原稿の旧字体のまま掲載します。

私が一九二五年の秋日本に来てから十四年になる。十四年間松江で高等学校に教鞭を執る事が出来た。松江ではたらいだこの歳月と同僚の先生方や生徒達との接触とを回想して、非常に嬉しく又非常に満足である。以前私が獨逸で松江に來ないか、との勧誘を受けた時、この松江という名前は私には初耳ではなく、すでに一九一九年にラフカディオ・ヘルンの

本でこの町や美しい島根半島、大社、美保關のことなどを讀んでいた。もう其の時分から、一度この綺麗な國と其処の人々を見ることが出来ないかな、と云ふ憧憬が心に起つてはいたが未だとても満たされ相にも無かった。ところが一九二

五年どつしても日本に行かつと決心した。途端に此の憧憬が復た強くなった。否、むしろ此の憧憬が手傳つたからこそ承諾の決意をしたのである。でも當時はまだ松江でこんなに永年働き、此の國殊に此の美しい松江近邊がこれ程すきになつて、此處が第二の故郷と云つた様なものに成らつたなどとは思ひもよらなかつた。しかしたとひ外國でも十四年も居て、しかも努めて人々や景色に胸襟を開いて接するやうにして居る裡には、もう其處にしっかりと癒着した様に離れられなくなるものであつて、今去るに當つても新興獨逸で働けるとの歡喜もさる事乍ら、松江に居るのはもう此でお終ひかと思つて、何となく残念な氣がする。

一体そんな氣が起るといつのが主に此の永年の間中同僚の先生方や生徒の側から 苦樂孰れの場合にも 親切、懇篤にして頂き惜しみなく助力して戴く事が出来た為であり、又私並びに私の家族にとつて此地での生活が此の上もなく快適であり暮らし良かった為である。全職員生徒、友人諸君に衷心感謝致して置き度い。

一つの学校に十四年も務めて居ると、此の学校の歴史の一部分を共に生き、此の学校の繁栄と發展に眞心から關与していると云つても恐らくは差支ないであらう。事實私自身さうだと云へる。今去るに及んで私の心からの願ひは本校の今後の發展加之同僚の先生と生徒の将来の幸福及び生活に懸つている。而し茲で其上に想

に、往古の記念を失わず無事今に傳へ、今も風致を特徴づける昔ながらの名所たる城と、町の昔のすがたとを其儘保存した好ましい日本の町に住めた事は、私が常々實に嬉しく思っていた事だった。新しい物を非常に喜びながらも、流石に傳統的な物に對して敬虔であり、祖先から今日に傳はつた歴史的な遺産を重んずるといふのは、實に國民の品格が深遠であるいい證據である。

先生や生徒と共にした数多くの遠足の途上、或いは獨り散策したり自轉車を驅つたりした時、私は繰返し繰返し確信を増した。日本は何と風景美豊かな國だらう。山と海とのかくも見事に融合している自然を見るのは、外ならぬ獨逸人の

私には特に意表外の体験だった。さてかう言ひつつ私が眼前に髣髴するのは單に松島、天ノ橋立、宮島の様な日本の名所奇勝のみでなく、特に此の大山と三瓶山との間の景色の餘りにも「知られな過ぎる」美しさなのである。此は實際もつと有名になる丈のねうちがある。幾度私は枕木山や朝日山の上に立つて夕日に映える陸と海とを瞰望し、あの印象深い平和な風景に見入つた事だらうか。此の出雲の國の老木鬱蒼たる神社佛閣の美しさ

海 入江 島嶼 さては遙かに淡くかがやく隠岐の國の山々を配して青く透き通つた日本海の美しさ。獨逸の友達に一度この絶景を見せてやり度いと思つた事が何度となくあつた。また秋 田圃道を歩いて農夫達が精出して働く様を見、時

い起されるのは今は本校に働いて居られない先生や卒業生の事である。古い生徒達から時に便りを頂き、其の人の様子を聞くのが私には常に大きな喜びだったが、将来も獨逸に在つて嘗て松江高等学校で相識つた同僚の先生や卒業生のことを何か聞く時はいつも實に嬉しいに相違ない。それから先生や生徒で既に今は世を去られた方々も今俥ばれる。皆私には忘れられない人達だった。其の中特に多田教授が思ひ出される。多田教授は学校で急逝される迄、私が松江に居を定めた當初の親切な友人だった。教授を始め亡き先生方の追憶に榮あれ、更に又卒業生で職場に出、祖國の為祖國の偉大と将来のために喜んで若い前途ある生命を捧げられた

人達をも只々謹んで想い起す。私は嘗ての世界大戦の参加者として、自己の生命を犠牲にすることがどんなに意義深いかよく計り知る事が出来る。

《人其の友の為に己が命を捨つる、これより大いなる愛は無し》

と三八傳福音書十五章十三にも既にあり。

さて私が現に共に体験したのは学校の歴史の一駒丈でなく、この松江の町の歴史、すてきな近邊の地方の歴史の一部にも及ぶ。松江はここ十四年間素晴らしい發展を遂げた。今日、松江の新しい綺麗な橋を渡つたり、綺麗な街路を見たりすると、十四年昔の松江の面影はもう認められない位である。とは云へ松江の様

が經つに從つて彼等の苦役から受ける印象として、唯尊敬の念丈が起る様になつた時に、我が新興獨逸も亦農夫の勞働を重要視し尊重している理由が特別はつきり理解する事が出来た。私がかく日本及び日本の人達を良く知る事を得たのは、偏に大へん親切に援け知らせて下さつた總ての友達のお蔭だと有難く思ふ。

第九章 カルシユ氏と生徒たち

それでは、今なお、お元氣なかつての生徒の生の声をもとに、カルシ先生のひとがらを語ることにしよう。それには、まず酒井勝郎氏に登場して貰おう。彼には「田舎の大学から」高浜印刷（私家版）昭和四十四年「カルシユ先生」酒井九ホ

堂（私家版）昭和五十五年、旧制松江高校校史「高のふもとに」、同窓会報「翠松」などに収められた手記がある。かれは島根県出身で昭和三年に松江高等学校を卒業した第五期理乙生⁹⁵です。東京帝國大理学部で無機化学を専攻し大学院を経て浜松高等工業学校および日本放送協会技術研究所でテレビジョン技術の研究、陸軍科学学校、多摩陸軍技術研究所でレーダの研究を行い、戦後は元島根大教授、元琉球大教授として無機化学の研究をしてきました。

彼は、私がカルシユ先生を知つたのは、高等学校でドイツ語会話の先生としてで

⁹⁵ 当時松江高等学校では理科、文科に分かれ英語のクラスが甲、ドイツ語のクラスが乙であった。

ある。今その初対面を語るに當つて、その前任ブラーゲ先生について述べておく必要があると思つ。「と語っている。そこです、つぎの言葉を紹介する。

九・一 シュパチーレンゲーエン

カルシユ先生のこの温厚なやり方に対して、批判的な意見もあつた。「あれでドイツ語の力がつくだらうか。」と言つのだ。なる程このクラスは医進クラスと仇名される程で、医者志望者が殆どだ。医学部へ進んだら、ドイツ語が大切だそつた。たとい会話でも、日本語を全く御存じない先生についていいのだから、と

別な考えでこつ言つた。

「なる程、ブラーゲさんのやり方がつづいていたなら、我々の会話の力はもつとつくだらう。だがカルシユ先生に教わつていると、ドイツ語教育をとおして、もつと深いものが教えて貰えると思つので僕はこのままの方がいいと思う。「彼のこの言葉が、私の心を強くゆさぶつた。「ピッテシュパチーレンゲーエン。」などと符牒のような片言を操つて散歩に誘つと喜んで応じる先生だつた。「アムネヒステン・ゾンターク」と約束が成立するとこの一行に喜んで参加する私だつた。

「先生もこつやつて我々に親しくして、日本語を覚えたいし、僕たちもドイツ語に慣れたいので、一挙両得なんだ。「この

計画の先頭によくたつている永井君は、こんなふう^にに自画自賛していた。大抵五六人のグループで、よくフアーラー(自転車)で行った。行った先で、何でも拾って来ては、「ヴァス イスト ダス?」と言って、先生に会話のチャンスを求める。こんな時も返事は些末な事に迄行き届いた。

出雲浦の干酌での事だった。浜で拾った小石を見て、「ダスイスト デヤ ビム スシユタイン」という返事を貰ったのだが、さてこのビム スシユタインが誰にもわからない。そこで、「ダスイスト デヤ ビム スシユタイン?」という不見識な質問を、誰やらが出したら、先生から又別の返事が来た。「デヤ ビム スシユタ

イン イスト イン エングリッ シュ ザ パミス ストーン。」

「これでもまだみんなはわからない。まさか「ヴァス イスト ザ パミス ストーン?」なんて聞くわけにはいかない。大体考えてみれば、こんな質問がおかしい。「これ何ですか」と聞けば、「ドイツ名がかえって来るに決まっている。そこでそのものの日本名と照らし合わせる。そこにこの話し合い目的があると思っていたのだが、わからなくて英語名で言っている。まだわからないのだ。拾ってきた当人はもとより、みんなもこの石が何石なのか知らないのだ。「小学生が遠足に行つて、先生をつかまえてする質問じゃあるまいし……。」と思つて見ていたのだ

が、先生は更に一層熱心に説明を続けられた。まず、エルデ(地球)の内部が高温であるという話が出る。そのエルデの内部から、高温のラーヴァ(熔岩)がエルデの表面に噴出して、ウルカノ(火山)になるといつて火山岩の成因を話されたが、これは中学校で教わつていてみんな知っていた。「その時ふき出したラーヴァが流れて、ゼー(海)にまでとどくと、急に冷えて【じゅつ】と……」「ああわかった。軽石だ。「ダズジス ストン フロート オン ザ シー ウオター?」永井君が勢込んで英語で聞いた。「ヤー! フエル シユタン デン」

先生は嬉しそうだ。とにかく難題がこの英独ごちゃ混ぜ会話で、鼻がついた。と

ことん迄我々の質問をはぐらかさずに答えて下さる先生にはみんながなついた。小店で駄菓子を買つたらお茶が出た。「ヴァーフィール プフェニツヒ?」とつかりドイツ通貨の名が出ると、そこは心得たもので、永井君が「フュンフ セン。」といつ。先生が五錢玉を「ぼとん」と盆の中に入れて、にこやかに店番の婆さんに会釈されるといつ具合で、永井君の考えた通り一挙両得のシュパチーレンゲーエンだった。

私はこの下りを読んで、「ああ! カルシユ先生は少なくとも松江にとっては誇るべく、重要な重い石だったのに、今では誰も振り向いてくれない。まるで、軽石

Kar (u) sch(i) の様に扱われている (カ
ルシユ先生、失礼なことをいってごめん
なさい!)」と感じたものでした。昭和の
初めに、火山の噴火のように突然日本と
いう地上に現れた熱い、それこそ燃えさ
かる石であって、最初は周りに衝撃的に
大きな影響を与えてくれたのに、今は冷
えて周囲から忘れられてしまっている。
たまたま通りかかった私がそれを見つけ
て、手にとつて昔を偲んでいる。火山岩
が冷えてできた軽石は素朴な姿であって、
何の特徴もないように見える。でも小さ
な穴に残った当時の香りが、今私の手で
暖めると膨らんで外に漏れ出で、当時の
情景が蘇ってくるのです。やはり、先生
の名前が Kar (u) sch(i) でよかったのだ

と思つている。なお、本文中の「永井君」
の言葉は後年の永井博士の行動や業績を
彷彿とさせる「かるい」のエピソード
でした。

九・二 光は東方より

ドイツ語会話はもう一クラス文科にも
あるので、この新任の先生が何を得意と
されてどついつ質問をすれば、喜んで話
に応じられるか等の情報が伝わつて来る。
そこでこちらでも質問の出し方の相談を
した。そしてまず、「何の目的で日本へ来
られたか?」と質問して面白かつたと聞
いたので、我々もそれを聞くことと決めた。
会話の時間になつて、この話を希望した
ら、それへの答えは先生の方でもすでに

腹づもりが出来ていたと見えて、黒板に
書いたばかりのその日の会話訓練用ドイ
ツ文をさつさと消して別の論文名が書か
れた。それはオズワルト シュペングレー
のデア アップファルデスアーベント
ランデスといつのである。難解なこの題
名だったがこれをヨーロッパ文明の没落
と解説し、ここから話が始められたのだ
つた。自分はシュペングレーのこの論文
を読んだのだ。それにはこんな事が書い
てある。マテリアリスム(唯物主義)に
走り過ぎたヨーロッパのチビリザチオン
(文明)の病態について論じたこの学説
は結論として、そのような文明に支えら
れるヨーロッパ諸国に文化崩壊の時が来
るといふのだ。そしてその時期は、西暦

二千年頃と予想される。この時全世界の
人々の間に混乱が起り、大きな危機に当
面すると思われるのだが、そこへ一条の
文化的光を投げかけるものが考えられる。
それはオリエント(東洋)のゼーリッシ
ユ(精神的)なクルトール(文化)に違
いないだろう。こんな学説紹介の後で、
話がされた。「私はこのオリエントの光
を見る事に熱意を持つ。それでここへ来
たのだが、この日本の国は、東洋の国
の中で、特に目立つた特徴がある。それは
他の地域からきた思想や文物を巧みに吸
収してこれを融合する力を持っている事
である。ここへ来て見て、ここで目につ
き、あまりよそで見られない事は、古い
ウルシュプリュングリッヒ(オリジナル)

なものが、新しい今のものと共存して残されている事である。この点を日本の宗教について言つたならば、この国には古代神様の信仰がありました。それが今神道に残されているのですが、中世に大陸からブディスムス（仏教）が伝来し、一緒にコンフチヤニスムス（儒教）やタオイスムス（道教）の思想が伝わり、それからクリステントウム（キリスト教）もヨーロッパから伝わりました。それらがこの国の人々の間では、一つのものであるものを滅亡させるような事にならず、共存しているのです。このことは世界中の識者の注目する処であります。「先生はここで次のように言葉をつなされた。「私はそのような環境で教育を受けて育つ、

日本の若い人々の姿を見て、東方の光を探つて見ようと考えて、ここへ来たのであります。「スケールが大きくて、しかも身近にひしひしとする熱辯に、みんなは胸ゆり動かされて聞き入っていたが、話が済んだら、授業時間がもう終わりで、この日の会話訓練は無かった。本文中で「同質と異質」の「混在と調和」で特徴づけられる日本の文化の一面を他の文化と比較しながら語るカルシュ先生の確かな眼を感じる。このことは、彼の世界の認識から当然のことですが、その背景は第五章 学問と著述、第九章の同僚や学者との交流、十一章カルシュ先生の門下の人々で、酒井氏が思い起こしているカルシュ氏の「エービゲ シュテレ」永

遠の静けさ」からも容易に推測でき、彼の人生観を貫く重要なキーワードである。ここにもハルトマンの影響や仏教の影響が見られる。

九・三 ナチョナーレ クライドゥング

先生が或る日、見なれない緑色の服を着て教室へ来られた。みんなの不審な眼を弾き返すように、いきなり発言された。

「ダスイスト デイ ナチョナーレ クライドゥング。」（これは国民服である）この言葉に続いて、敗戦後の母国ドイツの事が重々しく語られた。国家の経済的窮乏という苦難を耐え忍んで、国民挙つて消費を切りつめる事を考えている。その一つがこの服装の規格統一であるという

説明だった。今にして思えば、その後十数年たつて、私達の国日本も戦争にまき込まれて、国家非常の際の国策と称する耐乏生活をさせられて、国民服を着せられたのだからわかるが、当時即ち昭和初年の我々には異様だ。でも深刻な思いでこれを聞いた。カルシュ先生はナチオナリスムス（国家主義）に思いを寄せて居られる愛国者だった。この時誰かが「ドイツの国歌を歌つて下さい。」と言つたら内心嬉しそう、それでも「隣の教室に聞こえては……。」と、気兼ねする先生だったが、「大丈夫」といつてせがんだ我々の声に応え、遠慮勝に低い声で歌い出されたのだが、おしまいになって、「ドイツ チュランド ドイツ チュランド ウューバ

いかけて追いついて、いっしょに行くなら、帰るなり、この土地の者としての役を勤めよう。」

松江の用事をそこそこに済まして、大急ぎで引き返し、後を追った。本庄から手角、中山峠を越して、日本海沿いの出雲浦部落を通って西行するのだ。ここは一部落越す毎に上り下りの坂道がある。北浦、千酌、笠浦、野井、瀬崎と難路を息せき切ってふつとばし、走り抜けて野波の部落へはいったが、先行した先生の姿はもうなかった。ここから先はもう詰坂である。仕方なく通りがかりの土地の人に聞いて見た、「外人さんを見なかつたか?」と。「見ましたよ、大きな外人さんが自転車で山の方へ行かれるのを。かれ

これ三十分も前でしたから、いまならあ、はあ詰坂でしょう。」

私はこれを聞いて、もうこれ以上追つかける勇気をなくしてしまった。

翌日丁度、先生受け持ちの会話の時間があつた。きつと何かあると思つている私の目の前へ、いつもと少しも変わらない先生が教壇へ出て来られたので、拍子抜けがした。狐につままれたようでもあつた。授業が終るとすぐ教壇に近づいて、前日の詰坂踏破の事を聞いたら流石に、「ゼーヤ シュヴィーリッヒ。」(大変けわしかった)という返事だったので、「フアーラート?」と聞いて聞いたら、手を腰まであげて、担いで行つた恰好をされた。

「アーレス」(ドイツ ドイツ世界に冠たれ)となると、感情がこもっていた。

九・四 強行軍

天気の良い或る日、松江へ用事で自転車を走らせていたら、途中の持田でばったり、これも自転車のカルシユ先生に行き会つた。お互いに挨拶し、私がまず聞いた。「ヴォヒンゲーエンズィー?」

(どちらへいらっしゃいますか?)

「こちらの方への案内なら、先生の教え子の中で、私をおいて他にはない筈なのだ。先生もそう思つて居られたらしく、すぐ五万分の一の地図を取り出して、指でさし示された。それを見て私は驚いた。この土地のひとに難所と言つて聞かされていて、私自身まだ行つた事のない加賀の

詰坂である。

「そこは難所だから行けません。まして自転車では……。」と、とめたが、先生の強行の気持ちはかたかつた。地図には道のしるしがあるから行けるといふ意見である。あまり強く言われるので説得をあきらめて別れ、松江に走つた。

然しどうも気になる。心配だつた。先生がいつか言われた。「日本の山は木が密生していて、ドウルヒゲーエン(通り抜け)出来ない。ドイツの山は疎林でその間が自在に行ける。」その日本の山へ自転車で行かれたのだから、「まず予定通りには帰れまい。下手すると、捜索隊でも出にやならなくなりやせんか。」と思つたら、たまらなくなつた。「とにかく後を追

後日聞いた話だが、この先生は大戦中自
転車隊に入隊従軍して、盛んに山野をか
けまわった歴戦の人だとか。道理で強い
人、偉丈夫であった。

九・五もつけた

その頃我々の間で『もつけた』という言
葉が慣用されていた。それは何かの授業
が先生の都合等で急に休みになった時に
言いはじめられたものだが、会話の時間
に先生の話はつきりつづいて、返答を要
求する指名、即ち『あてられる』ことな
く会話授業がすんだ時もこの言葉を使っ
た。カルシュ先生の場合は、この『儲け』
は意義が深かった。

九・六学園祭の時

奥野良臣(十四期理乙)

カルシュ先生の口癖は何かして貰うと
「ありがとうさん」でした。私どもの松
江高校にも他校で見られる学園祭が年に
一度あった。勉強よりもこちらに全力を
傾倒する生徒も少なくないくらい張り切
るものである。或る年の学年祭に折り、
私共理乙クラス三〇名の出し物の一つと
して模擬店が一軒急造された。飲食店を
提供したりして「まち」のメツチェンな
ど人々を歓待するのであるが、その店名
が「有難うさん」である。おかしな名称
ではあるが、これにヒントを得た十四期
理乙の生徒は学園祭の模擬店で店の名前
を「有難うさん」としたとのこと。カル

シュ先生の口癖を真似て麗々しく大きな
店名として張り出した訳である。カルシ
ュ先生の人気が高かった一つのエピソード
であろう。今私は古い昔の事ではある
が、鮮明に覚えている事もあって一部別
に述べた。ドイツ語を教わったことは勿
論であるが、その他重要な人生哲学の一
端を教えられ、私の後の仕事に重大な影
響を与えた私の大恩人でもある。今天国
に居られる先生に、私共の模擬店名「有
難うさん」の写真に大きな熨斗を付けて
お返ししたいと思つのである。この頃は
今で云う未成年の飲酒はどうであつたか
な。キリンビールのテントの模擬店はな
かなかモダンであつたようだ。すし、ラ
イスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅

茶、ミルク、ケーキ、コーヒなど二〇、
二〇銭(〇)で売っていたようで、現在の
大学祭の模擬店とそっくりです。

第十章 カルシュ氏のドイツ語
カルシュ先生が着任するまでドイツ語
教育とカルシュ先生着任後のドイツ語教
育について旧制松江高校の生徒が語って

十四期理乙生徒の寄せ書き



いる。教える先生の人柄によってその方
法はずいぶん違つようだ。
次に直接にはカルシュ先生の教え子では
ないが田総武光氏がちよつと別な角度か
ら先生を眺めた様子を紹介しよう。彼は
昭和六年八期文甲卒で元鳥取大学教授で
英語の教育に尽力した。
十・一 カルシュ先生

田総武光（八期文甲）

カルシュ先生は、夏休の間ずっと大山
に家を借りて過ごされるのが常であつた。
ギルソン先生と私が大山登山をした時、
カルシュ先生の所に立ち寄つたことがあ

模擬店の前での記念写真



模擬店の様子卒業アルバムより（奥野氏
の提供による）



品が飾られていたと娘が話してくれた。その夫人も亡くなられ、セイント・ゴア夫人にも既にお孫さんができている。月日の流れをしみじみと感じるこの頃である。セイント・ゴア夫人からは、毎年必ずクリスマス・カードを頂き、時々写真も送って頂いている。ご主人は大きいスーパー・マーケットを経営しておられるそうである。



カルシュ夫妻とメヒテルト

る。先生は浴衣を着て下駄ばきで庭に出て来られた。椅子にかけて長々と話が続いた。カルシュ先生は、必ずイエス、イエスと二回繰返して相槌をされるのが癖であった。今でも、そのイエス、イエスが耳に聞こえて来るようである。その時三人で写した写真が今も手許にある。それを見る度に、当時がなつかしく憶はれる。

さて、カルシュ先生が帰国されてから、二十年以上も経過していた頃と思うが、先生の教え子で主に医師になった卒業生のグループが、先生を日本に一ヶ月招待したことがある。その折り、アメリカ在住の先生の令嬢（今はセイント・ゴア夫人）が来日して、先生の講演の通訳など

をして、先生の滞留中ずっと一緒に居られた。私が崙高に在学した頃は、令嬢は二才か三才の可愛いお子さんでした。私は久方振に先生にお会いしたいと思ったので、先生の滞在しておられたホテル一畑に泊って先生とゆつくりお話することができた。出雲大社に参拝された時も、一緒に緒させて頂き、ゴア夫人とも親しくお話することができた。

先生が亡くなられた後、昭和四十七年私の娘の主人が家族連れでドイツに留学した時のことである。娘達は私の依頼で、老人ホームに住んでおられたカルシュ夫人を慰問してくれた。夫人は大変喜んで涙を流されたということである。日本がなつかしくて、部屋一杯に日本の色々な

次は遠藤捨雄氏である。彼は京都出身で昭和一一年卒業二期理乙の生徒である。京都市大農学部農業化学科に進学し、現在も京都に住む。

十・二カルシユ先生とエンド豆

遠藤捨雄(二期理乙)

カルシユさんと言えば、我々は大柄のかなり福々しい、中年の外国人を思い浮かべます。(私の兄は、松江高校の第一回の生徒でして、よく騒いだ連中だった様ですが、ドイツ人の先生が嫌い、わざと怒らしたりして、授業の進行を遅らせたりしていた話を聞いて居たモノだから、自分の場合は、一体どんなドイツ人が現

れるのか、大いに興味をもって、始めての授業を待ち受けて居たのでした。)

ドアを開けて入って来たのが、他の先生と同じ様に、広い袖に朱色の長い紐のついた、黒い大きいガウンを着た大男で、ニコニコしながら、入って来ました。大股で、窓の所までまで歩いて、DisserenのDissert.と言ったのが、授業の始まりだったことを、思い出します。欧州大戦(勿論、大正はじめの)では、砲兵大尉で従軍したという噂を聞いて、サモアりなんと思つた程の体格の良い人でした。家(官舎)へ遊びに来ないか、と言われたのか、勝手に押し掛けたのかは忘れたが、とにかく数人の者が、時々、先生の家に押しかけたものでした。(ある日の

こと、先生が奥様に「今日は遠藤君が来るよ」と言われたのを、横で聞いていた娘のメヒテルトちゃん(まだ、小学校へ入つて一二年の頃だとおもつ)横で聞いていて(エンド エンドマメ 豌豆 遠藤、妙な名前だな)と思つたさうです。このことが、後年 五〇年も経つてからの話に繋がるので、此処に一応書いて置きたく思います。ある時に、先生が言われました。「今、ドイツから交換学生が東京に来ていて、その中の一人が松江に来るから、話に来ないか」と。野次馬根性もあつたが、よい機会とばかり、何時もの連中が先生のお宅に集まりました。

先方は大学生、こちらは残念ながら、高

校生。歳から言えば、こちらの方が上の者も居るのに、とにかく、そのドイツの学生は威張りたがつて、シャクにさわる。自慢顔に、彼は、ライダーで遊ぶ話をし出した。発進の時は、人力で引つ張つたりはしないで、オートバイの後輪に、ドラムを着けて、それに綱を引つ張らせると言つ。松江付近では、ライダーは未だ見られない時代ではあつたが、朝日新聞から出していた月刊の航空雑誌には、毎号、日本でもライダーで遊んでいる

記事や写真が載っている。そして、日本では、自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進させている写真や記事ばかりである。その方が安定感もあり、工作もし易い筈だ。

やると言ってきたも、その為に会社を休む訳にはゆかないし、残念に思っ居た処、旨く大阪に出張を命じられた。先生の喜ぶ顔を想像しながら、姫路城の写真を買って鞆に入れて、大阪での仕事が終わってから、ホテルに電話したら、ナント、歓迎会に出られていて、ホテルでは、会場の名も、場所も知らないと言つ。世話役の家に電話したが、やはり奥様も、聞いていない、知らないと答えて、スゴスゴと大阪を去つた事を思い出した。今なれば、会の幹事役に聞いて東京のホテルに送るとか、間に合わなければドイツの家を聞いて送り届けるのが常識だろうが、まだ、今のように郵便事情が良くなくて、思いつかなかったものと思つ。ガ

ツカリするだけに、「終わってしまったのが、残念である。この、日本に来られた時に知つたのだと思つが、先生が松江を引き上げて、ドイツに戻られたとき、日本に居るオット大使から、「ドイツに居たら、戦争に引張られるぞ。日本に来い」と言われて、日本に戻られた。(オット大使とは親しい友達だったとか)一家全部で来られたのなら、娘さんも、終戦の頃は立派な大人になっておられる。だからメヒテルトさん、日本語が上手なばかりでなく、字も書けるのだと思つた。というのは、メヒテルトさんと文通する様になつて、彼女が良く日本語を覚えていて字も上手なのに感心したからだ。メヒテルトさんとの交友を書いて置きたいと

不十分なドイツ語で、其れを言つのだが、先方には理解ができない。自動車の後部車軸に差動装置のあること自体を知らないらしい。(私は、中学一年の時に、島津製作所の作つた模型を見ていたし、雑誌「子どもの科学」にも自動車の構造は出ていた筈だ)この論争？を見かねて、というが、聞きかねてと言つが、カルシユ先生が中に入って遠藤の言つ事、と言つて、ドイツの学生に説明して下さつたことを、思い出す。私達は、先生が科学的な知識もあり、哲学にも詳しい、と聞いていたが、倫理や哲学の知識に触れる機会はなかつた。噂だけ、誰かが、「カルシユ先生と呼ぶよりも、ヘルドクター、と呼んだ方が喜ばれるぞ」と言つていた

が、言つてみたことはない。
(私は一九四四年に戦地から戻つて、陸軍航空燃料工場に配属せられた。此処で、前の世界大戦中にドイツがやったという木材の糖化を日本でも行つ事になつた。どの文献を見ても、二つの方法が、数行載っているだけだった。)基礎実験が終わり、テストプラントを行う鉛の一トンが既に無かつたのを思い出す。カルシユ先生は、野戦では、どんな仕事をされていたのか。仕事の合間に考えたりしたものだつた。
そして、世界大戦は終わった
戦後、兵庫県の会社に居たときだが、カルシユ先生が日本に来られるとの事を、同窓会から報せてきた。大阪で歓迎会を

思う。

メヒテルトさんが日本に来て居て、京都には何日の何時に来る。知っている人は迎えに来て欲しい。という記事が、同窓会の支部から言ってきた。京都では誰か迎えに出るだろうか。医学部を出た連中は、学位をとつたら皆、各地に散つてしまつ。文乙の人は居るに違いないが、果たして誰がそつなのか知らない。しかし、支部長の松原先生は迎えに出られるだろう（先生は物理の教授だったが、そのときは大津の短大の学長だった）。とにかく、時間に駅まで行つて、松原さんを探せば、彼女が『おばあさん』になつていても、判るハズだと思つて、列車の着く時間に行つてみたのに見当たらない。おかしい、

思いながらも、「ホテルが判つて居るのだから、ホテルに行けばよい」と考えて駅を離れた。（駅で会えなかったのは、私のミスだったのだが、省略する）。駅前の交差点へ来たら、数人の人が居て、その一人が小さな声で、アツ、エンドウさん、と言つて私を見つけてくれた。そして、引き続いて、女の声で「遠藤さん！」と言つのが聞こえた。皆が驚いたのだが、ホテルに着いてから、彼女が説明してくれたのが、前日の「昔、カルシユ先生の官舎に私が行つたときの、エンド、エンドマメ、遠藤」を思い出したと言つのであった。メヒテルトさんは、金閣寺を見たいと言つので（支部の世話役の蓮仏さんと一緒だったと思つが）金閣寺に一番

近いところに住んでいるから、私が案内する事に決まつた。彼女は大柄である。

（私・一七三センチが圧倒されるくらい。体重は遙かに私を抜く）幸いなことに、彼女は日本語ができるので、私は英語もドイツ語も話さなくて済んだ。彼女がアメリカに帰つてから、あちこちで撮つた写真を送つたら、礼状が来た。こちらの手紙はワープロで打つて、フリガナを付けて置いたのが良かったさうだが、彼女の日本語も大したもので、漢字も書けている。喜ばれたので、何年かはフリガナを続けたが、横着して省いたら、偶然かも知れないが九八年には、日本婦人代筆で手紙がきた。（其の婦人は竹内さんと言つて、ノースカロライナ州から遊びに

来て居られ、お父さんの名は為信、お祖父さんは平太郎、昔は松江の奥谷に居られた由）さて、夫人は毎年、クリスマスカードを送つて下さるのだが、英語以外の外国語が入つていたり、謹賀新年という字が入つていたりする。この頃は息子さんや娘さん達の写真は無くて、老夫婦お二人の写真ばかりだが、何時もご主人の胸に、大きいメダルが下がっているか、置いてあるので、何のメダルか聞いてみたら、お二人がメンバーになっているグルメの会（ギルド）の「Gaine of Distinctions 1248A・D」巴里（パリ）で開かれたもので、名誉と歴史のあるグルメのクラブです、との回答で、ご主人は名誉会員だそうです。ご主人は八〇歳を超

(一) 段階的思考と跳躍的思考
 西洋人と東洋人の思考、理論のすすめ方の間に、大変な違いがあるのです。西洋人の場合は、或る目標を立てて、理論を進める時、用意周到に誤りなく一歩一歩と積み重ねて進み長年月かかって、或る結論に到達するのです。これを評してシュトウフェンワイゼ（段階的）と申しましょう。所が東洋人の場合、仏説等によく見るのですが、途中の理論段階は素通りして、いきなり結論に到達します。これをシュブルングスワイゼ（飛躍的）といきましょう。前者西洋人のそれとこれを比較します。要するにこれは東洋

十・三カルシュ先生の講義

人が瞑想的で直観力に勝れているということによるからでしょうが、瞠目にあたいすること、西洋人の驚嘆する所であります。

「カルシュ先生」酒井勝郎著より
 (二) ヴァスイストダスターザイン？
 或る日我々の方から要求した。
 「ビッテシュプレッヘンズイ ウンス
 フォンデヤフィロソフィー。」（どうか我々に哲学について話して下さい。）
 カルシュ先生が哲学専攻の偉い人だと誰かが聞いて来てのこの要求だったのだが、この要求がクラス全員のものと判じ取られた先生の顔には、喜色があった。

早速例の如く黒板の文が書きかえられ、

えて居られるのに、お元気で欧州は勿論お二人でオーストラリア、ニュージールランドなどにも行かれたそうです。以上の事など、他にも、何人か、メヒテルトさんと手紙の交換をしている人もあるのがご存じの方も多いと思うのだが、ご主人が元々はドイツ人であることを、ご存じない人が多いのではないかと思つて、次のことを紹介したいと思います。何時のことだつたか、私がライン河を船で下つたことを述べたとき、「ローレライの少し下流に、Berg」といふ町があるが、其処が主人の故郷である」といふ事であつた。偶然か、私は、その町を覚えていた。やはり、W. Berg氏はドイツ人であつたのだ！そして、歴史のある家の出かと思つ

たことがある（松江高校の卒業生で、何人も知らない人がいるだろう、と思つて付け加えておく）。



カルシュ夫妻・メヒテルト・フリーデルン・
 中村啓成氏（中村氏提供）

まず、

「フィロソフィー イスト ツー デンケ
ン ヴァスダス レーベン イスト。」(哲学は人生とは何ぞやと考える事である。) ころ書いて、これを読み説明されました。これが哲学の入門のようです。それから次に、「ヴァス イスト ダス レーベン?」(人生とは何ぞや?)と一歩すすみました。正にシュトゥーフェンワイゼです。この文も一語つつ発音して読み説明し、少々具体的な例話もありましたので、みんなは了解です。そこで次に移りました。

「ヴァス イスト ダス ダーザイン?」

(存在とは何ぞや?)

「ううなっ たら誰にもこの解答はないわ

けですが、「哲学とは?」という我々の質問に対してはこれであます所ありません。先生はここで、「ダス イスト アレス。」(これですべてだ)と言ってチヨオークを投げられました。

「カルシユ先生」酒井勝郎著より

(三) カルシユ先生の授業

奥貴雄^ニ(六期文乙)

カルシユ先生は、まことに人なつこく、親切な哲学者という感じで、毎日のように先生から三年の間、独逸語の教育を受けました。とくに教科書として採用され

^ニ 旧姓 大橋 貴雄 東大法学部卒 勲銀 鹿島組 相互銀行社長 岡山理大講師、大阪学院大教授など歴任

たレクラム文庫の哲学書を記憶しております。現象学派に属するハルトマンの哲学が、その本に書かれていましたのを感じ深く想起します。当時先生の教壇に立たれた姿、黒板にいろいろ書かれた独逸文学、学校に往復のときの先生の愛用されていた自転車、それから奥谷の先生の住宅にあてられた官舎などの模様はいまだに、まぶたの裏にありありと浮かんでまいります。それらのお先生の言動のわずかずが、当時のわれわれ高校生の間形成に渺からぬ影響を及ぼしたことを存じ感謝に堪えません。

「湍友」九号よりカルシユ先生来日時に

(四) マルクスの逸話

昭和六年の冬か昭和七年の早春の卒業前に二階の教室において、カルシユ先生が当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもっていたカールマルクスの逸話について、生徒の質問に答えられている処で、この授業は九文乙一同の心にも深く残っているものである。(白石氏談)

この経緯については宮田氏がこの後の「見つけた講義録」のなかで詳しく述べている。

(五) カルシユ先生と一緒

以下の写真は昭和六年に、カルシユ先生が一時ドイツ帰国される時に校内の集会



昭和六年春カルシユ先生送別会
(カルシユ先生一時帰国時に)

この時の思い出を白石氏が次のように語っている。
昭和六年早春にカルシユ先生の一時帰国時にクラス一同の相談の結果、先生の送別会の開催を決めた。準備はクラス総代(クラスと学校事務局・各教授との連絡役、これを高等小使と呼ばれていた)の役にあつた朝日重雄と白石隣の二人で担当した。会はとても和やかで日独語が入り交じつた賑やかなものであつた。昼食だつたか早い夕食だつたか、食へものが何であつたかは忘れた。しかし、カルシユ先生と膝をつき合せての会食は確か最初のことであつた。カルシユ先生は本当に喜んでいらつしやつた。いつも微笑をたたえられて日本語なしの会話をつづ

所で九期文乙が催した送別会が済んでその座敷の外の縁側で撮影したものである。前列左より二番目白石氏、三番目はクラス担任の心理学が専門で後に東京音楽学校に転任された山下先生、四番目はカルシユ先生、後列左より一番目岡崎氏、三番目宮田氏、後列右より二人目に故鹿野氏らの顔が見える。(白石氏が提供)。



カルシユ先生マルクスの講義風景

けられた。最後に私が生まれて初めての
 独逸語で閉会の挨拶をして拍手を受けて
 会は終わった。その時カルシユ教授が私
 に微笑みながら握手をしながら短いドイ
 ツ語で何か言ってくれた。しかしこ
 のお言葉が私には聞きとることができず、
 またこれを先生に聞き返すとつさのドイ
 ツ語の作文ができず、今日にいたるまで
 その意味がわからずにいることが残念で
 仕方がない。

大体、閉会の辞が私に決まった時に日本
 文で原稿はすぐ書いたが、独逸語に直す
 ときに「俺が助けたる」と言った者が一
 人あらわれた。故鹿野明君である。教室
 の椅子席はアイウエオ順のため鹿野、白
 石と「シ」で二年間つづいて並んでいた。

それで早くから鹿野君とは仲良しの一組
 であった。先の寫眞の最後列右から三人
 目の小男である。この鹿野君が私の原稿
 を読みながら、一心にドイツ語の辞書を
 ひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書
 を引き出して、私の意見を聞きながら書
 き上げてくれた苦心の作である。彼は昭
 和六十三年に昇天しているが、この送別
 会は私にとつては大事な学友が残して
 くれた大切な思い出であることを付記し
 ておきたい。

(六)カルシユ先生の不在中の思い出
 ハーマツヘル教授は「カルシユ先生の不
 在中だけ」という気軽さをお持ちだった
 のか、それとも牧師さんの立場から日本

人と話を交わされることに慣れていらつ
 しゃたのか、我々生徒に対しても、ドイ
 ツ語を教えてやるとか、もっと勉強が必
 要だとか、の先生らしい堅苦しさは全然
 感じられない穏やかな物腰の方であった。
 それが、七十年経った今、同教授の存在
 すらも忘れていた旧生徒が多い理由だと
 思う。私には只一つだけハーマツヘル教
 授についての思い出がある。一人の同級
 生がカルシユ先生に対するのと同じよう
 に考えて「先生、ドイツ語の歌を唄って
 ください」とお願いした時のご返事が日
 独語チャンネルで「私の声はカラスの声
 です。Ich kann nicht singen.」であつ
 た。「職業柄、賛美歌はお得意の筈なの
 にな」と思ったが、それ以来私達は歌のおね

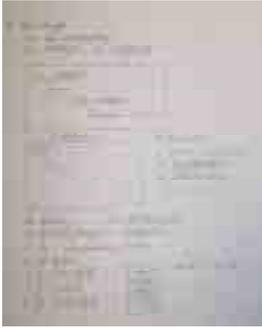
だりはしなくなった。
 (平成二三年二月九日白石談)

宮田正信氏からある日突然カルシユ先生
 の講義録発見のニュースを聴くことがで
 きた。それを以下に紹介する。彼は大阪
 出身の国文学者で、京都帝入国文学科卒
 後滋賀大学教授などを務めた俳諧・俳句
 研究の大家で昭和四十五年に文学博士を
 授与されている。著書に「雑俳史の研究」
 があり、現在も毎日研究に勤しんでいる

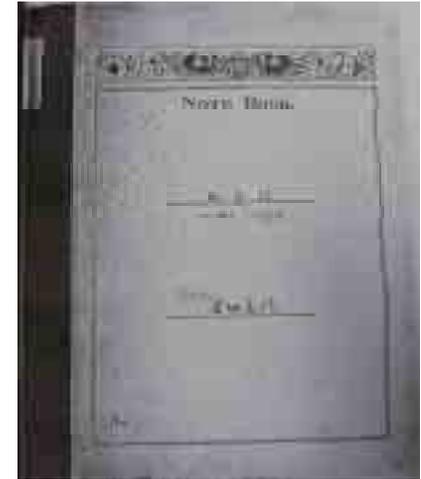
十・四見つかつた講義録

宮田正信(九期文)

手紙の書き方の授業のノート

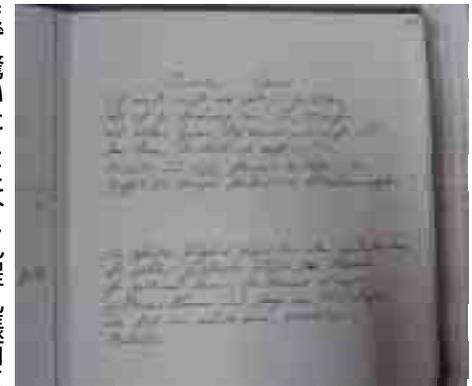


教えたり、ドイツの歌を教えたり、当時の授業を彷彿とさせるノートには細かく講義の内容が伺える。できれば私も聞けたらと思った。おそらく聞き取りの練習と思いが、添削も丁寧で、思い出に語られた先生の答案用紙の返却の様子が目に浮かぶ。



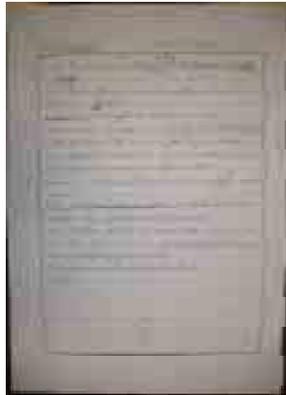
七十年前の宮田青年のノート

まず驚いたことはこれ程几帳面にノートを取ったことである。筆者も嘗てドイツ人のドイツ語の授業を聞きながらメモを整然とペンを走らせることはできなかった。先生は手紙の書き方を図解しながら



ローレライの歌詞
カルシュ先生講義録

宮田青年の宿題の添削結果



前略 さきに御報らせしましたカルシュ先生の御講義ノートのコピー同封御目にかかけます。何とかまともな報告が出来たと思いましたが何分七十年前も前の高校生の書き留めたもの、今開いて見ても読み解けぬ所だらけです。とりあへずありのままの姿を御覧いただきます。

表紙に《独逸語》 カルシユ教授、文二乙》とあり、第二学年（昭和五年度）の始めに新調したものです。「カルシユ教授」とあるのは当時の少年の頭の中では先生方の身分職階などは一向に無頓着だった証拠です。教室にお迎へする先生はどなたも均しく教授だったのでせう。表紙の肩に白抜きに写つてゐるのは貼紙で《独語 カルシユ》とあります。ノートはやや厚冊で前半がカルシユ先生の御講義メモで第三学年末まで二ヶ年分です。後半は余白として利用したもので第三学年で受けた論理学の講義ノートの一部が混入してゐます。今日御目にかけるのはその後半部を除いた前半の表題通りのもつぱらカルシユ先生の御講義に関する部

分です。今、本文各頁の左右の肩に数字で仮りのページ数を書込みました（一六五）。これによつて巻首に空白のままになつてゐる「INDEX」欄に仮に見出しをつけて見ました。各頁の冒頭の一語を書き上げただけのものが多く、全く機械的な作業であり御役には立たないかと思ひますが。

本文の記事はすべてノートです。まことに粗末なかつての高校生の残した気儘なメモにすぎません。当時独逸語を第一外国語に選んだ文二乙生の独逸語は先生四人がかりの授業をつけました。うち御三方のものは几帳面に定期に学期試験がありました。カルシユ先生の分は別枠で、特に時間を定めて試験を受けた記憶

がありません。その替り、平常随時又は毎週持続的にテストに類するトレーニングがあります。いはば毎週が実地訓練の連続で、終始マイペースで先生に向ひ合つてゐればよかつた訳で、開き直つて先生の一言一句聞きもらすまいとノートを採る必要が全くなかつたので、たまたま手許に残つたこのノートは今となつては我ながら自分の書いたものが読み解けないものに相成つた次第。事情御諒察の上御笑覧いただきたいと存じます。

そんな訳でこのノートの大半は私の個人的な断片的なメモにすぎません。とりわけ御講義のキーワードの類の語彙の羅列のページが少なくありません。いづれも先生が熱心に御話し下さつた当時の御

様子が、バラバラの語彙の累積の向ふに浮かんでは来るのですが、それを纏めて当時の御講義に組立て、再現することは、今の私の理解力、再現力では正に至難の業です。かりに試みて見ても、教壇のありし日の先生のお姿のまはりには、一つ一つの言葉が浮遊して、その日の御話のテーマをおぼろげにさぐり求めるくらゐが関の山で、断念せざるを得ません。そんな訳でこの度はノートのありのままを御覧いただくことにしました。ついでには次に一、二気付いたことを認めて責をふさぎたいと思ひます。

（頁・一）Damerstagで始まつてゐますから、昭和五年四月早々の木曜日から開講だったことが判ります。当日は「東京

からははるか北の国ドイツのこと何なりとお話します。くらゐで先生のお話が始つたらしい。しかしついで、出しぬけに Der Wikan が出て来ます。それが次の unheimlich とつながるのか。間を置いて次の三行は筆蹟が改まつてゐて別の時間のことのやつですが、
 Mythologie の話で「わはわは」の Wikan と関連がありやつですがよくわかりませぬ。

(頁・三) Die bauren 以下ドイツ古代の農耕社会の話らしく (頁・五) は話題が改まつて丁寧な挨拶の仕方と女性の挙措などから都市生活の話が、先生の板書の図解とともに進行した様子が、それを写し探つたメモから窺われます。先生は多くの

松江近郊の風景画をのこしておいになることをこの度はじめて知りましたが、教室でもよく黒板にチョークで図解して説明下さつたことが今更に思ひ出されま

す。
 このノートでも、頁・九、十一、十四、十五、二十二、四十、五十三などの稚拙な私の転写にも、ありし日の先生の板書して下さる御後姿が偲ばれます。

(頁・十六) で手紙の書式の解説が終つたところ、(頁・十七) に Lorelei (Heine) に話題が變つて気分転換で肩の凝りをほぐして下さる御心遣ひと思はれます。ここは全部先生の板書して下さつたものを書き写したものです。次に出て来る (頁・二十一―二十三) Die Wäinallhymne

(頁・五十一) Soldatenlied (頁・五十二―五十三) Der Lindenbaum (頁・五十四) Heideröschchen¹⁸ (Gedicht) もすべて同様です。

どの歌の場合にも一行一節つづ黒板に向かつてチョークを走らせつづ、あのやはらかな低音のハミングで確かめるやつに書き進まれた後ろ姿が目に浮かびます。

その後皆で節廻しを辿りつづ歌ひ覚えただことでした。少々肩のこる真面目な話題がつづいたあとの、それはまことに寛いだ楽しい一時でした。ここに上記後半の三曲は毎時連続してゐます。これは一寸異常ですが、これには訳がありました。

松江近郊の風景画をのこしておいになることをこの度はじめて知りましたが、教室でもよく黒板にチョークで図解して説明下さつたことが今更に思ひ出されま

す。
 このノートでも、頁・九、十一、十四、十五、二十二、四十、五十三などの稚拙な私の転写にも、ありし日の先生の板書して下さる御後姿が偲ばれます。

(頁・十六) で手紙の書式の解説が終つたところ、(頁・十七) に Lorelei (Heine) に話題が變つて気分転換で肩の凝りをほぐして下さる御心遣ひと思はれます。ここは全部先生の板書して下さつたものを書き写したものです。次に出て来る (頁・二十一―二十三) Die Wäinallhymne

(頁・五十五) の首めじ (一九三三、一・八第三限) とあります。そこから第三学年の卒業までの残り少ない最後の授業が始まつてゐます。実は、その前年(昭和六年)は晩秋十一月初めから約一ヶ月間同盟休校といふ異常事態が起つてゐました。その事の顛末と反省、評価はさし

措いて、先生方も吾々生徒も、疲労困憊の態で、父兄や町の方々にもいるいと御心配をおかけしました。その騒動が曲りなりに結末を迎へた十二月の初め、あと三週足らずで正月休暇の直前の時期にこの三曲が集中的にノートに残されてゐます。この度の若松さんの思いがけぬ御発議がきっかけで、手許に眠つてゐたこのノートをとり出し、これらの記録に再

¹⁸ Heideröschchen ヲフツツ 意味は同じ。

会したのは正しく奇縁でした。今この三曲の歌を書き留めた時期を背景において、これらの歌曲を眺めてみると、今まで気付かずにみたことに、今更ながら心打たれるのです。ほかでもありません。これら三曲の裏からにじみ出て来るカルシユ先生の深く温かい無言の教育愛ともいふべきやさしさに心打たれるのです。その時は私同様に、恐らくはクラスの誰しもが、そんな事に気付かず過ぎ去って来たと思ひます。他でもありません。ほぼ一ヶ月振りに教室に戻って来た私達は、私達自身はそれに気付かずとも、カルシユ先生の御目からは、一月前の生徒とはやはりどこかちがって見えたにちがひありません。顔つきからだけでも、どこ

なく以前とはちがって荒れずさんで見えたのでせう。それを目ざとく嗅ぎ取って下さった先生の温かい思いやりのお心から出た、咄嗟の御処置であつたらうと思ひます。この三曲連続の歌の時間を間に置いたおかげで、正月明けからは平常心で大学進学準備に専念出来たのだらうと思ひます。

ハイネの *Lorelei* や *Der Lindenbaum* は *daröschon* は和訳の歌詞で、すでに耳に馴染みの歌でしたが生まのドイツ語で歌ふ感動はまた新鮮でした。とりわけ私達を喜ばせたのは *Soldatenlied* でした。明治以来の吾々の聞き訓れ歌ひ馴れて来た日本の軍歌の概念には収まりどころのない歌で、その刺激は強烈でした。

こんな軍歌があつたのかと深く心揺るがされる思ひがしました。当時広く読まれてゐた *ノマルク* の *Im Westen Nichts Neues* の悲惨の一かけらもなく、ただ第四節J

*Vann im Felde blitzen die Granaten,
weißen die Mädchen um ihre Soldaten.
Es war um ? Es dar um! Es bloß wegen
Tschinderassa, Bunderassasai, Uffinh
と唱ひ流した所がありませんが、それもあとにつづく楽隊の囃し詞の繰返して消去してしまふアツケラカン振りです。これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍された際の先生の唯一の戦場土産だったのかも知れません。これは友人達が卒*

業後も折にふれては口ずさんで当時を思ひやる愛唱歌の一つとなりました。今でも時々話題になる懐かしい歌です。さて筆のはじめで、後まはしになりましたが、ノート冒頭に戻ります。
(頁・1)に次の如くあります。

*20 3 von Kobe
Heerhusen
Deutsches Schrift
Hamburg-Amerika Linie
erste Mai Genua*

これは(第二学年)の年度末に、ノートの巻首の余白に書き込んだもので、この年昭和六年四月から七月にかけて、先生一時ドイツに御帰国の際の御予定表で

す。昭和六年早春 私達は学校の集会所で学級主任も同席して貰ってカルシユ先生を送別会を催しました。まことに粗末なものでしたが、先生を囲んでの心楽しい集ひでした。その時の写真が白石君の提供した「昭和六年春カルシユ先生送別会」の一葉です。その後旅行日程が確定した時、教室で御伺ひしたのがこの日程表です。ここには三月二十日神戸港出帆、御乗船はHabergr-Amerikaラインのドイツ国籍のHaverkusan号で、五月初めGenoa着となつてゐます。船は更に南にGbratar 経由Hamburgまでの航海だったらしいが、先生はゼノア上陸、陸路Miano 経由Aps 越えて故國にお入りになつたやうです。ノートにはその次に船

会社名らしいものとその所在の図示らしいものがあります。三月二十日はすでに学年末休暇に入り、学校は入試の最中で、私は大阪の自宅に帰省してゐました。当時の記憶では先生の御出帆に間に合ふやうに神戸港停泊中の御乗船宛に、心もとないドイツ語で、御旅行中の安全と無事の再度の御来日を希つて書状を発送しましたが、はたして先生の御手許に届いたかどうかは分らぬままです。船は貨物船と聞いてゐました。それはともかく、今は空路まる一日もかければ行けるころですが、ゼノアまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労なことでした。ドイツからは一度絵葉書便りをクラス宛に頂きました。永らく教室の掲示板に押ピンで

止めてありましたが、いつの間になくなってゐました。

又ノートの方に話を戻します。(頁・五五)以下は昭和七年正月明けから三月初めにかけての和文独訳の連続です。これは恐らく教頭で独逸語教授の筆頭の高島先生あたりの御要望によるものかと思はれます。近づく帝大受験に備へての特訓です。何かの問題集によつたものです。(頁・四十五)の第二問には(昭和二、東大法科)とあります。昭和二年の東大法科入試問題です。先生が九月御帰任早々からそろそろ始まつてゐました。それが十一月一ヶ月の空白をつけて、年明けと共に急にきびしくなつたものと思はれます。中には一寸首をかしげる様な信屈たる文章が

少なくありません。さぞ先生も御苦労なさつたことと思ひます。勿論他の御同僚先生方の支へがあつたにちがひありませんが、それにしても大変だつたでせう。御授業は先づ問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が翻訳して下さるといふ手順で進行しました。しかしこれが実際の大学入試にどれほど役立ったのかは何ともいへません。それより第二学年から日常的に私達銘々に、毎週短い自由作文を独逸語に翻訳して来る宿題を課されました。それを次週の時間の始めに試験用紙を配布して清書して提出させられました。そのあとで前週提出した分に、先生が丁寧に添削して下さいましたものが、銘々に返却、必要に応じて個人的批評を

いただきました。型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく身についたか分らないと思ひます。卒業以来約七十年の空白ですっかり忘れてしまひましたが、たまたまこのノートに挟み込まれて残ったものが少数見つかりました。なつかしい先生の御手蹟を昔を今に伝へてくれてゐます。いささか面映ゆいのですが、これも二、三コピーで御目にかけます。御笑覧ください。

これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べて見て思ふのですが、入試問題集の方は目先の功利一点張りで無味乾燥先生もあまり気が進まねなかつたのではと思ひます。さきに白石君が提供された先生の御授業風景の写真(マルクスの講

義風景といふ説明付のもの)はその一齣です。先生のうしろ黒板の右が問題文で、ノート(頁・六二)の場面です。日付

は分かりませんが、昭和七年一月末か二月初めと思ひます。私の記憶では、問題文の方は学友の故中村雄光(義明)君の筆蹟です。味もソツ気もないただの翻訳の作業で、つい時のはずみで先生もタイトルのやうな方向へお話がそれたのだらうと思はれます。それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、私共が銘々勝手な自作の文章を翻訳して差出した稚拙な自作自訳の方が、どんなにか先生には楽しんで頂けたのではないかと思ひます。たまに「*my*」などの評価を頂戴すると嬉しかったものです。

平成十二年十一月十日

宮田正信

若松秀俊様

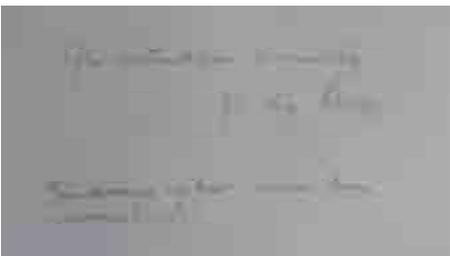
カルシユ先生自筆のラテン文字

その他このノートの断片記録から伺はれるやうに、平常の御講義の話題はまことに多彩だった。(頁・三十二〜三十五) Siedert sche Dialekt¹⁹⁾以下の独逸方言についての御話など、他では聞けない話題だったと思ひます。その前にある(頁・二十八〜三十一)の四ページ²⁰⁾及び、De Ballade of John Maynard²⁰⁾のお話なども含んだと思ひます。

以上とりとめもなく書を認めました。御役に立てば幸いです。乱筆御読じらいと思ひます。あしからず。そろそろ寒さに向ひます。くれぐれも御大切に願ひます。

¹⁹⁾ Siedert scher Dialekt 南ドイツ方言

²⁰⁾ John Maynard Ballade (物語)の主人公の思ひこぼし。(副田正信)



いただきました。型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく身についたか分らないと思ひます。卒業以来約七十年の空白ですっかり忘れてしまひましたが、たまたまこのノートに挟み込まれて残ったものが少数見つかりました。なつかしい先生の御手蹟を昔を今に伝へてくれてゐます。いささか面映ゆいのですが、これも二、三コピーで御目にかけます。御笑覧ください。

これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べて見て思ふのですが、入試問題集の方は目先の功利一点張りで無味乾燥先生もあまり気が進まねなかつたのではと思ひます。さきに白石君が提供された先生の御授業風景の写真(マルクスの講

義風景といふ説明付のもの)はその一齣です。先生のうしろ黒板の右が問題文で、ノート(頁・六二)の場面です。日付

は分かりませんが、昭和七年一月末か二月初めと思ひます。私の記憶では、問題文の方は学友の故中村雄光(義明)君の筆蹟です。味もソツ気もないただの翻訳の作業で、つい時のはずみで先生もタイトルのやうな方向へお話がそれたのだらうと思はれます。それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、私共が銘々勝手な自作の文章を翻訳して差出した稚拙な自作自訳の方が、どんなにか先生には楽しんで頂けたのではないかと思ひます。たまに「*my*」などの評価を頂戴すると嬉しかったものです。

平成十二年十一月十日

宮田正信

若松秀俊様

カルシユ先生自筆のラテン文字



昭和七年早春、卒業を前にして
文科三年之類 別れの会（宮田氏より）

これは九期生が卒業直前の一九三二年二月末、授業のあと教卓の上で書いて下さったものである。じ自署の下のラテン文字（ドイツの古い学生歌）を指さしつつ意味を説明して下さった先生のフンフンという鼻声²¹が耳底から蘇ってくる。

つぎに当時の授業風景を雄弁に物語る木村登氏の手記がある。彼は東京出身で昭和十年に二期文之を卒業し、東京帝大文学部独文科で学び大学卒業後に朝日新聞特派員記者として活躍した。

²¹ じつは A.L. Haberberg じつてくゝの文句である（宮田氏より）。

十・五六十二年前のカルシユ先生

木村登（二期文之）

ある日、配られてきた朝日新聞の夕刊の一枚の写真を見ていた。

黒板を背に一人の黒衣の教師が、机にかがんで講義をしている。生徒たちは十代の終わりに近いようだ。「私にもこんな時代があつたなあ」昭和一ケタ時代の松江のころのこともが、思い浮かんできた。次の瞬間、写真の説明をみて驚いた。なんとこの写真はそのものずばり、松江高校の教室での出来事なのである。そして私が、なにげなく「一人の教師」とみたその《教師》には《カルシユというドイツ人講師》という説明がつけられてい

た。

これが六十二年前のカルシユ先生なのか。それにしてもいまみるカルシユ先生は、いまや七十を超えた私からみて、うらやましいほどお若い。若すぎるのである。そこでこの新聞の切り抜きを、チャタヌーガのカルシユ先生の娘さんのメヒテルトさんに送った。別掲の手紙はメヒテルトさんからの返事である。メヒテルトさんもこの写真をみて「アメイジング（びっくりしました）」と書いていたが、私も夢をみているような気持ちである。メヒテルトさんは、この写真の解説者である片山光治²²先輩について、「お目にか

²² 片山（中野）光治（島根出身）東京教育（二期文之卒）元取女子短期大学教授（平成元年七月十一日逝去）

横浜でも使われていた単語であった。NHK「ふるさと日本のことば」による。メリンゲンなや「同様の訛

クリームパンであった。京店のまつ屋にシュークリームがあったが、すごいごちそうであった。桑原には高級なアイスクリームもあったそうだが、見たこともなかった。自転車に旗たててくるアイスクリン^シしか知らなかった。松江の町で高等学校が都会文化の窓口の役目を果たし始めた時、奥谷の外人さん一家族の存在は、意外に重要な国際文化交流の効果をあげていたのかもしれない。

一九四五年、松高二年になった春、戦局は日に日に傾いていたが、学校を閉めて日立安来工場に移動することになった。皆の荷物を積んだ荷馬車のしりに乗って

かったことがあるに違いない、と思います。カタヤマさんというお名前は聴いたことのあるお名前ですから」と書いています。…… 後略



カルシュ先生 ファウトの講義風景

一九三九年カルシュさん御一家が去られた後、「今度のドイツさん、えらく若

いで。」と聞いた数日後 シュヴァルベ御夫妻が、長いブーツをはいて、腕を組んで、赤山のころた道を轟進して来るのに出つくわした中学生は、ただぼうぜんとして見送った。

「なんだありや？松江にやあわん！」若きドクトル・シュヴァルベ ちと気負いすぎて来日されたのではないかと思つ。一八九一年（明治二十四年）小泉八雲一家が去つて後、約三十年後、やっと松江に西洋人家族が住み始めたわけで、それがこの奥谷の二家族と母衣町カソリック教会の神父さんだった。そのせいか、奥谷入り口の桑原商店にだけ、四角い大きな食パンがあった。一般市民にとつて、パンはあんパン、張り込んでジャムパン、

汽船場に向かつていた。北田町の渡し橋のそばで、シュヴァルベ先生にたまたま出会つた。自転車でしばらく同行して送つてくださった。何の話しませず、ただ手をふつて別れた。この頃既に、ドイツ戦線は総崩れになっていた。寂しそうなドクトル・ハンス・シュヴァルベの後ろ姿が思い出に残つた。

戦後シュヴァルベ先生は再度来日されて、大使館に長年お勤めになつた。松江にも度々おみえになつたらしいが、くわしい情報がない。

メヒテルト・カルシュさんは二度来訪され奥谷の家をご覧になつている。

エレナ・ウッドマンさんも、是非松江に行きたいと繰り返し述べたお手紙を、

にたった一軒の異人館があと一日でも長く残ってほしい思いである。

私が一九二五年の秋日本に来てから十四年になる。十四年間松江で高等学校に教鞭を執る事が出来た。松江ではたまたこの歳月と同僚の先生方や生徒達との接触とを回想して、非常に嬉しく又非常に満足である。以前私が獨逸で松江に来ないか、との勧誘を受けた時、この松江という名前は私には初耳ではなく、すでに一九一九年にラフカディオ・ヘルンの本でこの町や美しい島根半島、大社、美保關のことなどを讀んでいた。もう其の時分から、一度この綺麗な國と其処の

だいぶ前に出されているが実現していない。

現在の松江では、島大の外人学生も珍しくないし、外国觀光客も多い。一八九〇年に松江に入った異人さんラフカディオ・ハーンは、近所の古老の言によれば、まわりの俗人にとっては異様な人、無気味な存在であった。そうした気持ちでの応対は、ハーンと家族に不愉快な思いをさすことも度々であつたらしい。

約三十年の後、この官舎の周りの市民には、はるかに余裕ができていた。珍しい異国の客人を、居心地よくしてあげようとの善意の人々が大部分であつたと思つ。そして奥谷のあのあたりは、今もほとんど変わらないが、まことにいい環境であ

つた。

豊かな森や竹やぶは、千手院や春日神社その他の神社をかこんで、適当に明るく木立である。子供の足で一回りしてくるのにも手ごろである。幼年時代をここで過ごしたメヒテルト、エレーナのお二人が特になつかしい思いを強く持つていらつしやるようだ。毎日午後のお客さんのカラスが何時ごろに現れるかまで、精確に觀察して記憶されているのには感心する。八雲が発見した神々の国の残像とは別に、この娘たちや家族の方々が、落ちていた生活のなかでとらえた昭和初期の松江、山陰の姿は、地方の歴史の中には非記録しておきたい大切なものと思われる。そのためのよすがとして、あの山陰

人々を見る事が出来ないかな と云ふ憧憬が心に起つてはいたが未だとても満たされ相にも無かつた。ところが一九二五年どうしても日本に行かうと決心した途端に此の憧憬が復た強くなつた。否、むしろ此の憧憬が手傳つたからこそ承諾の決意をしたのである。でも當時はまだ松江でこんなに永年働き、此の國殊に此の美しい松江近邊がこれ程すきになつて、此處が第二の故郷と云つた様なものになつたらうなどとは思ひもよらなかつた。しかしたとひ外國でも十四年も居て、しかも努めて人々や景色に胸襟を開いて接するやうにして居る裡には、もう其處にしっかりと癒着した様に離れられなくなるものであつて、今去るに當つても新興獨逸で

方の追憶に榮あれ 更に又卒業生で職場に出、祖國の為祖國の偉大と将来のために喜んで若い前途ある生命を捧げられた人達をも只々謹んで想い起す。私は嘗ての世界大戦の参加者として、自己の生命を犠牲にすることがどんなに意義深いかよく計り知る事が出来る。

《人其の友の為に己が命を捨つる、これより大いなる愛は無し》

とヨハネ傳福音書十五章十三にも既にあり。

さて私が現に共に体験したのは学校の歴史の一駒文でなく、この松江の町の歴史、すてきな近邊の地方の歴史の一部分にも及ぶ。松江はここの十四年間素晴らしい發展を遂げた。今日、松江の新しい綺

麗な橋を渡つたり、綺麗な街路を見たりすると、十四年昔の松江の面影はもう認められない位である。とは云へ松江の様に、往古の記念を失わず無事今に傳へ、今も風致を特徴つける昔ながらの名所たる城と、町の昔のすがたを其儘保存した好ましい日本の町に住めた事は、私が常々實に嬉しく思っていた事だつた。新しい物を非常に喜びながらも、流石に傳統的な物に對して敬虔であり、祖先から今日に傳はつた歴史的な遺産を重んずるといふのは、實に國民の品格が深遠であるいい證據である。

先生や生徒と共にした數多くの遠足の途上、或いは獨り散策したり自轉車を驅つたりした時、私は繰返し繰返し確信を

働けるとの歡喜もさる事乍ら、松江に居るのはもう此でお終ひかと思つて、何となく残念な氣がする。

一体そんな氣が起るといふのが主に此の永年の間中同僚の先生方や生徒の側から 苦樂孰れの場合にも 親切、懇篤にして頂き惜しみなく助力して戴く事が出来た為であり、又私並びに私の家族にとつて此地での生活が此の上もなく快適であり暮らし良かった為である。全職員生徒、友人諸君に衷心感謝致して置き度い。

一つの学校に十四年も務めて居ると、此の学校の歴史の一部分を共に生き、此の学校の繁栄と發展に眞心から關与していると云つても恐らくは差支ないであらう。事實私自身さつたと云へる。今去るに及

んで私の心からの願ひは本校の今後の發展加之同僚の先生と生徒の将来の幸福及び生活に懸つている。而し茲で其上に想い起されるのは今は本校に働いて居られない先生や卒業生の事である。古い生徒達から時に便りを頂き、其の人の様子を聞くのが私には常に大きな歡びだつたが、将来も獨逸に在つて嘗て松江高等学校で相識つた同僚の先生や卒業生のことを何か聞く時はいつも實に嬉しいに相違ない。それから先生や生徒で既に今は世を去られた方々も今偲ばれる。皆私には忘れられない人達だつた。其の中特に多田教授が思ひ出される。多田教授は学校で急逝される迄、私が松江に居を定めた當初の親切な友人だつた。教授を始め亡き先生

増した。日本は何と風景美豊かな國だらう。山と海とのかくも見事に融合している自然を見るのは、外ならぬ獨逸人の私には特に意表外の体験だった。さてかう言ひつつ私が眼前に髻髯するのは單に松島、天ノ橋立、宮島の様な日本の名所奇勝のみでなく、特に此の大山と三瓶山との間の景色の餘りにも『知られなさ過ぎる』美しさなのである。此は實際もつと有名になる丈のなつちがある。幾度私は枕木山や朝日山の上に立つて夕日に映える陸と海とを瞰望し、あの印象深い平和な風景に見入った事だらうか。此の出雲の國の老木鬱蒼たる神社佛閣の美しさ

海 入江 島嶼 さては遙かに淡くかがやく隠岐の國の山々を配して青く透き

通った日本海の美しさ。獨逸の友達に一度この絶景を見せてやり度いと思つた事が何度となくあつた。また秋 田圃道を歩いて農夫達が精出して働く様を見、時が経つに従つて彼等の苦役から受ける印象として、唯尊敬の念丈が起きる様になつた時に、我が新興獨逸も亦農夫の勞働を重要視し尊重している理由が特別はつきり理解する事が出来た。私がかく日本及び日本の人達を良く知る事を得たのは偏に大へん親切に援け知らせて下さつた總ての友達のお蔭だと有難く思ふ。

以下の文章は上記に続くものです。これには彼の置かれた環境と時代を考慮する必要があるのでしよう。当時ドイツの現実

を何も見ず、報道もドイツからの新聞のみでそこから判断した感想で多分に感覚的な文章です。ドイツの歴史からみて第一次大戦後に巨額な賠償で國が困窮し、

完全に自信をなくしていたドイツ人を鼓舞して、經濟の復興を成し遂げたそのリーダーとしての單純な賛同であるとは思へませぬ。彼が妻とともに信奉した人智学が一九三四年にはヒトラーによつて禁止されていたこと、妻がユダヤ系であることからいつて恐らく情報の制約のもとでの言葉でしょうが、彼がこの文を残したことは紛れもない事実です。彼が精神論者であり、唯物主義的な共産主義を阻止しようとした当時の風潮と言葉に惑わされ、ナチスの本質を見抜けなかつたと

思われる、このことは、当時のドイツ内外の政治家、国民いや外国の要人についてもそつといえることであつたであつたし、国民はおろかナチスといえども意図しなかつた変節と同時に巧妙に隠蔽した意図的変節もあつたことから、このような文章を彼が書いた背景が推測される。

このことは、我が國でも事情は同じで、勇ましき軍国主義を礼賛し、反対のものが、生きられない時代であつたことを振り返れば、理解できないことではない。彼が軍籍にあつたこと、大使館員であつたこともこのことを推測させるに十分である。帰國後の生活も思わしくなく、彼の実力にふさわしい職業に就けなかつたようだ。しかし、彼の宗教哲學的興味、

日常の行動、後のドイツ国家から永年勤続の公務員としての恩給が認められたことは間接的ながら、彼の行動が心配されるようなもので無いことを物語っている。以下、彼の言を紹介する。

カルシユ先生の後任として当時若きハンス・シュヴァルベさんは昭和十四年十一月二十一年八月旧制松江高等学校ドイツ語講師として勤められました。ナチの本質を知らず血気にはやっただ人であったことが当時の生徒である二十一期理甲一の近藤茂氏の手記にあります。しかし彼は戦後新生ドイツの大使館新聞情報担当員として日独友好に尽力し、一九七三年までの駐日ドイツ大使の活動を中心とす

る日独外交史の編纂を行っています²⁴。このころ教わった藤野義夫先生についても併せて語っています。

独逸と日本が戦争に敗れてから、もつ四十年以上の歳月が経ちました。ハンス・シュヴァルベ先生については数年前、在日独逸大使館に先生が勤めているとの話を人伝に聞きましたが、その後大阪に於ける旧制松江高校二十一期の同級会出席しましたところ、シュヴァルベ先生が行方不明になっているとの噂に接しました。

²⁴ Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973 Tokyo (1974). Herausgegeben von Hans Schwalbe und Heinrich Seaman

話が一寸変わりますが、思い出しますに曾って私め、「若き獅子たち」なる映画を見まして肝銘を受けたことがあります。ナチスを信じ、ヒトラーに私淑していた独逸青年将校が敗戦に直面し、第三帝国の崩壊と言つ、彼には信じられぬ事態を知って自信を失い、自分の生き方がわからなくなつてさすらつた処をアメリカ軍の一兵士に射たれるままに若い命を失つと言つものでした。マローン・ブランドが講演していましたよ。

さて、あの当時、ナチス青年だったシュヴァルベ先生は講義の折りに触れて、「第三帝国」を賛美した一方、「西部戦線異常なし」の著者なるレマルク等は死刑に備

するとさえ申しておりました。私めの同級生には『彼はナチズムとヒトラーを讃える様に、独逸政府から命令されているのではないやろか。』とか、「ナチズムを肯定しやへんと、シュヴァルベさんは職を失うからあんな講義をするのや。」等と申している者もありましたが私め、今にして思えば、先生は本気でヒトラーとナチズムを信じていたのではないかと考えられるのですぞ。そして、そこにシュヴァルベ先生の悲劇があったのではないでしょうが、「第三帝国」をあたかも「神教の信者のように信じ、ヒトラーの『我が闘争』を心の底から肯定していた先生は、戦後急速に民主化されて行つた西独逸の考え方や行き方について行けなかったの

ではないでしょうか。

私めも、日本帝国の崩壊を告げる敗戦の報を知った、あの八月十五日の午後は天地が崩れ落ちた様な虚無感と違和感に襲われたものです。立ち直れる迄には少しの時間がかかりました。また、文科系にいたため学徒出陣に逢った旧制松江高校の同級生にも、生き方がわからなくなり、復学に相当な歳月を要した親友もおります。「若き獅子たち」でマーロン・ブランドが扮した青年将校の気持ちはわからないでもありませんよ。

しかし、此処ですこし見解を変えて、敗戦前のことを考えてみたいと思います。

『独裁は悪い、全体主義は良いことではない。ナチズムやファシズムは怪しからん。』等と言つことは、敗戦後になつてからなら言つのは容易でしょう。平和、民主主義、反戦などと叫ぶのも同様であります。しかしですね、戦前や戦中に於ては、生命と身体を賭けなければならぬ発言でしたよ。恐らく当時のナチス独逸に於ても日本と同様、またはそれ以上の勇気を要する行動でありましたでしょう。いずれも、戦前、そして戦中の旧制松江高校に在学しておりました、一人の老人の思い出と思いつくままのお喋りであります。先にハンス・シュヴァルベ先生のことを書いてしましまして、恩師の一人なる藤野義夫先生のことを後にまわして

しまいました。これは特にシュヴァルベ先生のことを書いたと言つよりは、あのシュトルム・ウント・ドラングとも申せませす時代に旧制松江高校、ひいては我が日本を包みこんでいた世界の情勢がわかつていただければ何よりと思ひ、私めなりに拙い筆を走らせた訳でありまして、これからが真打ちの二十一期理甲二における独逸語の講義であり、勿論名物教授の一人なる藤野義夫先生の思い出と言つ次第でありますぞ。

藤野先生には私め、よく叱られました。不勉強のためであります。特に一年生の講義が始まりました頃は、冠詞や名詞の語尾変化を間違えますと、先生の額の静脈が腫れ上がったのをよく憶えておりま

す。あれは叱られるよりも恐ろしかったですよ。恐らく『此奴め、全く致方のない奴だ。』と思われていたのではないのでしょうか。当時の独逸語は未だ、あの風格のあるヒゲ文字でありましたぞ。ヒトラーはナチス独逸の版図が欧州の東西へ広がるにつれて此の書体をやめ、ゴッロツパ諸国に共通するアルファベットに変えたそうです。

ところで、当時の旧制高校の先生はなかなか風格のある方々がおられまして、藤野先生は御友人の井坂先生などに比べますと、小柄で細い体格でしたが、講義ともなりますればその眼光は炯々として、時にして鋭く、時にして師としての慈愛に

昭和十二年頃の高校生の服装
十四期生卒業アルバムより(奥野氏提供)



藤野先生とハンス・シュヴァルベ先生松友
第十一号 昭和四十七年十二月の記事より

溢れ、時にして過ぎ去りし青春を偲はれるのか潤っておりました。
事実、藤野先生はその昔、独逸の作家なるヘルマン・ヘッセと文通があったと申します。ボーデン湖畔に住む此の文豪とね。

ヘッセの作品は当時の旧制高校生の間でよく読まれたもので、お値段も手頃な岩波文庫所載のものが愛好されまして、制服の上衣のポケットに此を入れますと、文庫本の上縁が一センチほど出て見えます。此が黒いマントに下駄を穿いた青年たちの見栄のひとつでしたな。

戦争が次第に激しくなつて物資が統制され、書籍が少くなつて参りますと、先生は原著をタイプしたものをガリ版で刷

つて講義に使われました。私め、独逸語は文法には音を上げていたのですが、文章になるとすこしは読める様になりました。此のガリ版刷りの教科書のなかに、ヘルマン・ヘッセの失われたポケット・ナイフ(タツシエン・メッサー)なる作品があったのを、此の年齢になつても私め、今尚懐かしく思っております。しかし、あの作品にもボーデン湖なる地名が出ていた様に記憶するのですが。
私め、今にして思いますに、ヘッセに於けるボーデン湖は、藤野先生では松江の宍道湖ではなかつたかと考えられるのです。そして其処に、あの山陰の小都市に住んでおられた藤野先生のロマンのひとつを感じるのであります。

第十一章 旧生徒同窓会との交流

十一・一 カルシュ先生との四回の出会い

い

六期理乙 増田義哉

初対面 先生との初対面は、大正十五年四月某日私が松江高等学校に入学して間もなく初めて外人教授の講義を受ける様になったときである。しかも独逸語は、今まで一度も聞いた事がなくその発音、抑揚、文字等全く新鮮なものばかりで、印象が深いものばかりであった。大学を

ります。夫れは日本眼科学会百周年記念誌第二巻二二八頁に、写真(別掲)と共に記載されている通りです。当時、世界的に有名な独逸の眼科学者のアクセンフェルト教授が、カルシュ先生の奥様の伯父様に当たられ、日本眼科学總會に招待されて、日本各地を巡回講演をされた折り、九大眼科にも寄られる機会があり、

卒業したばかりの若い日本人独逸語教授から初めて独逸語を習った時、いきなり独逸原語で黒板に書かれて、全く解らず、ローマ字で書いて下さいと頼んだ所「何云ってるんだい」と怒られた後だけに、カルシュ先生が、ローマ字で独逸語の講義を始められたのには、みんながびつくりして、先生の優しさをしみじみ感じた次第であった。先生は偉丈夫で、やさしい口調で、丁寧に解かり易く、ゆつくりした講義をされた。凹んだ眼で髭剃り跡の青い顔が印象的で、背の高い先生の前の方が、妙に小さく見えた。如何にして、難しい独逸語を、初心者に解からせるか、苦心して居られた様でした。我々の要求を容れて、よくローレライの歌を、独特

の美聲で何度も歌って頂いた事も忘れる事は出来ない。所がその様な先生に對して、ある時、突然授業ボイコット事件が起こりました。理由は今だに思い出せません。然しその時先生は、少しも慌てず騒がず、独逸語主任教授の高畠先生を呼んで来られ、無事事件を解決された事がありました。温厚な真面目な先生に一時的にせよ大変な御迷惑をおかけした事を深く反省しています。

再会の事

私が、松江高等学校を卒業して、九州帝国大学医学部三年生(昭和六年、一九三一年)の時、カルシュ先生に、偶然お会いする事になったのが再会と云う事にな



昭和五年四月二二日岡山医科大学にて
日本眼科学会百周年記念誌第一巻より

その時カルシュ先生は、まだ松江高校の教授をして居られ、先づ、松江から岡山

に出て来られて、アクセンフェルト教授一行に合流され、教授に随行して福岡に来られた時、九大眼科講堂の後方から、カルシユ先生を眺めたのが再会であり、その時親しくお話する事が出来なかったのが今でも残念に思っています。その時の模様が次の如く記載されています。「明くる四月二三日の夜、九大庄司教授は、日原医学部長、今井助教授、熊本の高安ら数氏と、アクセンフェルト父子とカルシユを博多駅に迎えた。宿舎は福岡唯一の共進亭であった。二十四日は午前中、病理学の中山教授が考古学の権威なので、太宰府、都府楼、観世音寺などの史蹟を案内した。昼食後、日原学部長の案内で、松浦聰長を訪れ、眼科教室の中

庭で医局員全員と記念撮影を行った」とあるが、残念な事には、九大眼科医局での写真が見当たらず、岡山大学眼科医局での写真を借用した次第である。(二〇〇一・五・二九脱稿・九十三歳六ヶ月)

つぎに、故永井隆博士にすすめられ長崎医大に入学、昭和十一年に卒業され、開業医として永く地元に残した坪内謙吉氏が七十幾年の昔の記憶を手紙で語っている。

十一・二カルシユ先生の思い出

坪内謙吉（八期理乙）

（坪内（青木）謙吉（島根）長崎医科大（八期理乙）医博）

私が旧制松江高等学校に入学したのは昭和三年（一九二八）今より七十二年前である。独逸語が第一外国語で将来大半が国立大学の医学部が農学部に行く理科乙類であった。

カルシユ先生の初授業の時、コックさんの話をされ、その時しきりにコックさんのオス、メスという言葉が出、あっけにとられ、それがコックさんの男女と判ったことを今でも覚えて居る。又当時ドイツよりグラーフチェッペリンが日本に飛んで来て、先生がそれを非常に誇りに思われ、日本人としての感想を聞かれて、それが同級生の奥村通君にあてられた。彼は咄嗟の事としてヴィルコンメングラーフチェッペリンとのみ言ったが、先生は

非常によろこばれ満足の笑みを浮かべられたと記憶している。

又なるたけむつかしい授業時間を短くする様先生がかねて誇りに思っ居られた時々口に出されたローレイ（ロ）の話をピツテ、ローレイと言つとよろこんでその話を何回となく聞いたものである。後年欧州旅行をしてライン河にローレイ（ロ）を見てカルシユ先生を懐かしく思い出したものである。(二〇〇一年四月二十日)

一九五五年の七月当時のカルシユ先生の様子が国立予防研究所部長の多ヶ谷勇氏が日本医事新報で語っている。

26 Der Rhein (Sachsen-Loreiseisen (ローレイ)の詩)

十一・二八年後のカルシュ先生ご夫妻
この年七月、西ドイツマルブルクにベ
ーリング・ウエルケ社を訪れるために下
車した時、駅でつろつろしていたら、「日
本の方ですね」と上品なドイツの老人か
ら日本語で声をかけられた。私が抱えて
いた風呂敷包みでそう判断したとのこと
であった。この方が戦前松江高校でドイ
ツ語を教えて居られた、フリッツ・カル
シュ先生で、奥様と一緒に、休暇で旅行
するお嬢さんを駅まで見送りに来られた
ところで、私の風呂敷包みに目をとめら
れたのである。ベーリング・ウエルケ社
の見学を終わって、お誘いをお受けして
カルシュ先生のお宅に伺い、奥様がわざ

わざ炊いてくださったご飯をご馳走にな
り、いろいろ日本の事などをお話した。
先生ご夫妻は大変日本を愛しておられ
是非もう一度行ってみたいが、この年で
はもう雇って貰えないから残念だと云っ
て居られた。

(中略) お嬢さんは既に結婚され、先生
ご夫妻だけで静かに暮らしておられると
のことであった。今はマルブルクにも
数名の日本人が滞在していて、時々先生
のところへお邪魔しているとのことであ
る。

(後略) 日本医事新報二一七六号
「カルシュ先生のことなど」多ヶ谷眞著より

一九七五年酒井勝郎氏はヘルシンキの長

男夫妻を訪ねた折りに年金生活のカルシ
ユ先生を訪ねています。

十一・三カッセルの先生

カルシュ先生を訪ねたのは六月二十七
日でした。フランクフルトのホテルに泊
まっていましたので、朝早く列車で行
ったのです。「よつこサカイさん」と大
きい身体のカルシュ先生が、カッセル駅
のホームに出て、車室から出て降りた私
の手を握って下さった時、私は嬉しくて、
握手のまま、深々と日本式のお辞儀をし
てしまいました。

先生のお住居はこの町にある老人ホー
ムでした。先ずそこへ寄って奥様を交え
て松江の話をしました。先生の方は三十

年前の松江の思いで、それに私が今の松
江の話をつなぐというわけで、話せば尽
きない物です。奥さんは番茶をいれて、
話しの途中何杯も注いで下さる松江流の
もてなしでした。

この様に自由な環境で自由に行動する中
で自由に考え、自然に学問に入り、また
実業界に、あるいは政界に入り、やがて
大活躍した数多くの生徒にただ驚くばか
りである。その中で、外国人が夢を育む
教育に果たす役割は想像以上のものがあ
るようだ。今日、教師から押し寄せる知
識のみの吸収を良しとする学校教育、そ
してそれらを咀嚼し自分のものにする時
間が十分に持てない教育の現状を思うに

つけ、今の高校生・大学生が物理的な設備はともかく、とても貧弱な学習と修養の環境に置かれていたような気がする。このような環境こそが大切なものになぜかこの部分が一番軽視されているようだ。「学びて思考はざればすなわち罔く」

「^{おも}思考いて学ざればすなわち殆し」^{おぼ}が今の教育に決定的に欠けていると思えてならない。そしてそれが、やがて社会に出てからのヒトの度量や力量の差を生むような気がしてならない。

つぎに十四期理乙昭和十二年卒業の奥野良臣氏に再会の経緯と因縁を語って戴く。彼は大阪帝国大学医学部卒業後研究一筋の道歩み、大阪大学医学部教授、その後同大学微生物研究所長を歴任している

著名な微生物学者である。

十一・四カルシユ先生との再会

高校に入ると、すぐ先生にドイツ語を教わることになった。その難しさと先生の巨体に圧倒されて不安になった。しかし先生の温顔と愛情が伝わり、間もなく楽しい授業に変わり、その時教わったドイツ民謡ローレイは五十年以上過ぎた今日でも、他の乙類出身者と同様、私は正確に歌えるのである。

高校卒業して二十四年後、一九六一年の暮に、私はマールブルグ大学衛生学のジイーゲルト教授に会いに行つたとき、そのまちにカルシユ先生が住んでおられ、手紙を出しておいたのですぐ会いに来て

下さった。昔の先生と少しも変わっておられず、気安く市内各所を御案内下され、大学の教師や学生もよく来るといふドイツ風のレストランで御馳走になった。そしていろいろ昔話や、松江のこと、高畠さんは、小林さんは等懐かしそうにお聞きになった。食後は市街を御案内頂いたが、各民家の門口には建築の年号が小さい数字ながら明瞭に刻まれていて、千七百何年とか、中には千六百年代のものもあって、マールブルグは城や立派な教会のある古い由緒のある都市であることがわかり、先生が静かに余生を送られるにはまことに相応しい所と思われた。夕刻わざわざ駅までお送り下され、奥様からとておみやげを頂戴した。中にはクッキ

ーなど多種類のおやつが入っていて、母親が可愛い子供に旅をさせる時に渡すようなやさしいお心遣いが感じられ、忘れることはできない。別れ際のヴィーダーゼーエンの言葉通り再びお目にかかれることができればよいが、と思いながら車中の人となった。ところが数年後に、日本で再びお目にかかれたのである。新潟高校から京大薬学部出身で私共の研究室へ来ていた加納晴三郎氏を前述のジイーゲルト教授に紹介し、研究のために留学されたのが一つの機縁となった。そのまちはカルシユ先生が居られることを話しておいたので、加納氏は留学中先生に大変親しくして頂いたとのことであった。帰国後加納氏は、先生が訪日を熱望

しておられることを塩野義製菓の末松さんに伝え、そこから岩城専務（共に湊高出身）に、更に多くの同窓生の方々に話され、賛同を得て、先生を是非お迎えしようとなった由で、それが間もなく実現したのであった。カルシユ先生が来日されると、松江、大阪、東京等各地を訪ねられたようであるが、大阪では「クラブ関西」にて先生を囲む楽しい歓迎の会が、多数の教え子と、その関係者を混えて盛大に行われた。その際先生は一人の妙齡の愛嬢を「同伴」にしていた。このひと後も後に湊高出身者と深く係ることになるのである。カルシユ先生と田島君、その一カルシユ先生 奥野良臣（十四期理乙）より

当時の佐藤内閣の自治大臣が多忙の中カルシユ先生父娘らを歓迎してくれた。彼はカルシユ先生にとつて最初の教え子である。赤澤氏がまだ高校生の時、理想を掲げて堂々と論を張り、当時の政治家と渡り合ったことは前述した。鳥取県出身の政治家として党派にとらわれず、活動したことが当時の新聞でも報道されている。

日本医事新報に当時久留米大学教授の六期理乙卒の増田義哉氏の歓迎の言葉が在る。

十一・五カルシユ先生を迎えて

増田義哉（六期理乙）

我々旧制松江高等学校時代の独逸語の恩師カルシユ先生がマルブルクで元気に暮らしておられて、日本を再び訪ねてみたいという熱望を持って居られるという記事が、予研の多ヶ谷勇先生によつて、三年前の本誌「炉辺閑話」に記載されたのが、今回のカルシユ先生を日本にお招びする端緒となつたわけで、この点、多ヶ谷先生に更めて御礼を申し上げる次第です。それから四十二年七月のある晴れた日、私はマルブルク駅頭でカルシユ先生と感激の握手を交わしマルブルクのあの美しい古城の辺りを共に散歩しながら、又先生のお宅において、先生が如何に日本を愛しておられるかを再認識し、

又生ある間にもう一度日本に行きたいという熱望を持つておられることを、言の端の間に感じ取つた私は、帰国するや先ず松江高校同窓会福岡支部にはかり、次いで本部にもはかり、又本誌にもその旨のことを載せて貰い、全国的な運動に盛り上げた結果、松江市の本部で、田村清三郎氏が中心となつてこの運動を推進して貰つた結果、漸く軌道に乗つて、やつと十月初めに日本にお迎えすることが出来た。先生は東京、松江、岡山、広島、福岡、長崎、大阪、東京、軽井沢と廻られて、十月末日本を離れて行かれた。我々福岡支部の者は、十月十四日午後六時から、福岡市帝国ホテルで、内海支部長以下十八名集まつて、心からなる歓迎を申

杏の木で思いだす程なので、「もうなくなりました。」と答えた。一行は、メヒテルトさんと、松原先生だ。門をくぐって、すくなつかしそくに、左手の墓場へ行き、「ああ、あれもある……。ここだ。ここだ。」と一つづつ、思い出を二人で話し合っただけで居られる。私はそつと先生にきいた。「この寺の和尚さんに、おあいになりませんか。」「ええ、あいます。」と、よどみない返事だ。早速庫裡の玄関で、女の人に旨をつげた。「方丈さんを、御存じの方ですか。」「さあ私はよくわかりませんが、御存じないかもしれませんよ。でも先生が一寸あいさつなさるのでしよう。」「ハイ。ではおつたえしませう。」「私は、戻って、先生に、坊さんへの申込の事をつ

たえて待った。しばらくすると、本堂の縁から声が聞こえた。「よう。なつかしい人が来られましたなあ。私はびつくりした。白衣の老僧が、縁側に立って居られる。私は、はじめだが、噂にきく勝平老師にちがいない。カルシユ先生と旧知も旧知なつかしい人なのだ。私は全く知らなかった。すぐ玄関へまわり、靴をぬいで上がった。メヒテルトさんは、昔しよつちゆうここへ来たと言った。私は恨み言をいった。」「この坊さんを知っていらつしやるなら、前以って、一寸、ひと言仰言っておいて下さればいいのに。」「二人はただ笑って居られるだけだ。本堂は私も嬉しいのだった。奥へ通り、山のせまつた静かな庭に見入り、外国から来

し上げたのである。先生は長女のメヒテルトさん、今はゴアー夫人を連れて、一昨年会った時と少しも変わらぬ、七十五才とは思えない元気な姿で、懐かしい昔語りよりの移るのわからない有様であった。お嬢さんが、とても日本語が上手で、にがての独逸語で話す必要がなくて、皆大助かりだった。翌日は長崎に行かれ、翌々日又福岡に帰ってこられるといつので私は佐賀駅までお迎えして汽車に同乗して博多に行き、福岡空港までお供したが、飛行機の中に消えられる迄、振り返り振り返り手を振っておられた先生の姿は、忘れることが出来ない。いつの間にか私の目は涙でかすんで、先生の姿もボンヤリとしが見えなかった。先生も空港

改札口を出られる時、涙をためておられたようだった。カルシユ先生萬歳！
この度のことに物心両面のご援助を頂いた、大河内、馬場、水木その他沢山の先輩、同窓の方々に心から厚く御礼を申し上げます。
十一・六カルシユ先生を案内して
(一)十月七日 奥谷の万寿寺
「ここに、大きな銀杏の木がありました。覚えてい
か、さかいさん。」「カルシユ先生は、昔の思い出の地、奥谷の万寿寺門石段の所で、案内の私にこう言われた。昔の記憶をたどると、万寿寺といえば、その門前の銀

大きく始末だ。そこから、昔親しかったおばさんが、顔を並べて、二人の来訪を喜び、世話役の私までお礼を言われた。

(二)十月八日 大社参拝

いつもの入口 出雲大社は、鳥大の竹原敏夫先生、鳥大の田総武光先生、それに錦織きみえさん、世話役の吉村一夫さん、先生とメヒテルトさんの主客をかぞえると、仲々大部隊だ。松江から自動車二台つらねて、昼頃大社着、私は日の出旅館へ先行し、神社内の案内を、都合よく運ぶように手配して待った。

宿へつくと、すぐ静かな部屋で休憩する。小坪に面した、肘掛け椅子で先生は、小庭に見とれて居られる。静かなこの小庭

たこの二人が全く故郷へ帰った人のように、心の底から懐かしさを味って居られる。「エーヴィゲ シュティレ」「永遠の静けさ」という語が囁かれていた。「寺の茶を、あがりませんか。」と老師。「いただきます」と先生……。茶室へとおされた。案内の私が、ここで、先生に紹介して貰うという逆な事になったわけである。松原先生を加えて四人が客で、老師の接待を受ける。勿体無いことだ。先生は無理にかしこまる。「そんなことせんで、足は投げだして。」「そうですか。」「頗る気楽な茶室だ。しまいには、先生は、書院の明かり窓の所へ腰掛けたいと仰言る。」「ああどうぞ。」「と、気軽に、置いてある物を、片脇へ寄せて、並んで腰掛ける

主人だ。円転滑脱……。これで、礼儀を崩さない見事な茶席だ。京都からの、そば煎餅がうまい。話は静かだが、一言一言意味が深い。「此頃の若者は、何でも知っていて、本当の事が一つもわかっていない。」「本当の事はこの永遠の静けさの中でこそ考えられるのです。」「カルシウ先生が、松江にこれ程会いたい人をもって居られ、その事を一言もつたえて下さっていなかったそのゆかしさに心をつたれた。

つづいて、春日神社、桐岳寺、千手院とまわったが、どこも懐かしい所で、特にメヒテルトさんは、嬉しそうだった。私も自分でうれしくなり、もうこうなると案内ではなく、ついてまわって、説明を

は、秋の日射しを受けて、頭の芯迄しづめてくれる。秋色をつけ初めた、もっこくの葉が、なんともいえずつややかだ。軒先には、海棠の実が面白く鈴実りをしている。先生の深い沈思にさそわれて、みんなも憩った。日本の憩いかもしれない。

やがて、大社の風味「出雲そば」が運ばれ、メヒテルトさんの「これこれ」というはなやいだ声につられて、みんな、すすり食いをした。先生もつまそうにして、懐かしがって居られる。本当に大社の出雲そばは、うまい。

案内は、町役場観光課の水師重吉さんに、たのんでおいた。竹原先生の御親戚の方が神社に居られ、きいてみたら禰宜さん

で、どつせ参拝すれば、お世話して貰わねばならん今西さんとの事私もよく来るので顔見知りの方だ。こつこつわけで大社案内は、我々としては、最上の人揃いだっただ。

巫女舞 水師さんの先導で参道を通り、拝殿へ向かう。手を洗い、口をすすいで、拝殿の前の、大きな注連縄の下の賽銭箱の前の雑踏にまじり拝礼する。見ると、何処から来たのか、派手で怪奇な恰好をし、きつちりしたずぼん姿の娘さんが四、五人、まちまちな姿勢で、それでもみんなおがんだ形だけはしている。メヒテルトさんと私は、顔を見合せて苦笑した。彼女等は、何か願い事を心に持

っている。それを思っておがんでいる。然し大して信じてもない。私は嘆かわしいよつな、頼もしいよつな、どつちともつかないのだが、無関心でもない妙な気持ちだ。メヒテルトさんも、冷静に微笑んで居られるから、案外私と同じかもしれない。「今巫女舞がはじまりますよ。」水師さんの耳打ちで、私はカルシユ先生の足止めをした。先生は熱心に拝殿を見て居られる。

トーントンドンドン ポコポコポコ………ピョピョロロロ………かみおろしである。大きな御幣が振られ、参列者の心が抜い清められて、それから巫女さんが、静かに立って、神前に進み拝礼する。白衣に緋の袴である。神前から

ただいたものは、右手に榊、左手に鈴である。これを両手にかざして、足取りゆるやかに、お前を四角く巡回する。笛の音が、嫺々として、満座の心を微妙に動かす。

ジャラツ ジャラツ と巫女は、何歩目か毎に鈴を振る。「神様が出て舞っているのですよ。」巫女の白い袖口が、すっかり縫いつけてあって、手は全く出さず、袖布の下から、鈴と榊を握っている。その尖った袖先が、ピンと上向いているその恰好も、何か得態のしれぬ情緒に、我々の心を導いて行く。「この舞は、大変古い古代からのものによつてです。」先生はフーンと、まじろぎもせず、これを見つめ、やがて舞が終り、どつと太鼓が激しく鳴

つて「神様がお帰りになりました。」と、私が言う迄凝然として居られた。拝殿脇の庭で、可愛い鳩にたわむれ、つづいて、庁の舎へ案内された。ここに今西欄宜さんが居られたのである。日本の近代的建築が、一通り説明されて、古代出雲の壮大がここで、感を深くした。口をすすぎ、手を清め、白衣を着て、いよいよ神前へ参拝することになった。

△玉串奉奠^{たまぐしほうだん} 今西さんの先導で、八足

門へはいる。中で白衣正装の神主さんに、恭々しく、お被いを受ける。つづいて参拝である。我々は、もっと近づいて、最後の門、棧門の入り口を運行して拝礼ができるのである。「玉串奉奠を代表の方にしていたきます。」カルシユ先生が進ん

すね、これを、十八社と申しまして、毎年十一月になると、お祭りをするので「水師さん……」。

楽しく、和やかにこの一行は、大いお社をひとめぐりして、おみくじの紙が、無数にぶら下っている杉を脇目に見て、千家さんの庭へ行つた。「五百年もたつ松があるから、行つてみましょう。」と水師さんの提案だ。私は、先生が少し疲れ気味だと思つて、あの庭で、腰が降せると考え、賛成した。全く古いスタイルの庭だ。池があつて、その中の島に、古い古い松が、見事に栄えている。これが五百年か、と私は思うが、古いので否定もできない。伸ばし放題なら、三百年位で、大抵落雷か、暴風で寿命が尽きるが、こ

れは毎年剪定がしてあるらしく、実によく枝が張っている。すぐ後ろにある濃緑の山を背景にして、この見事で整然たる老松、人工の極致のような松だ。何だか大社を象徴するような松だ。「あの松の下の鶴はつくりものでしょう。」「ええ、そうです。」「あつ。亀は生きています。動いた。」「鶴がつくり物だから、亀もそうだと思います。」「そうじゃない古代の遺物のような恰好の亀が、石の上でじつと甲羅をほしているのを見てみると、時に一寸首をまわす。足を一本一寸動かす。全く千古の風景に、呼吸を合わせる仕草だ。この庭で休んでいるうちに、我々もこの千古の呼吸にまきこまれそうだ。先生は又、エービゲ シュティレを思い出して居

で玉串を受けとられた。その手付きの不確かなのをみて、少し私は心配した。「うまくできるだろうか。」「みんな一列に並んで行くので、当然先生の直ぐ後に、メヒテルトさんと思つたが、若しまごつかれては困ると思つて、私がびったりと、先生のうしろへついて行つた。樓門のすぐ前、大社がその偉容を、直接眼前に現わし、我々が感激する所で、先生は悠然と玉串を捧げ、くるりと枝をかえし、見事にこれがすんだ。私はほっとして、拝礼、拍手の順を少々リードした。実にうまくいった。正装し、笏をもって立つて見守る神主さんも、先生への敬意に、感じ入っていた。

神前を引きさがり、巫女さんの注ぐお神酒をいただいたき、しばらく大社の建築の

話をきいて、八足門から退出した。千古のたたずまい、参拝を終えてでると、今度は又、水師さんの案内だ。時間もあまりないので、神社をひとめぐりして、いろいろな、神様の話がされた。「大社の両側にたつている、一寸小さいお社は、摂社と申します。御覽の通り、三社でございますが、みんな、大國主様にお仕えしなされた、女神様、つまり我々の社会で申しますと、奥様であります。」「ハハア……。」とメヒテルトさんの声……。

「この両側に並んでいる、細長い建物は、神様のアパートです。」「ええ、そうです。きいてしています。いづもは、十一月神在月で、全国から、神様が集るのでしょう。」「と先生、「御存じのよう

ここでも思いは、古代人の荒唐な説話とそれを作り上げる、膨大な想像力が心ゆく迄味わわれた。何の為のこの荒唐な説話か。先生の頭には深い思いがひそんでいるらしい。みんなは風景の壮大に心を洗われた。

「コインシデンス」 案内をすべて終り、後は日の出旅館のあの部屋で、ゆっくり、おわかれのお話しあいでもしようということになった。この時に、とても楽しいものがでてきた。それは、この時迄錦織きみえさんが大事に抱えて来た風呂敷包みの中からだったのである。「まあ、うれしい。おにぎり、私、これ大好き……。」「そうメヒテさんの好物でしたね。」先生の家で、お手伝いしていたこの「きみえさ

られるらしい。

神話の風景、奉納山の展望台にたった。涯しない海と、弓なりの浜を見ているうちに、国曳きの話が思いだされた。「向うに見えます一寸高い山が、三瓶山であります。昔の名前を佐比売山といまして、神様が、国をひっぱった綱の端を、つないだという……であります。その下に長くつらなってみえます、白い砂浜が、島の長浜、即ち引つ張った綱です。今私共が立って居りますこの杵築が崎を引つ張り寄せたというのです。」と水師さんの説明だ。「そうです。八束水臣津沼命が乙女の胸すきとらして、三つよりの綱打ちかけて、『国来 国来』と引き給つたと

いうのでしよう。」と、私が風土記の一部をそらんじた。古代人が国曳きの物語をつくつた、奇抜で膨大な空想力に感じ入った。

つづいて、戦乱時荒んだ日本人の心を徳川時代の大平に引き込んだ。歌舞伎師の先祖、出雲お国の記念塔へ案内し山を降りた。

ついだから、日の御崎迄行ってはどうかという意見と、強行軍は止めようという意見とその中間をとって、礪岩運行つた。国ゆずりの談判の時、両方の式神、式御雷神と式御名方神が石投げ競技をここでなさり、その時投げ給つた石が「それその海中に点々と、白波をかんで、点在してる岩であります。」と説明された。

「ん」は、幼時のメヒテルトさんのすみずみまでそらんじている。みんなもこの、時を得た御馳走の相伴にあずかった。なる程、私達にも、この少々塩気があつて、手のひらで握つた、この塊りに、懐かしい幼児の思い出が香つて、うまかつた。

「やっぱり日本の味、おふくろの味だ。」先生もいよいよわかれるとなると、何か私達に言い残したい様子だ。私達も喜んで先生の言葉にきき入り、メヒテルトさんの説明に耳を傾けた。「人間と人間との間には、お互の思っている事を相手に通じ、これをわからせる為に、言葉がある。所がその言葉が二人の間に交されて、その二人が、一つの言葉で同意しても、考えている事が必ずしも一致していない

事がしばしばある。これが世の混乱のものである。私は、この人間同士の思い違いを一致(コインシデンス)させる事に努力したい。「父は、それで以って、ヨーロッパの歴史を見て本を書きます。」と、メヒテルトさん。私は先生が万寿寺で、エイヴィゲシユティレと言ってなつかしまれた事、大社で、神というものに接して、感にふけられた事、等を考え合せ、これは、古代人が悩んだ、お互い同志の不一致を、この境地にひたらせることによつて、コインシデンス(一致)に導く努力をした、日本の昔の人の知恵を思つて居られたのではなからうかと考えてみた。この事は、私と先生との間の、言葉の不便で、深く話ができず、何れ出

でるだろう先生の御本を拝見したいと思つている。

帰途は、自動車を空車で帰し、北岸の電車にのつた。
昭和四十二年十一月十日記

「田舎の大学から」酒井勝郎著より

十一・七カルシユ先生の旅程

竹原敏夫(十九期理甲一)

荻原憲三(五文乙)、酒井勝郎(五理乙)、渡辺駿(六理乙)、木村登(十二文乙)、田島康弘(十四理甲一)、中村啓成(十七文乙)、稻生肇(十七理甲一)(長曾一彦(二十二文乙))出席者には文乙理乙の人が多く、会話に独語を混え、和氣藹々の中に

話がはずみました。

メヒテルトさんは、十七日から三日間酒井さん宅に宿泊され旅の疲れを癒された。東京滞在中は、十四期文乙の暉峻凌三さんの病氣見舞、愛知県半田市からかけつけられた稲生さんの御家族や私共家族との親交、かつてメヒテルトさん宅にホームステイされた通産省勤務の荒井さんとの二十年ぶりの再会、奥谷町の隣家に住んで居られた赤川さん姉妹との再会、西独でカルシユ先生にお世話になつたと云う宇都宮在住の橋本さん等多くの知人にも会われ、ひまではありませんでした。メヒテルトさんは、二十日羽田空港から出雲空港へ、生まれ故郷の松江へと胸をふくらませつつ飛び立ちました。楽しい

松江・京都・大阪の旅を終えて、三十日新大阪から新幹線で東京へ。私ども夫婦と最近チャタガから帰国した孫娘と三人で成田空港まで同行しました。戦後昭和四十三年カルシユ先生とともに来日されて以来二十二年ぶりの再来日でしたがメヒテルトさんは多くの友人知人に会われ、日本につきぬ名残りを惜しみつつ、三十日午後六時五十分発のデルタ航空で帰米の途につかれました。

松江(二十)二十六日)二十日午後出雲空港到着、田総武光氏(八文甲)と私のほか昔のメイドさんら四人も出迎え、なつかしい故郷松江の湖畔、ホテル六道湖に着く。

二十一日夕方、皆美館の湖を見下ろす二階の座敷で歓迎会を開く。開会前控室で新聞二社の取材があり、市民も彼女の来松を知る。松江での歓迎会については最も古い教え子の一人である鈴木繁徳氏（五理乙、同窓会副会長）に相談して協力を得た。歓迎会の挨拶で同氏は自分の娘の里帰りを迎えるように愛情をこめて呼びかけ、「メヒテさん、何十年前前に松江を去られた恩師の娘さんが、外国からはるばる訪ねて来て、各地で教え子が多数集って歓迎するなんて滅多にないことでしょう。」とねぎらい、乾杯の音頭に応えて彼女も「Zumwalt」と杯を挙げ、春宵の一刻歓談は尽きなかった。出席者は、鈴木繁徳（ご夫妻、増田義哉（六理乙、福

岡市から参加）、田総武光（鳥取市から参加）、富田幸美（八理乙）、庄司保親（十文甲）、高橋定一（十文乙）、石倉愧（十三理乙）、山口清（十四理甲）、西上一義（二十六理三）、石倉浩人（島根医大）、中村フデ子（彼女の日本語家庭教師）、錦織若栄（乳児の頃保母、彼女の「日本の母」）、中村トキエ（住込のメイド）の各氏と私共夫婦の十六名。錦織さんと中村トキエさんは「再びお会いできたのは夢のようです。先生は心温かい方でした。」と目をうるませていた。同夜は皆美館に一泊、翌朝も晴上り美しい庭から穏やかな六道湖の風景を満喫され、前日も湖畔の親子地蔵を感慨深げに眺めて、先生が昔描かれた松江周辺の風景のスケッチの

ことを話された。二十四日午後、小雨の中を境港市の庄司邸に茶の湯に招待され、鈴木ご夫妻と私も同伴して重要文化財の茶室で若夫人の点前により抹茶の接待を受けた。同日夕方、彼女の一番古い友達、東史さんが都城市から到着、私共と会食した。翌二十五日は冬に逆戻りしたような寒さであったがふたりで昔一緒に遊んだ奥谷の官舎の近くの神社や寺院と近隣に今も住んでいる幼なじみ数人の家を訪ね、午後はふたりを足立美術館に誘い、日本画と庭園美を鑑賞した。二十六日朝、松江駅で十数名の見送りの人となごりを惜しみ、岡山を経て京都へ向つ。岡山まで同行し、新幹線に乗車を確認して別れる。

カルシユ先生の長女メヒテルトさん「ふるさと」訪問より

十一・八カルシユ先生と田島君¹²⁾

奥野良臣（十四期理乙）
カルシユ先生は、文、理科を問わず乙類の生徒を長年教えられたので、忘れ難い思い出を持っておられる方が多いことと思つ。また、校以外にも印象深かつたと見え、例えば私の専門分野の雑誌「日本医事新報」にも先生のこと各校出身者により掲載されたことがあって、先生の影響力が偲ばれるのである。

¹²⁾ 田島康弘（和歌山出身十四期理甲）昭和十二年卒業、阪大工、応化卒モグナス石油精製株元社長

畏友 田島康弘君は理甲出身であるので、カルシユ先生に教わっていないと思うが、私が何故このお二人を並べて書きたくなつたか、そこが世の中は不思議というか、楽しい所なのである。高校入学と同時に入寮すると、田島君と私は入口が同じ隣り合つ部屋であつたので、顔を合わせる事が多かった。彼は逞しい大男であつたので相撲部かと思いきや野球部のことであつた。私は貧弱な体であるが、並外れの野球狂であつたので、話がはずみ、いつの間にか非常に親しくなり、下宿の引越しには手伝いならぬお邪魔に行つたりの仲であつた。また大学では工学部と医学部の方がいはあつても共に阪大であり、卒業後今日まで変らぬお附合いをさ

せてもらつている。田島君が石油精製業界で活躍し、社長であつた時、招かれて見学させてもらったが、整理整頓の田島式管理が隅々まで徹底していた指導力に流石と感服したことがあつた。なお、彼の実家が、吉野杉の集散地である新宮市にて木材会社を経営しておられた。共に阪大生であつた時代、私の下宿へも時々見えて、私が暮に夢中であることを知つて、態々彼のお父さんの方から立派な権の五寸晝盤の寄贈を受けた。身分不相応な贈り物に感激して裏面に「贈奥野良臣君、田島康弘」と揮毫してもらい、今も多用しながら未代までのわが家の宝となつている。高校を出て五十年を過ぎた今、前記戦後來日されたカルシユ先生の娘さ

んと、田島君の娘さんが、奇しくも広大なアメリカの同地に住み、大変親交を深めておられると聞いている。崧校が取りもつ縁とは云え、不思議という他はない。カルシユ先生と田島君を併記した理由はここにある。この辺の事情は是非田島君から披露して頂きたいと思う。

カルシユ先生と田島君 その一 田島君 三 因果はめぐる 奥野良臣(十四期理乙)より

十一・九カルシユ先生の思い出

カルシユ先生の思い出は四十年にも前に遡る。従つて私の記憶が鮮明な部分のみに限られることを予めご了承下さい。それは一九六一年三月初旬、私は初めて西ドイツ、マールブルク(Marburg/Lahn)

のカルシユ先生をお訪ねした。美しい中世のお伽噺にでてくるような町ローテンブルグ(Rotenburg oder Tauber)のゲーティンステイトユートで二月の語学研修を終えてマールブルク大学に到着して間もない頃であつた。フンボルト給費生として衛生学教室で早速研究をはじめた私は恩師奥野良臣先生から先生の旧制松江高等学校時代のドイツ語の先生であられたカルシユ先生を是非お訪ねするよつに云われていたので早速お手紙お差し上げ参上した次第であつた。カルシユ先生のお宅はマールブルクの城に近く木立の多い閑静な住宅地の中にあつた。どつしりとした煉瓦造りの家で隠者の閑居を思わせる雰囲気であつた。先生は堂々たる

偉丈夫だが、見るからに柔和な温厚篤実な方であられ、また、奥様も穏和な優しい方で私の緊張した気持ちにはたちどころに氷解した。たどたどしい私のドイツ語に合わせ、分かり易くゆつくりと色々なこと話してくだされた。遠い異郷から遙々勉強にきた学徒を慰める言葉とともに、その異郷のとくに松江高校教授時代は先生にとっては格別の懐旧の情をもっておられることがしみじみと感じられたのであった。先生は松江の静かなたたずまいや人々の純朴な心をこよなく愛しておられたのであった。古い家具に囲まれた客間の書架から何冊かのスケッチブックを持ってこれ現代の日本では見ることのできない美しい日本の風景画の数々

や、また、松江の町の人々の日常的な暮らしの様子を数多くスケッチされておられ、その美しさ、優しさは他の追従を許す事のできない素晴らしいものであった。あのスケッチブックは誰方のもとにあるのだろうか、もう一度カルシユ先生ともにお目にかかりたいものである。美しい松江でカルシユ先生とともに多感な旧制高校時代を過ごされた松高卒業生の方は幸せである。総じて旧制高校卒業生は現在では大部分の方々は七十歳を遙かに越えておられ物理的に遠からずこの世から姿を消されることになるだろう。私は旧制高校とドイツおよびドイツ語との関係は極めて重要であり、此処に其の一端を記述して置く事は無駄では無いような気

がするものである。

十一・十カルシユ先生奥様へ！

私達のご主人様の御病氣のことを拝承致しましたとき、それは私達には大変な驚きでございました。それと申しますのも、私達は三年前先生を、日本にお迎えしました際のお元氣な姿を、思い浮かべるからでございます。旧制淞高のむかしの生徒達は、何れも先生のご病氣が、何とかできるだけ速やかに御回復することを心からお祈り致してまいりました。この私達の熱望にも拘わらず、この度悲しい御便りを承り、何物にも代えがたいものを失った思いで残念でございます。

私達が先生を独逸語の教官として御迎えした当時のことを想起致します。それはもはや四六年も以前のことです。爾来先生は、十六年以上私達の敬愛する先生として、松江にお住まい下さいました。この間先生は数多くの若い生徒達のために、単に独逸語、独文学の講義をせられただけでなく、精神的な教養の領域についても学ぶべき多くのお話もして下さいました。先生の偉大なる御学識と、人間的な温かさというものが、生徒達には大へん有益な影響を与えたのでございます。先生の御努力と、御熱心なる御薫育の御かげで、私達は松江において、若き時代を極めて有意義に送ることができたのでございます。

先生が独逸の御郷里へお帰りになられた後までも、次々と生徒が独逸を訪れたその折りに、先生には何かとお世話様に預かりました。さればこそ日本に居る昔の生徒達も、先生を日本へお招きしたいとの願望を抱いたのであります。幸いにも先生は私達の願いを御容れ下さいまして、一九六九年秋、先生の日本訪問旅行は実現いたしました。その時、先生は、日本中を旅行せられました。沢山の昔の生徒たちは、あなたの御令嬢を伴われた先生を、心から歓迎しました。先生のこのご旅行の中でも松江訪問は、何とも言えぬすばらしいものでございました。また旧制瀬高大阪支部の私達は、先生を当地大阪でお迎え致しました。多分あな

たは大阪における集りの写真を御覧下さったことと拝察致します。勿論その晩大阪市及近隣の地域から集った生徒達は、既に以前より年は取っておりますが、それでもその夕べは心から楽しく過し、松江における若きよき日の思い出に耽つたのでございます。

それは洵にすばらしい夕べでした。私達は今まで一度も味わったことのない夕べであり、また私達の間においてのみ、体験することのできた夕べでございます。私達は尚今でも私達の先生の親しみのこもったおだやかなお顔が、目の前に浮かんでまいりまして、その嬉しそうなお姿を忘れることができません。私達の親愛なる先生に対する懐旧の念は永久に生き生

きと残るでありますよ。

神は、はや私達の尊敬する先生を地上から召されました。先生がやすらかに眠り下さいますことを祈り上げます。茲に私達の心からなる御悔みの言葉を捧げさせていただきます。日本の習慣に従い、御花代として些少のものをお送り申し上げます。(一九七二年二月五日)

第十二章 カルシユ門下の人々

今は消息も含めてまったくわからない人が多いがカルシユ先生の教え子で世の中で活躍した人は枚挙に暇がない。もちろんこつした人々を輩出した理由はカルシユ先生の影響というよりはむしろ旧制高校の制度と優れた教師、それにも増し

て素質があるでしょう。しかし今、健在の人々に聞けば、そしてなくなつた人々の話からは、どうしても否定できないカルシユ氏の影響があると思われる。以下には、著者が種々資料や伝聞を基にしてまとめたものであるが、ここに載せた人物はカルシユ先生に密接に関係のある直接の生徒で四期生から十九期生までに限定してある。しかも、資料が入手できた

また私を知る限りの人達であり、勿論此処に記されなかつたが大きな仕事を成し遂げたひととたくさんいることを付記する。なお、影響をこの間受けたカルシユ氏が任中の理甲の生徒の中にも、同様に各界で活躍している人も沢山いる。

以下に述べる嘗ての生徒の活躍はその第

子である「孫弟子」まで及んでいるし、それらがすべて間接的なカルシユ先生の業績であることは疑いない。

十二・一 学術界へ

まず旧生徒自身の記録と伝聞からまず酒井勝郎氏について述べてみよう。折しも、アメリカ原子力潜水艦と日本の練習船「えひめ丸」の衝突遭難事件があった。この事件から思いは彼の著書の中の紫雲丸事件の記述に想いを馳せた。これを読んで感じたことを要約してみよう。彼は戦前からの日本で行われていた工学技術に対する批判を述べている。彼は自らはテレビジョンの開発やレーダの開発に従事した科学者である。本書には、彼の言

行が到る所とところに見られるので、ここでは科学者として眼からの側面だけでなく心情的な側面をも敢えて述べることにする。

(一) レーダ開発の功労者

彼はこう言う。「今までの日本の科学は借り物で固まって、その借り得がねらいであったよ。自らあまり努力をせいで、損得感情と勘定を念頭に置いていたので取り組みの動機に弱さがあり、人間の本質的要求に答えられないことが少なくない。というのは、科学は草木がのびるような自然の力で、心の自然の欲求に由来しなければならぬからである。」故郷の松江川津の修学旅行で小学生を運ん

だ紫雲丸の「遭難事件」の新聞記事が目に入った。「一体誰が、この悲運の人達に手をつけて謝ってくれるのか。責任ある立場のひとと一緒に死ねば、また辞表を出したのが世間に対して一応良いわけになるのか。でも、それらが残った父母にどうして納得のいく償いになるわけではない。」彼は川津経由本庄方面へのバスのなかで窓外の景色をぼんやり眺めながら、ふと自分が開発に関係していたレーダへの過信が遭難原因であったという記述に思いを馳せた。この事件ではスピード本位に旅程を組み、その食い違いに不満をいつているお偉方の姿が想像される。多少レーダ導入の行政的事情を知っている人ならば「レーダを備えて何事か」と

いうであろうことも想像できる。科学の本質を知らずに、科学の進歩の末端だけを頂戴して、十分に理解せずに、宣伝された性能のみに合わせて装備した機械の操作に慣れないことが事故の遠因である。ときに、行政の都合のみによって運行を定めた大人社会の危険さを認識する必要がある。進歩改良のための厳重な試験使用のなさの油断と惨事は繰り返し起こるであろう。というように今日の事故や事件の原因の所在の分析に通じる確かな眼が感じられる。

「田舎の大学から」紫雲丸遭難事件を読んで

次に、編者に調査のアドバイスを与えて下さった宮田氏について述べよう。明治以来ともすれば、一旦世の中で何かの価値が定まるとそれが固定されてしまうこと。そしてそれが容易に動かず、よほどのことが無い限り、新しい見方を拒否する日本人の一般的態度を自らの学問的背景である国文学を通して、編者に丁寧に教示して下さったのが彼である。彼の自伝的な物語に注目したいと思ふ。

(一) 俳諧の研究を生涯を通して

中学時代にすでに自由主義教育を体験していたので、高校での自由の精神は当り前のこととして受けとめていた。しかし三年生の頃今でいう学園紛争で身辺か

ら多くの退校などの処分を受けた者が出た時のショックもあって、どうやらそこに根ざしていた画一的強権力への反抗姿勢が芽生えたようだ。そんな時、体制内の自由論に感心したりした。高校では良き師の導きもあり、その後も「怪我我せず」に文学者の道を歩み、以来好きな研究に打ち込むことができたようだ。高校時代の三年間に生まれた友情の絆は、それから七十年余の生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなって今に渝らない。

とにかく、いまでも続いているよき友人に恵まれた幸せを何にもまして感謝している。 宮田氏の言葉より

(三) ワクチン生産の功績者

青山博(十四期理乙)

松江高校第十四期理乙「昭和十二年」は入学した時は三十名だったが、現在半分の者が鬼籍に入り、淋しくなっています。しかも、在校当時の豪傑連中、柔道部のキャプテン森新太郎君をはじめとして、千田菊麿君、野津辰郎君、神田貞雄君等々の元気ものが早く亡くなり、平々凡々としていかすんでいた、小柄な綿谷君、奥野君や私等が元気に生きている。皮肉なものである。その中から、特に奥野良臣君のような、立派な世界的な学者を生んだことに、我々は大変な誇りをもっている。彼が麻疹ウィルスの分離(発見)、生ウイルスワクチンの創作等の偉大

なる業績によって、昭和五十三年、紫綬褒章を受章されたことは、ご存じの通りである。彼の地味ではあるが、誠実な研究態度が生んだ賜であり、当然の結果である。又、も一つ、「阪大微研のワクチン」として、数々の予防ワクチンを生産防疫上、国家に多大の貢献をした功績は大きい。私の弟、青山章である最後のカルシュ先生の教え子(十九期理乙)は在学中から谷口奥野教室に出入し、卒業後も引き続き入門し、彼の指導を受け研究生活を送り、今でも彼の弟子の筆頭におさまっている。戦後間もなくの頃、彼の研究の手伝いをして、私の村の子供達を多勢集めて、奥野教室創生の麻疹生ワクチンを咽頭に塗り、試験接種して、軽い麻

疹症状が出たと、大変嬉んでいたことを記憶している。昭和五十年頃のこと、奥野教室で創作された「ムンプス・ウイルス」が制癌剤として有効性があるのとこととで、東大阪市立中央病院外科へ臨床症例を依頼された。私と医局員の谷岡恒雄君とで、入院患者特に末期癌患者に対し「ムンプス・ウイルス」を注射し、データを集めた。百数十名に実施した結果、腹水が減少したり、又消失したり、又疼痛が軽減して食欲が出たりして、かなりの効果が認められた。私の長男も外科医になっていたので、京大でのデータをまとめて貰った。昭和五十一年秋、日本癌学会に共同で紙上発表させていただいた。末期癌のみに使用したのと、保存方法が

難しく、今後の追求が望ましいと思っ
ている。彼の弟さんは、東大阪市で牧浦
外科病院を開いていて、私とも親しい外
科医の仲間である。彼は大学者であるが、
きさくで付き合いやすく、又阪大昭和十六
年度クラス会「正修会」の幹事として、
よく世話をしてくれている。この会は家
族同伴の旅行が多く、奥野夫妻と私ら夫
婦が同行することが多い。最近では、奈
良古都めぐり、松江白御碕燈台の散策等、
楽しい思い出が沢山ある。スナップ写真
も沢山とれている。今の所、みんな健康
にめぐまれているので、今後も永いお付
合いを楽しみにしている。

奥野氏は自らの研究と弟子の育成とその

業績の広がり、カルシユ先生の存在が後
になって重要な意味を持っていたことを
自らの思い出の中で語っている。これを
紹介する。

(四) カルシユ先生のお蔭

奥野良臣(十四期理乙)

カルシユ先生は、私が松江高校に入学し
た昭和九年から三年間ドイツ語を教えて
下さった先生である。初めて習ったドイツ
語は難しく、面白くも無い授業ではあつ
たが、カルシユ先生の型破りの教え方に
愉快な時間を持つことも出来た(但し日
本人の三人のドイツ語の先生も個性的な
立派な先生であつたが)。昭和十二年阪大
に入学し、一六年に卒業した頃は、果て

しない戦争が続き、その年にハワイ攻撃
から更に熾烈な太平洋戦争が始まって、
私の青春時代は戦争一色であつた。同僚
友人なども、特に病人でもない限り、皆
近く戦争の為に動員される事になってい
た。しかし応召の遅いものは召集がある
までは、平素と同じく研究室で研究でき
る期間があつた。私は大学卒業時、父に
細菌学をすすめられて、ウイルス学の我
が国の先駆者である谷口腆二教授の指導
を受ける事になった。そして最初の頃は、
二年先輩の猪木正三氏と同級の竹村茂君
の三人で、谷口教授のテーマである麻疹
ウイルスの分離の為に、たくさんのサル
を使って、麻疹ウイルスのサルへの伝達
試験に熱中した。自由な雰囲気の研究さ

せてもらった為に、研究が面白く、日曜祭日も無く三人とも良く働いたと思う。しかし間もなく竹村君は応召し、比律賓へ行き、後にレイテ島の激戦で無念の戦死を遂げる事になった。従って研究室では猪木先輩と私の二人だけが麻疹ウイルスの研究に従事し、他のテーマの細菌教室の人々は、皆その内に応召して、居なくなつた。猪木氏もその内原虫学に興味を持ち、原虫学部門に移る事になり、暫くすると谷口教授の研究テーマの仕事は私が殆ど中心になって行う事になった。私はまた、すでに大学卒業後まもなく、軍医として働けるように、軍医予備員の研修の為陸軍の二十二部隊に入隊し、一定の期間の後除隊して、応召の機会を待

つ身となつていた。その研修の前と後に、私は猪木氏と共に実験中のサルが、人間のマラリア原虫に良く似た形態のマラリア原虫に自然感染してる事を見つけた。しかし、その原虫について既に発表があるかどうかを調べる必要があり、他に記載の無い事を確認して、新種のマラリア原虫として発表した。その過程で外国、特にドイツ語、次に英語の文献を広く調べねばならなかつたが、私共は高校時代理科乙類を選んで居たので、マラリアの研究状況を調べる事はさほど苦にならなかつた。ドイツ語を三年間習つた事、特にカルシウ先生からは興味を持つて教えられた事が大いに役立ったのである。しかしマラリア原虫を発見し、新種として

命名までして発表した事は、原虫寄生虫学会の大先輩を出し抜いた事になるので、日本の最高学者であり、世界的にも或寄生虫の発見者として有名な某大学の教授から、私共若造の軽率な発表として、学会誌の上でひどく叱られた事があつた。

暫く学問上の論戦を行ったが、結局は負けずに終わったと思つている。こうした論議の結果はともかく、むしろ学問上の論戦が有名になって、人々の注目をひいたのが、サルマリア原虫の発見は、丁度時節柄日本軍のマラリア対策に格好の利用価値を認められて、重要な「戦時研究」となつた(内閣発令)。これが、私自身の運命を一八〇度変える事になったのである。その経過を述べる。やがて私

にも召集令状が来たので入隊した。ところが、戦地への出征が始まる日の前日、呼び出され、「君は戻つて大学で研究するのだ。」との通達があつて驚いた。送つてくれた人や一緒に集まつた新しい同僚達に対しては後味の良くない事であつたが、一方では畳の上で寝られるのは嬉しい事でもあつた。

もし上記の通達が無ければ、すぐに戦地に赴く筈であり、喧嘩の時など手も口も出さず激高派の自分の性分から言つて無事には帰国できなかつたと思つている。この運命の転換をもたらした原因はマラリア原虫の発見であり、それを可能にしたのは、外国、特にドイツの文献で、それらを調べる能力を与えて下さつたのが

カルシウ先生なのである。
研究室に戻った後抗マリア剤の研究のほかに、いくつかの業績をあげる事が出来た。

特に難解であった麻疹ウイルスの分離に成功したのが、米国のエンダースと略同時であった。エンダースはこれによって直ちにノーベル賞を受賞したが、私の方でも文部省にこれを高く評価されて、微研に一つの麻疹研究部門が増設された。私は教授に昇進する事が出来、助教、助手、その他のポストと完全講座の予算を未永く頂く事になった。そのため若い優秀な人材を集める事が出来て、更に多くの研究を進める事が出来たのである。

※ 上については別に述べる。

このように私に望外の仕事が出来たのは元はと言えばカルシウ先生らのお陰であったと思っている。

十二・二 実業界へ

今は消息もがわからない人が多いこの分野で活躍したカルシウ先生の教え子は枚挙に暇がない。こうした人々を輩出した理由はむしろ旧制高校の制度と優れた教師、それにも増して素質があるだろう。しかし今、健在の人々に聞けば、どうしても否定できないカルシウ氏の影響がある。ここでは、実業界で指導的な役割を演じてきたひとを編者の独断で挙げた。以下、編者が親しく接した白石氏の自伝を紹介しよう。

(一) ビジネスとドイツ語

白石磷(九期文乙)

高校を卒業後直ちに京都に往き、すぐ角帽を買って、母が独りでいる郷里に帰り、その前年十一月に昇天した父の墓前に置いて頭を下げた後、私の帝大生をみて下さい、と心の中でつぶやいて角帽を冠って墓地から近いわが家まで母と一緒に歩いて帰った。

京都帝大では、経済学部を籍をおいたが、教室で教授の講義をノートする時間は午後の二時か三時頃で打ち切り、その後の時間は、農学部の敷地内にある五百米の公認グラウンドで、野球部やラグビー部と一緒にかなりきつい練習に励んだ。結局

は高校時代の《勉強より運動》と大同小異の生活であった。只、陸上競技に関する京都大学のその頃は、第二の全盛時代に当り強力ランナー、ジャンパーが揃っていた。十一年のベルリンヒトラーオリンピックには、私の同期生の田島直人、原田(後に藤江)正夫の二人が三段跳に世界記録をもって、並んで金と銀のメダリストに輝きオリンピック史上に不滅の名声をとどめている事実は私の自慢話の種として一生つくづくことになるだろう。

中学二年生から始った私の陸上競技は、練習の不手際が精神的、体力的両面に及んで、結局オリンピック選手には程遠い二流ランナーで終わりを上げたが、終戦後から日本陸上競技連盟や日本学生陸上

米空軍の爆撃と戦いつつインパール作戦の準備に当たった。処が昭和十八年八月に、急に東京の陸軍航空本部付に転任という幸運の命令があつて、当時名古屋で私の無事帰還を待っていた妻と長、次女を伴つて東京に移転した。すぐ軍需省という戦争用の新設役所(文官制)に勤務し、陸海軍共用の規格に変わったばかりの落下傘の生産担当官で走り廻っている内に昭和二十年八月十五日に陸軍大尉で終戦を迎えた。約八年間の戦争軍人の生活は人生の無駄な部分であつた反面、命の大切さを知るいい経験でもあつた。こつして大日本紡績(株)に復帰して東京で終戦の後始末の仕事をして二十四年には社長室調査課長を命ぜられて大阪本

社に腰を据えた。調査課長の仕事は色々あつて面白さと忙しさで運動不足気味ではあつたが、将来の日本繊維業界の進路を考えるためにも、外国、特にアジア各国の綿業関係の実状を知る必要が出て来た。こつして、日紡としてはまずインド、パキスタン、ビルマ、フィリピン、マレーシア、香港などの工場見学から始めることになった。上記の国々では我々の片こと英語と現地働いている日本商社の社員各位の応援で何とか資料収集することができた。しかしその英語にしても、高校入学試験以来は高校、大学でも殆ど使わず、戦時中は英語禁止の命令まで出ていた有様で、やはり会話となると苦労の一つであつた。でも、インドでは、日

競技連合などで多少後輩のお世話が出来て今日に及んだことに私なりの満足を感じている。昭和十年四月には、半年前から採用が決まっている大日本紡績株式会社に入社することになった。私が学生から社会人になってからの人生を托するこの会社は、略称日紡、ニチボウと称して、当時の日本経済を背負つて活動していた東洋紡績(株)と鐘ヶ淵紡績(株)に並んで、世界三大紡績と称せられてきた総合繊維会社である。(現在は「ユニチカ株式会社」と改称している。)入社した私と同期の事務系学卒新社員は二十二名(今、三名生存)で意気盛んであつたが、日本の軍部は昭和八、九年頃から中国の北東部、東

部などで、政治的、軍事的問題をかかえ込んでそれが国際的批判に発展し、昭和十一、十二年頃は中国相手の戦争に発展して来た。私は今の老妻と昭和十三年に結婚したものの不安な雰囲気の中であつた。日紡にしても、若い社員達は兵役義務にかりだされ体位良好なものは次々に戦争軍務に服して、会社は暗い気分になり、巻き込まれて来た。私も昭和十二年には、陸軍少尉に任官して、十四年には内地勤務の召集軍人としての不馴れな兵役に従事して陸軍中尉になり、昭和十六年十二月八日の第二次世界大戦(日本名:大東亜戦争)勃発と共に実戦部隊の第十五軍に属して、今のベトナムからカンボジア、タイ国を経て、ビルマ国に進入して、英

本は世界の綿糸布の大生産国であり、インド棉の大輸入国であり、現にインドの平服ともいえる「ドーチー」を輸出しているなどの事情で、その頃はどの工場も好意的に見学させてくれて、想像以上に立派な現場に感心もした。昭和二十七八年頃の話である。特にニューデリーの近くにある有名なカストラバイ財閥の代表工場に案内された時は印象的であった。紡織関係工場の視察を了えた処で次は加工工場（染色、漂白、プリントなどの工場）の前に来た。インド人の案内人が立ちどまって、この工場は建設されて二、三年しかたっていない。機械は独逸製で工場長も、今、英語を勉強中のドイツ人であると紹介してくれて中に入った。し

かし私はその勉強中の英語の説明の方がインド式英語よりもよくわかったのは、お互いに外国人の英語のせいだったからだろう。それにドイツ語説明のついた諸資料を色々手渡してくれた。私は出発前にわが社の加工関係の技術課長から、加工関係の資料もあつたら頼むといわれていたので、このプレゼントは嬉しかった。見学もすんで、工場出口の処に来た。インド人の案内人がインド式英語で「よく来て下さった。有難う」といいながら握手のための右手を出した。私はお礼をいうのはこちらの方だと思って丁寧に握手して日本式に頭を下げた。ところが、ドイツ人工場長もすぐ握手のための大きな右手を私に差出して、インド式英語で

「Good bye, thank you very much」といって笑顔を見せた。その時、私はふとドイツ人工場長の好意に対して挨拶をせねばいかんという気持ち強く感じたのか思わず、「Ich danke Ihnen sehr, Auf Wiedersehen」と自分でも驚くほどのスムーズさでドイツ語の挨拶が口からこぼり出た。「しまった」と思ったが後の祭り、彼は私がドイツ語で話が出来ると思ったのか、握手の右手に力が入り、満面の笑顔で話しをはじめた。私には通ずる筈がない。ドイツ語の返事はせず左手を横に振って片言英語で私は約二十年何年か前に高校でドイツ語を習っただけで、ドイツ語で話ができない。というところ、工場長は私の来訪者でドイツ語で話してくれた

のは貴方が只一人だ。私は嬉しい。今夜は、同じホテルだから、食事を一緒にしようといつてきかないので、片言英語とぼつぼつ思い出すドイツ語で小さい夕食会をすませて、夜十時頃までおつき合いをした。翌朝、案内のインド人社員はあの工場長がこんなに喜んだことは今まで見たことがない。私も貴方のドイツ語がとても嬉しく社長にも伝えておきますといつてくれた。これで小さいことだが一つの国際親善ができたわけだが、これも不勉強な中にもカルシユ先生にドイツ語の教授をつけたおかげと思い、改めて独逸にいらつしやる筈の先生に心の中で深甚の謝意を捧げた次第である。私の出張は、このインドから戦時中の激戦地で私

で東京帝大で経済学を修め卒業後、三菱
 鉱業、住友金属工業を経て、住金物産副
 社長であった。現在も第二木曜日開催の
 旧制松江高校の二木会耳目会ともよぶ
 に白石氏、細田氏、萩原氏らと参画して
 いる。

(一) 松江高等学校と私

岡崎道夫(九期文)

男三人兄弟の末弟として静岡に生まれた
 私は、子供部屋と言はれてゐた一室で二
 人の兄と起居を共にして育った。二つ違
 ひの次兄とは当分寢床も一緒であったか
 ら、長じてからも良い相手になってくれ
 た。昭和三年の暮れの事、静岡の生徒に
 なってゐた次兄と私は進学について相談
 してゐた。私は末子の吾儘な性格からで

も日本軍人として駐留したなつかしのピ
 ルマに行き、タイ国と香港を経由して帰
 国したが、つづいてピルマには三回も渡
 航してピルマ棉と紡績工場の件で色々
 と調査し交渉した経験は今でも大切に
 している。

その後のカルシユ先生、ドイツ語と私の
 関係は一九九〇年(平成二年)にカルシ
 ュ先生の長女メヒテルトさん(Ms
 Noria S. Gar)が来日されて、大阪に
 も二泊されることになり、奥野良臣阪大
 名誉教授(十四期理乙)よりのお声がか
 りで歓迎会と宿泊について協力した一
 件だけだと思つ。しかし、そのご縁で、毎
 年末にクリスマス・カードにご夫妻のお
 写真をつけて日本語の上手なご挨拶を送

つて下さるメヒテルト夫人のご好意が永
 くつづくことを祈つてやまない。最後に
 若松秀俊教授が並々ならぬ熱意をもつて
 取り組んでおられる。故カルシユ先生顕
 彰のご企画が立派に完成をみることをこ
 ころから期待し、併せて、私も何かとお
 役に立つべく努めてみた何がしかの動き
 も、微力と老齢のために、不十分に終つ
 たことを深く陳謝して擲筆したいと思つ
 た。その後、白石氏は昭和三十九年の東京オ
 リンピックをはじめ、陸上競技の諸団体
 にも関係して、日本陸上競技連盟審議員、
 日本学生陸上競技連合顧問等として若い
 内外の選手の育成に尽力し、今に至つて
 いる。

同氏の級友である岡崎道夫氏は静岡出身

しょうが、学科の好悪が強く、問題視さ
 れた中学校入試で案外上位で合格したの
 が裏目にて、好きな学科しか勉強しない。
 二年の終りには、最下位、要注意生徒と
 なつて、両親を心配させた。其の後兄の
 指導強化もあつて、毎学期成績向上し、
 兄弟で初めての進歩賞等を頂いたりした
 が、代数には後遺症が残り取返しがつか
 なかつた。四年から静岡を受験、美事に
 代数で不合格。さて来年はどうするか。
 兄は「官報に依ると入試に代数科目の無
 い高校が三校ある。激戦になると思ふが
 やつてみる。高等学校は専門学校と異り、
 国立大学進学希望の中学生を受入れて、
 大学教育を受けるに相応しい学生たらし
 める必須の補習教育を施す予備門的学校

てしまえば、三年間楽に勉強出来る。此の辞書を俺だと思つて毎日引きこなせ。頑張れよ。俺は一足先に東大に行つて、待つてゐるぞ、と励ましてくれた。母は柳行李と一緒に私を人力車に乗せて、駅には行かない、落ついた頃に、必ず会いに行きます。と言つて見送つてくれた。その約束通り、五月に入ると両親が揃つて松江に来てくれた。兄の予言通り、独逸語の集中学習で些さかホームシック気味であつた私には、地獄に仏で、両親の宿で過ごした時間が余程嬉しかったのであらう。今でも忘れてゐない。湖畔の町松江の春は爛漫であつたが、独逸語に追はれる新人生には他所の花でした。テキストこそ違え、五人の教授が入れ代わり

立ち代わり、文字通り烏の鳴かぬ日はあつても独逸語は毎日である。ABCの発音からの生徒の方は、テキストを前に辞書を引こうにも活用、変化を知らないから一つ一つの言葉の原形を探ることが出来ない。文法担任の藤野先生は大学出たての新進気鋭で生徒の窮状は百も承知、出欠を採る間ももどかしく、教科書数頁を一气呵成に講義し、級全員に二巡する程繰り返し発音の練習を命じ、終わりに宿題を渡す。出した宿題は次の日に丁寧に誤りを訂正記入され、点数まで入つて返される。毎日同じことが続くのだから、先生もさぞかしお忙がしかったらうと思つが、こちらは息つく暇も無い。それでもよくしたもので、一ヶ月もすると字引

だから、何高と特定する必要はない。寧ろ地方の良い環境にある学校の方が望ましい。自分は自然に静岡に入ったが今となつてみると、遠い他国に遊学すればよかつたと反省してゐる。末子の吾儘者には寧ろ必要な事と考えてゐるから、両親には自分から話して許して頂く。島崎藤村の本で讀んだが、松江等良いと思ふがどうだ。「目に見えない縁」といふものか、両親からは、大学は一番近い東京ですよと言つただけで松江高等学校受験が決められました。試験の日の松江は山陰特有の雲まじりの曇りの日であつた。数学の無い試験だから、自分では全部出来たと思つが、分らない。次兄は大丈夫合格してゐるよ。と樂觀論で慰めてくれた。一方東京

の長兄からは、母が心配するから、慶應大学予科の受験手続きをして置いた。直ぐ上京する様にとの事である。第一日は英語で大体出来た。長兄は英語が良ければ通るだらうと銀座で夕食を奢つてくれた。東京も悪くないと楽しく兄の下宿に帰つたら、松高合格の知らせが入つてゐて、嬉しいよりも、いよいよ親兄弟を離れてあの寒い処で三年かと思か淋しい気持が先立つたのは本音である。入学手続きを郵送した日、次兄は愈よ男子郷関を出ずだ。これは錢別だと片山独和大辞典を渡して、第一外国語に独逸語を選んだ以上、入学早々からABCで大変だらうが、一学期中手を抜くな。代数で覚えがあらう。文法の基礎を頭に入れ

が引ける様になり、テキストも讀めるから不思議である。この難行の末、六月の学期中間試験では組の大半が六十点以下の注意点という始末。藤野先生からは真赤に訂正された答案が一人一人に渡され、学年末試験で注意点が一科目でもあれば落策、留年ですよと声を大にして念を押された。こうなれば遮二無二突破するより仕方無い。高島先生は教頭の古参教授だが、テキストはゲーテ自叙伝、授業のスピードに年齢は感じさせない。書出しの三行を讀解するのに一晩かかった事を覚えてゐる。独逸文法ついて著書があるという小林先生は、外国語は文学書の文章を正しく音讀する事によって理解出来るものだとお説で、テキストの口マン

をさらさらと讀んで下さるのはよいが、全文を訳してはくれない。質問するとヴォルトゲフェールに適合する日本語が無いからと仰言る。後でその部分が試験に出たから私なりに訳してこれで宜しいでしょうかと先生に渡したら、先生は一讀本當の訳文には成ってつてゐないがまあいいでしょう、と受け取って窓外に眼を転じられた。その無愛想な横顔がとても印象的で、高校の先生は立派だな、と思ふと同時に外国語のヴォルトゲフェールまで理解するなんて事は其の国に住まない限り到底出来るものではないと考えるようになった。

哲学者である高橋先生のテキストは、アリストテレスの「精神について」の独訳

書で、中学生程度の頭脳には独逸語と内容のダブルパンチになった。上級になって先生の哲学の講義を受けて初めて理解出来た。

この様な諸先生の独逸語時間の中で、カルシユ先生は一種の救いであった。灰色の軍服の上に教授ガウンを羽織った大柄な先生は、教壇に上るとまづ笑顔で頷き点呼を始めるが、名称は諳んじてゐる様で、生徒一人一人の顔を見乍ら呼名し最後の氏名の者にゆつくりウントをつけて呼び、又につこり頷く。テキストは無く会話であるが、ポイントには英語、日本語を交えて、必ず判りましたか(フェルシユテーエン)と念を押す。お話の内容は独逸の地理、歴史、独逸人の物の考え

方、政治、宗教等で、わかり易い。時には国歌からリートまで教えて頂いた。ローレライ、リンデンバウム等。

Rの発音の*かい美しい独逸語で、先生のお話では、何処の国でも、言葉は地方によって違いがあるものだが、独逸ではドレスデンの言葉が最も美しいとされる。出雲の日本語はどうですか*顔された。かくて二学期ともなれば、独逸語はもとより、学校、町にも馴れ、友人も出来た。松江は湖畔の町、掘割の多い水の都でもある。学校の長艇を出して市中をめぐり、湖上の嫁が島から荘厳な落日を眺めて感激したり、クラス会、ストーム、自由な校風、暖かい市民の寛容の中で、若人の楽しみは限りない。寮歌にある通り、三

ドイツ語で話す建前を自分で守っておられるように感じた。

高学年になってからだと思つが、当日の終業後クラスの連中と高下駄の齒を鳴らしながら下宿へと向かつている時、ふつと気づくと先生が通勤用の自転車を押しながら追いついて来られていた。ニコニコしながら我々の列に入られた。直ぐ近くに居たのが私で、何か話さないと思いと思い、「ツアラトストラかく語りき」(ニーチエ)のいい解説書はありませんかと話しかけた。先生は一瞬驚かれた感じと共に我が意を得たりという調子で、日本で翻訳されているかどうか分からぬが、こんな著者のこんな本がある。また別の著者の本も挙げられ、岐れ道迄先生

は情熱的に話をされた。先生の話は全部は分からなかったが、先生から一生懸命話しかけられ、エライ事になって私が困っているなという感じを出していた友人の顔が忘れられない。

ドイツ語担当の教授陣の中に、丸刈りの胡麻塩頭の小林教授が居られた。順番に進められる我々のドイツ語の解釈の中で、適当な日本語が見つからない時は、身が教壇にあることを忘れ長考されることがよくあった。「あとで念の為、カルシユさんに聞きます。カルシユさんが居られて我々は本当に助かる」と述べられたことを覚えていた。

往事茫茫。カルシユ先生の哲学的立場などを詳しく聞いた覚えも無い。ただ靴

の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩まれるその印象がカルシユ先生の全存在を示唆しているようにも思われる。

十二・三 政界へ

(一) 硬骨漢政治家

赤澤正道氏はカルシユ先生の最初の政界を代表する生徒です。彼は思ったように事が運ぶと周囲の眼を気にせず喜びを表現し、気に入らないときには相手の様子に拘わらず噛みつく天衣無縫のひとであつたという。そして、また夫人が病気の時など枕元で三晩徹夜の看病した純情な愛妻家であるという。このひとが云つたことに、「議員が派閥をつくるのは、親分から選挙のとき資金を貰いたいのと、

もう一つは人事で早く大臣、政務次官、常任委員長などにして貰いたいためだ。

このほうが大きい。そのため国会議員は国政にはげむより、せつせとソウリ取りをして、論功行賞にありついた方が出世が早いということになる。かくて政党の非近代的状態が生まれてくる」がある。

時を経た現在でも、全く同じ論議が行われていることがこのテーマの空しさを物語っている。編者が学生運動を経験した頃の話である。「大人の世界」に批判的な立場から世直しを我々若者が提言したのを思い出す。今の若者と当時の自分たちの年代とを置き換えれば、まったく同じで、何も変化が無かつたといえよう。彼は高校生の頃松江高校を訪問した現職大

臣と渡り合った硬骨漢であったという。大学在学中は外交官志望であったが、卒業時に土建業の父がなくなり家事に従事した。昭和二十一年戦後第一回衆議院議員選挙に初当選。自民党近代化のために幹事長に直属する人事局が生まれ、その初代局長になった。派閥人事を解消し、人材の適材適所主義を貫こうとする考えである。そのために、彼は組織調査会の中で党員の勤務評定のあり方を検討したいと当時の抱負を高らかに語っている。なお、同年代にカルシユ先生等と接触し多大の影響を受けた著名な政治家がいる。自民党の代議士で要職をつとめた福永健

司氏と細田吉蔵^②氏である。直接のカルシユ先生の生徒ではなかったので深く言きみゆう及しなかったが、カルシユ先生はやはり思い出深いひとであったようだが是非、カルシユ先生の交流を語っていたらどうと思う。(勝手ながらたいへん不躰なお願いで、失礼をこ容赦ください。)

(二) 懐かしのカルシユ先生(仮題)

細田吉蔵(九期文甲)

次に直接の生徒であった高田富之氏の

^② 島根生まれ、松江出身(九期文甲卒)、東大法学部、旧鉄道省、運輸省、二十五年間、運輸官房長官から政界へ、国会議員二十七年間、自民党総務会長、中曽根内閣行政官理・防衛庁長官、運輸相歴任。

経歴と伝聞を述べてみよう。彼は埼玉出身の九期文乙卒で松江高等学校中退後東北大法文法を卒業し、通算十期衆議院議員 共産党 後に社会党所属した議員であった。

(三) 高校中退の秀才

思い出は何といつても『カルシユ先生』だ授業前の点呼「アツサヒ、アダチ、イシワラ、イジユミ、イジユイン……」を思い出すね。辻が言いくかつたようで「ツチ」と発音したのではないかな。独逸語はよく勉強したね。一年生の秋恒例の弁論大会が開かれた時に独逸語で演説しようと思つて、大新聞の社説に出た「階級闘争の弊害」を自分なりに翻訳して小林先生に見せたら全面的に訂正されたも

の、とにかく全部暗記して「ファルシユ、フォン、クラッセンカンブ」の題名で演壇に立つて一席ぶつた。これをカルシユ先生が聴いておられて「シエーネ、レーデ、ゲマハト」と大変褒められた。

戦後と同じ衆議院議員として一緒になつた七文甲の棒高飛び選手で国務大臣七回衆議院議長経験者の福永健司先輩から「一年生のくせに独逸語で演説するんだから驚いた奴だよ」とよくいわれた。大人になつてからの私の人生は松江の三年足らずの高校生活に重大な源をもつ。戦争は、松江でも苦しんだ喘息の持病で入隊と戦死を免れて、戦後より私の天職となつた衆議院議員も松江で形成された政治感覚により共産党代議士から出発して

後に社会党に移って通算十期、二十九年五ヶ月を政治と共に過ごしてこれた。松江では私の一生の中の『初体験もの』も色々ある。実に懐かしい。しかしこれらは密かに私の大事な秘宝とせずと胸中にしまっておくことにしたい。

十二・四 法曹界・社会活動へ

十期文乙の矢崎憲正氏がカルシユ先生に関する思い出と自らのこれまでの歩みを語ってくれる。彼は京都帝国大学法学部卒で元広島高等裁判所長官を務め、退職後は弁護士として社会活動している。

(一) カルシユ先生との触れ合い

矢崎憲正(十期文乙)

のお宅で、先生はいつも机の前でペンを走らせておられました。英語の内山敬二郎先生、独語の小林松次郎先生、物理の山口鎌次郎先生のお宅も近くにありました。

私は裁判官になり、東京地方裁判所に勤務していましたが、昭和十七、十八年頃だったでしょうか、大蔵省主計局勤務の若槻克彦君から電話があり、これからカルシユ先生に会いに行こうということでした。若槻君は崧高十期文乙の同級で、クラストップの秀才でして、三年ほどドイツに勤務して大蔵本省に帰ってきたとのことでした。カルシユ先生も若槻君は良くおぼえておられ、なつかしく話してあげていました。先生はお元気で精気にあふれておられるよつな感じを受けました。

若松秀俊教授が編集されたカルシユ先生の追想のなかに、奥谷の洋館の写真がありました。まことに、なつかしく、この洋館は表通りにあり、私は、すぐ裏通りにあった知人の二階に下宿していました。春の夜中に、ドイツチュラント、ドイツチュラント、ユーバーアルレスの大声がしますので、下宿から出てみましたら、学生二人が肩をくんで先生のお宅の洋館の門の前で歌っており、間もなくカルシユ先生が出て来られました。学生は卒業間際の三年生と思われました。カルシユ先生を慕うてのことなのでしょうが、先生は夜中のことだし、そんな大声では近所の迷惑になるからと諭しておられたよつに感ぜられました。奥谷には先生のお宅が多く、私の下宿の隣が高橋敬視先生

私は高校三年間を剣道と飲み屋めぐりに熱心で、ドイツ語の方はなまけがちでしたが、先生は私の顔をうつすらと覚えていてくれました。先生の温顔は、むかし通りで、ニコニコとされ、お元気にドイツ大使館で活躍しておられるよつに見受けられ、私共の訪問をよろこんでおられました。

若槻君はその後に広島に転任しましたがあの原爆で亡くなりました。将来は大蔵を背負つひとりになると思っていたのですが、残念至極です。

私にはカルシユ先生と若槻の顔とが、重なりあつて浮かんでくるのです。先生に署名して頂いた御一家の写真を同封し、先生と若槻のご冥福をお祈りしております。

(平成十四年一月六日)

目にとまり、「このお地蔵様は美男子だ。」と言った事に、岡田君の論難がひっかかり、また大論戦がはじまった。「美とは何だろう……」。美についての論争がはじまり、美しい紅葉の鱒淵寺から山超して、逢勸峠にのぼっても、まだつきない。「まあ「J」まで腰降ろせよ。」と、道端へ座って議論をした。この為松江への終電におくれて、岡田君の家へ泊めて貰ったのだった。この時の思い出は、永井君も強く印象を残していたらしく、後年、彼の長崎の病床から岡田君へ漫画入りの手紙が届いている。私も心の底が疼くような、楽しい思い出だ。そのうち永井君は、平賀先生の短歌会へ出席したり等して文学青年的な発展をする傍ら学生

永井隆氏については、いろいろなどころで様々な話が紹介されているので、松江高校の当時三奇人と云われた福田氏、酒井氏との交友からの物語を載せよう。

(一) 奇人の永井君

私は永井隆と、松江中学で同学年だったので、本当は一年のときから顔は知っていたわけだから、今記憶に残る最初の印象は、確か三年のときだ。作文がうまくて、その作品を吉川(せき)先生が読みあげられる度に感心したものだ。教室の席も、私の斜めうしろで、当時成績のいい者程うしろにいる事になってい

たので中程にいた私の一寸うしろだから、大した秀才ではなかった。然し、変に大人びていず、のびのびとした子供っぽさが好感をいだかせ、そのふつくりした暖かい情感のこもった作文に魅せられて、この人の存在に心をひかれたのが、当時の私の状態だった。

「お前は松江高等学校で、永井博士と親しくしていて、三奇人の一人だったぞうだが本当か。」と、眼をまるくしたことがあったが、この三人の交遊は深かった。三人一緒に鱒淵寺へ紅葉見に行ったことが、このことが思い出される。丁度小雨にあい、紅葉の色は返って美しく冴えていたが、たまたま寺の入り口に立つ地蔵さまが、赤い紅葉を背景にしているのが永井君の

スポーツにも関係し、開校後日が浅くて、整っていない学校の運動クラブを充実しなければならんと言っていたが、やがて籠球部を新設した。この時、最初は同好者として誘われて仲間入りしたが、やがて彼らはユニホームを着て、新クラブがスタートした。次に大弓部が又彼らによってスタートした。私もすすめられて、弓を一寸ひいてみたが、弓弦で強く耳を弾いて吃驚して、それでやめてしまった。永井君はこうして、大いに人の世話焼きをやり、社交的な発展をし、クラスの人気者になり、私達二人の眼を見張らせたが、それでもこの三人の交遊はちっとも変わらない。

(中略) 突然永井君が立ち上がった。そ

が精神尊重特攻礼賛の戦時中の事なので尚更その感が深い。ここで私の思いは更に進んで市昔を思い出した。高等学校のグラウンドの隅ではらばい乍ら、彼が話しかけ、私が「情熱を化学に生かすさ」という返事で信念を言われた時、彼が「そうか」と簡単にだまった事を思い返したのである。彼が自分の実践をこの私の言葉にのせたのではないかと考え愕然とした。科学を軽視したのはまずい。科学は峻厳なんだ。行って見舞いをしなければならぬ。松江の同窓生とも話し合い、出来るだけの援助をしなければならぬ。ということにした。終戦で打ちのめされた私の生活は、経済的余裕がなく、とても長崎遠行けない。とに角、余裕をつく

つてからと、あせるだけだ。尤もひろがえつて考えてみよう。私が行ったつて死病があるわけではない。それでいて、行かねばならぬと思う心は一体何か。新聞記事や手紙を見ると、盛んに死ぬ無ことを豫定してかいてある。成程、白血病は死病だぞうだ。彼が科学者であり医者であれば、この病気がとりかえしのつかないもので、先の見えているものだということがはつきりしているのだらう。然し私はどこ迄も夢のような高校時代の彼を思った。不能を知らない青年時代の彼を思った。学問は未知の世界を開拓するのが仕事だ。情熱は、未知の世界へ、学者をかりたてる鞭なのだ。この情熱に人間のモラルでもって誤りなく方向つけて、

して言った。演説口調である。「諸君。我々は今日これから、それぞれの運命に従つて、或は西へ、或は東へ、別れていくのです。思いでの深い今、過ぎ去った年月を振り返つてみましょう。私達は三年前の春に会いました。それからあの狭い……」(中略)

彼の出征もあり、手紙が梨の礫になり、音信が途だえ、住所不明になった。思い出しても手紙が出せず、終戦を迎えたのであった。再び手紙のやりとりがはじまったのは、終戦後、彼の病臥後である。新聞で重病を知り、友人の医者、白血病、レントゲン照射過多と、専門的見解をきかされて、事態の重大なことを知った。私はじっくり彼の事を考えてみた。

科学の未知の世界をまさぐるには、身の安全を保証されない突込みの要求される事が、間々ある。勿論保証の制度はある。然しそのような制度は経済的見地からかなり、貧弱で、新分野では野ばなしの所が多い。こんな分野での科学者はよく挺身突込みをやる。即ち身の危険を承知して、新分野開拓をやるのである。これが時に優秀有意の学者の犠牲という惨事を起している。古来このような例は、珍しくない。こんな立場に当面した彼が、持ち前の情熱に身を焦がし、勇んで突込んで行ったであろう事は想像できる。彼にはそんなことがありそうだと思つているうちに、好んでやったのではなからうかとさえ思つようになつた。殊にこの事

をだすのも控えた方がよくはないだろうか。何という情けないことになったのだろう。情熱に身をまかせ、未知の世界にとびだし、災難を受けて破滅して行く彼の友の一人として、悲しくも思い、口惜しくも思った。「どうして一寸した自重をして呉れなかった……」。然し業病にあえぐ友に、これが言えない。

昭和二十五年十二月やっと余裕を得て博多へ行き長崎まで足をのばした。終戦後陰つつな山陰にいた私に、この旅は明るい。殊に長崎に近づくとき車中の人情も暖かい。

窓外には蜜柑の山がつづく。餅つきに三人が杵をもって、臼のまわりをまわり乍らポンポンと調子よく搗く風景も珍

しく車中から見える。昔青年永井君がとおってきたにちがいないこの道を思い偲びながら長崎へついた。原子野に立つ浦上の天主堂を見、如己堂を童貞にきいて、マリア様像の立つ高みに、それを探していた。離れが病室ときいていたので、いきなりそれとおぼしい部屋の前に立った。「アア」。私は思わずなった。「高熱の為面会謝絶」私は溜息をついた。「たった障子一枚なのに……」。「ヨウ。」と言っていた。いきたい衝動を抑えて、別棟のおも屋で弟さん夫妻を訪ねた。見舞いのべ、看病の事や病状をきいた。「要するに栄養物をとって造血して、やっと生きているのです。それでもこれだけ生きるのはい例のない事なのだそれで、これは兄の信

身を挺してこそ本当の学者ではないのか。その学者が誤って業病にかかり、死を豫期するのは仕方がない。これを豫定して作文し、これ程大勢の人に読ませる事は、私にはどうもつれしくない。畏敬する永井君の為に、この私の意見をつたえるべきだと思いきやなかった。然し又考えてもみた。病苦もある。肉親に対する限りない愛情、運命と諦めても尚残る愛情の悶え等考えてみなければなるまい。こんな所へ私のような元氣な者が意見を言つて、諦観から呼び戻して、果して氣の毒なことにならないだろうか。私は迷った。然しやっぱり、大切な友の貴重な残り少ない人生の為にと思つて、手紙をかいた。「神様の奇蹟を信する心で、生きる

事を考えて呉れたまえ。」然し彼から来た手紙は実に美しい諦観で一杯だった。…… キュリー夫人も、この道を行った。それからブランクも死んだしらせを見た。今日もまた 生きてめざめぬ
玉の緒の いのち尊く思ほゆるかも
……
しかしねえ、大辞典は重くて、手であつかいかねるよ。……
度々手紙を書いたが諦観はかたかった。時には私を皮肉つても来た。これは程々に負けねばならない。闘病生活は、科字者永井君にとつて精魂傾けた大仕事なのだ。こ彼をまもらねばなるまいと、心にきめた。彼の心の平安を乱さない為には、曾ての友の私が、あまり元氣のいい手紙

を長崎の町へ向け、如己堂を去った。理屈つけて思いきっても、私の胸はそう簡単にはあさまらない。理科の化学専攻のこの私が今日は、大きな造船所の前を通っても、うつろな眼をして通りすぎた。本当は、今度の博多出張は海洋関係の研究連絡だったのだが、有名な海洋気象台へ寄ってみる気もしない。この世から消えるらしい永井君への思いが大切で大切に、とてもそんな脇眼がふれないのだ。汽車は夜半に出る。それ迄この胸を抱いて、町をさまようことにした。まず、浦上の天主堂へ引き返し、それから、はじめてこの町にでて、いろいろの風物を見ることにした。私の友をうばったこの長崎の町を、よくよくみたいのだ。船着

き場にも行ってみた。寺の門もくぐってみた。オランダ文物の遺跡らしいものもある。町には何となしに異国情緒があふれている。丘あり埋立地あり、雑多なものが入りくんでる癖に、東京や大阪のように荒々しくない。眼の光ったトゲトゲ人があまり見当たらないのである。西海の暖かさからくるものか、歴史の古さからくるものか。そのように雑多な風習の人々が随分開放的に暮らしているらしいのに、ここの密集群居がうまく落ちついている。松江等では考えも及ばない程雑多なものが、隣合わせていながら、夫々の生活を、夫々自己流に展開している。玩具箱の中をみ、雑然としたものがキーキー声をあげずに、うまく暮らしている

念の力によるものだと思います。「ひたむきに精進しているその生活は、如何に信仰の力と言われても、私には科学に精進している姿に見える。私はここで強引に面会をお願いしないことにした。残念だった。然しこれが、科学する友として、とるべき態度だと心に言いきかせた。闘病中も尚童心を思う彼の心は、病室の傍らにある子供図書館に、はつきり見える。弟さんはいう。「近所の子供の出入が多くて、病気にわるいのだが。」私は昔の彼を思った。童心をこよなく愛した彼を。「変わらないなあ。」しばらく話してから庭に出た。真白いマリア様像の前で心を宥め、多分永久の別れになるだろう永井君への訣別の心をこめてみつめた。す

ると寒空にたつこのマリア様の真白い、気高い顔が、私にほほ笑を見せている。よくみるとこの面差しが永井君のそれに似ている。私の訣別を受けているのだ。私の胸はこのとき、ときめいて、身体中の血が暖かくわいた。私はじっと、ときめきをお、まはたきませずこの顔をみすえた。「そうだ、昔の赤ら顔の彼が、これだったのだ。そして、紅葉をバックにした鰯淵寺の地藏様も……。」私は寒さを忘れて立っていた。心ばかりのお見舞いで、弟さんに別れをつげた。言つべき事を言つことの出来ない人間の訪問はこれ位で引き下がるのが適当と考え、昔の友としてこれが正しいと割り切り、去りがたい足

かまわず町へでた。傘なしで。どうせ汽車にのれば、暖かいから少々濡れていた方がいい。それより、大切な友のゆかりの地に少しでもゆつくり名残をおしむ事が大事だ。夜行列車は、大して混むという程でなく席はとれた。やがて発車して、轟々と東にすすむ。ゆつくり腰かけて、眼をつぶったが、とても眠るどころではない。今日一日永井君を想って長崎をさまよったことが、一つ一つ頭の中を駆けめぐる。これを繰返し繰返し考えてみれば、いずれこの世を去るであろう。永井君が、私の心に不滅の金字塔としてやきつけられよう。私はこれを心に期待し、祈りながら瞑想をつづけた。「ヨウ。」と、いって、せめて片手位はのべて懐しがっ

て呉れると思って訪れた私だった。一重の障子に隔てられ、マリア様の像に別れを告げ、町をさまよって、昔の彼を偲びながら、映画館にはいって、又彼の思いでのイメージに泣いた。「切支丹伴天連はええぞ」といってとび込んだ、純情な彼が私と別れてから長崎で辿った道は、彼自身を警市民であるにふさわしく、長崎の土地そのものに深く吸い込まれ、他処者の手の届かない所へ行ってしまうて居ったのだ。「会えなかったのも、当然だ……。」

長崎の町が玩具箱のようにみえた。そしてこの町では、その玩具の一つ一つが、みんな大人の社会で、夫々魂をもち、眼をもち口をもち現代に息づいている。こ

ように見えた。二十数年前、永井君が童心を抱いて、ここにいついた気持ちに何かピンとくるものがあって、次第に成程と思ってきた。

日が暮れて、雨が振りだしてきた。雨宿りする所も一寸ないし、駅は遠い。思いついて映画館をさがしたら、丁度「長崎の鐘」がかかっていた。「これは」と思っ

て入った。元松江の映画館へかかった時は是非見ようと思ったが、どうもその時の看板絵の醸す、永井君に似せた異物のイメージに辟易し、とうとう見そくなってしまったのだった。この時の看板絵も決して上等ではなかったが、然し今度は、私自身の状態がまるでちがう。浦上で病死の床に喘ぐ友への思いは、たぎって平

素の気持ちを吹き飛ばしていた。しばらくは画面にでてくる、彼永井君によくぞ似せおつたこの異物、それに安っぽいムードをさそう伴奏音楽に、気分をこわされながらみてるうちに、次第に筋に引き込まれるのだった。場面は私の知っている高校時代をいい加減に素通りして、知らない長崎の生活にうつった。こうなる

と、私の心をさすアラが見えなくなり、筋につられて映画に心がとけ込んでいった。初め嫌味さえ感じた俳優の演技にいい魅せられて、眼頭がじっとりして来る。悲しい友の話を、この映画で更に味い、いいものを、いい時見せて貰ったと思つた。気障な主題歌に追われて、館を出ると、外は雨が本降りだ。私は濡れるのを

成された政治感覚により共産党代議士から出発して、後に社会党に移って通算十期、二十九年五ヶ月を政治と共に過ごしてこれた。松江では私の一生の中の『初体験もの』も色々ある。実に懐かしい。しかしこれらは密かに私の大事な秘宝としてずっと胸中にしまっておくことしたい。

白石 松江時代は自由の意味を知り友情の価値を悟った大切な三年間であった。そして大人の世界に少しづつ足を踏み入れてすべてが楽しく希望にもえた時期ともいえる。今でも崇高のためになることがあれば、小さいことでも出来る限りしてみたいと思っている。

森山 省みれば前にも話した通り大学

れが長崎を形づくっているのだ。

「長崎は、僕好きなんだ。いいところだぜ。」といった。多感な彼が、何を考えていたかと思うと、幾多先人先駆者の血を吸い取ったこの地のサウルが、まざまざとしてくる。業病に喘ぐ彼の運命を遠くから気の毒に思い、同情し、しかも忠告がましい気持ちで来た私だったが、来てみればやっぱり昔のような畏敬の友だった。羨ましいとさえ思う。考えているうちに、夜半もすぎ、車中の客は大半ねむりこけている。汽車は激しく蒸気を吹かせ、冬の闇について東へ東へと轟進する。やがて茜色に明けそめるであらう、東の空をめざして。

田舎の大学から 永井隆君を想つ

きりがないのでこの辺りで、今にして想起する松江の三春について簡単に結びをつけたいと思う。

今にして思う松江三春の花の影

増田 私の人生の大切な一コマである。ロマンスもあり、良き先生、良き先輩、良き級友に恵まれて松江市民の純朴な親しみを肌感じつつ過ごした三年間は最高の心の宝物という外ない。

高田 大人になってからの私の人生は松江の三年足らずの高校生活に重大な源をもつ。戦争は、松江でも苦しんだ喘息の持病で入隊と戦死を免れて、戦後より私の天職となった衆議院議員も松江で形

から今日まで僕がこつして生きてこれたのは松江時代に身についた自由の賜と思つ。そしてこれも前に岡崎がいつていたように「哲学とは哲学の歴史が物語る」としてアリストテレスを淡々と講じた高橋敬視先生の如き筋の通った教育の結果であったと思つ。

松田 僕は旧制高校には独特の雰囲気があると思つている。それはデモクラシー自由の気風を背景に、未は博士が大臣かという天下国家に必要な人物を養成する目的のもとに創立せられた帝国大学の予科的性格が与えられ、入学は難しいけれども帝大進学については他種校とは大きい格差のある容易性が認められていた。これがおおらかにしてユニークなエリー

ト意識ともなり、今なお同窓会、クラブス会、寮歌祭さらに各種競技別旧制高校OB大会等に脈々たる深い友情の鎖となつて繋がっているものと思つてゐる。高等学校は全くいい学校であつた。

宮田 中学時代すでに自由主義教育を体験していたので、高校での自由の精神は当り前のこととして受けとめた。むしろ身辺から多くの退校などの処分を受けた者が出た時のショックの方が大きかつた。いつしか身についてしまつた画一的強権力への反抗姿勢は、どうやらそこに根ざしているようだ。そんな時、太田教授の講義でのいわは体制内の自由論には、こんな理解もあるのかと感心して聞いた。お陰で怪我せずに済んだ。その三年間に

生まれた友情の絆は、それから六十年の生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなつて今に渝らない。よき友人に恵まれた幸せを感謝したい。

岡崎 何度もふれたことであるが、入学に当り次兄からいわれた言葉の一つ一つが今にして身にしみて有難く感ずる。初めて親の許を離れて暮らした松江の三春は正にわが青春そのものであつた。美しい風土に築かれた高校の日々には、教室で、グラウンドでそして外の町々で、何ものにも換え難い友人との美しい交わりがあつた。そして最も貴い自由があつた。たまたま内外の社会には不況が拡がり、左右の争いが激化し、革命思想が頭を擡げ、治安維持法強化の所産的事件が続出

するよつな暗い世情に傾きつつあつたけれど、成長期の我々は自我の認識を強め、少年から青年への精神的脱皮に進んだ貴重な時期でもあつた。こうして戦争を体験した後、国家活動の多くの部面で活躍するようになつた我々昭和初期の高校生で、今注目されている昭和後期の経済的繁栄が形成されたといつても差支えなからう。旧制高校は素晴らしい学校だつた。

白石 皆さんはまだ言いたりない様子だが今日の座談会は一応これで幕を下ろそう。本当に崇高を思い出す嬉しい会合であつたことを喜びたい。終りに当り、今日ここに体調をこわして出席できなかった武内、清原両君の元氣恢復を心から

祈つて別れよつ。皆元気でいずれまた。

終章

現在の学制は六・三・三・四制の単線形であるが、戦前はそれとは大きく異なり、六・五・三・三制に他の教育機関からむ複線式だつた。その事の始まりは一八

六九年の舎密局と一八七二年太政官発布と一八八六年の学校令であつた。その中であつて六年制の尋常小学校が極めて重要であつた。戦時中は国民学校と名を変えた義務教育がそうであつた。高等小学校まで義務教育化されるのはもつと後であつたが、特徴としては五年修了があり、

一年早く卒業できた。中等学校、高等女学校、実業学校では、学習期間は四年ないし五年。中等学校、高等女学校ともに殆ど同じであったが、戦前は男女別学が普通であったので、男子が中等で、女子が高等というように呼称は異っていた。また中学校には四年修了があり、小学校のそれをあわせれば、合計二年早く卒業できた。そのような生徒の逸話も老齢のかつての生徒から聞いている。

実業学校は今日の商・工業高校にあたる。制度としては高等小学校卒業後に進学する学校で期間は三年であった。これらの学校は戦時中に制度上中学校として統一されたあと、殆どが戦後に新制高校に改組された。大部分が男女共学になった。男女別学を数県が貫いた。しかし、

特に教育事情に差があったわけではない。男女別学と共学は教育水準や民主化とは本質的な関連はない。

これらの中等教育機関の他に、期間は二年の高等小学校があった。戦前に国民学校高等科を義務教育化が予定されたが、戦争や青年学校等の影響により延期された。戦後実施された後に、新制中学校になった。世代によつては二年高等小学校に通った後に任意であったが、もう一年新制中学校に通った人もいる。

さて小学校卒業後に進学できる実業補習学校があった。これは前期二年、後期三年の二期制で、特色としては夜間や休日みの授業もできたことで、今の定時制高校に近い。戦後は工業、商業高等学校等の夜間部として生まれ変わった。

このように戦前は複雑であったが、次第に整理されてきた。最近の中高一貫教育というのは、旧制中学校に一部似たところがあるが、どつしても対応関係が見当たらないのが旧制高校三年と大学進学への整った道であろう。

戦後の教育改革というのは、ある意味で民主化ではなく、改革のための改革であったように思える。戦争を引き起こしたのは帝国大や高校を出た者だから、彼らが出た学校をつぶすという単純な論理のようだ。そして、単純にエリート養成教育はいけないという将来展望なしの悪平等教育の論理が生まれたのである。もちろん、教育改革の中心となった知識人や官僚らの目指した教育が今のようない無残な教育であるとはとつていえない。

したがって、戦後の社会の雰囲気の中にその極端な結果をもたらす理由があったとしか思えないのである。しかし、そのような社会の雰囲気を作ったのは取りも直さず国民全体であったし、それに動かされて制度を変えて来たのもやはり国民全体で、その責任はすべて国民にあるはずである。その雰囲気の中にあつて、破壊された国を担つて、いわゆる戦後の復興と繁栄は、もちろん国民全体の努力の賜物であるが、年代的にいつて、戦前の高等教育を受けた旧制高校出身の人々のリーダーシップに負つことが少なくないのも事実である。これを素直に認めるとなれば、時に耳にする非難の声を賞賛とまでは行かなくとも、戦前の教育の成果と見ても差し支えないし、むしろ善悪公平な

見方といえることになる。したがって、過去に先人が嘗々と築いた日本の風土にあった教育の長所をもつ戦前の教育に、今の教育の実態が及ばないと認めるなら、それを率直に取り入れて、制度を含めた環境を変えればよいはずである。つまりネガティブに出てきた結果を他人や制度のせいにすることなく、何が良かったかを引き出して誰にでも分かるようにして、後の世代に引き継げばよい。その意味で旧制高校といつのは学制面でも実質教育の面でも、考える素材を大いに提供してくれる宝庫であることは疑いない。また、昨今の高等教育で目に付くような「己の価値観」の醸成と「他人の価値観」との共存環境の根本に関わる問題の把握と解決に何らかの手掛かりを与えてくれるこ

とも期待できる。偶然の機会から旧制高校の歴史、教師、生徒を調べ、今なお健在のかつての生徒から生の声を聞いてるうちに、いつしかそんな事を考えるようになった。

(平成十二年十二月十八日)

おわりに

ドイツで一人の女性とほんの偶然から出会ったことが私を大きく変えた。縁もゆかりもない、存在すら知らなかったカルシウ先生を契機に、そこから芋蔓式に色々な事実が次々と著者の眼前に現れた。その事実の間に絡まる縁の不思議さに、驚きとロマンを感じ、感慨に耽つてきた。そして、何よりも、調査のさなか、旧制高校から輩出した多くの人材を知るうちに、自分と異質のものに密度濃く接することが若者の成長に必要な要素であるかを痛感した。とくに、人の心に余裕を生み出すものが何か？それを旧制高等学校を卒業した人々が戦後に社会を再建し、今もなお続く活動の姿をみて考えた。当時の教育に見えることは、周囲との密な接触、未熟な者同士の相互の接触と刺激と自由な議論の環境の中の生活と、そのなかから芽が出て、それがやがて開花した姿ではなかったろうか。もちろん自分の意志で自分の将来への道やそのビジョンを見いだすことは、決して容易ではなかったであろうが。しかし、壁にぶつかり、それに悩みながらも、自ずとやがて見いだしていける、その能力の下地を懸命に構築しようとする試行錯誤を随所に感ずることができた。一

際にそれを端から見ても、あたかも自然な形で行ってきたように見えることに心打たれる思いであった。

若松秀俊

東京医科歯科大学

- 295 -

カルシウの薫陶を受けた著名人

旧制松江高等学校でカルシウ氏が職中に薫陶を受けた者に

政界では衆議院議員で自治相を務めた赤澤正道（昭和二年卒業の四期文乙）、元衆議院議員の榎橋勇（六期文乙）、高田富之（九期文乙）、元衆議院議員・労働大臣の山手満男（十一期文乙）衆議院議員、国務大臣十回、衆議院議長を歴任した福永健司（七期文甲）、衆議院議員で自民党総務会長、行政管理・防衛庁長官、運輸大臣を歴任した細田吉蔵（九期文甲）や元島根県知事の伊達慎一郎（五期文乙）がいる。

外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚（九期理甲）、海外移住事業団理事、ウルグアイ大使を歴任した等瑞宝章受章の大城晋敏（十期文甲）がいる。

法曹界では、大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島岩吉（五期文乙）、元福岡高等裁判所長官で国土館大学学長を務めた綿引紳郎（十五期文乙）、元広島高等裁判所長官の松本冬樹（八期理甲）と同じく元広島高等裁判所長官天

崎憲正（十期文乙）が挙げられる。

学術界では元長崎医科大学放射線医学教授で「長崎の鐘」で知られる永井隆（五期理乙）、レーダ開発に従事した元島根大学教授・元琉球大学教授の酒井勝郎（五期理乙卒）、元北海道大学印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙後継者の古田紹欽（十期文乙）、元滋賀大学国文学教授で雑俎史研究家の宮田正信（九期文乙）、元大阪大学教授微生物病研究所長で紫綬褒章を受章したウィルス分離研究の奥野良臣（十四期理乙）がいる。

芸術界・出版界では元カリフォルニア州立フロントン大学教授でドイツ留学後欧米で活躍した舞踏家の邦正美（朴永仁）（八期文甲）、「暮らしの手帖」社設立、編集長を務めた花森安治（十期文甲）、岸田国士の劇作同人、大映グランプリ羅生門のプロデューサー・放送作家の辻久一（九期文乙）など枚挙に暇がない。

主な参考文献

- 一 嵩のふもとに(旧制松江高等学校校史)
- 二 翠松(旧制松江高校同窓会報)
- 三 大阪支部会報松友
- 四 東京松高会報
- 五 カルシユ旧生徒および同窓生の手記
- 六 カルシユ講義録 宮田正信所蔵
- 七 新聞など
 - 朝日新聞 一九六八年十月五日
 - 山陰中央新報 一九六八年十月五日
 - 長崎新聞 一九六八年十月十六日
 - おもしろ紙三号 一九九七年三月
 - おもしろ紙十号 一九九九年三月
 - 八 同窓会員名簿 一九九四年四月
 - 九 関連著書
 - 若松秀俊「忘れられた異人さん」
 - 多くの若者を育んだフリッツ・カルシユ
 - 松江での日々と日本への想い 資料 平成十三年
 - 酒井勝郎 田舎の大学から(私家版)
 - 昭和四十四年
 - 酒井勝郎 初旅のヨーロッパ三週間(私家版)
 - 昭和五十年
 - 酒井勝郎 カルシユ先生(私家版) 昭和五十五年

Fritz Kar sch: Das Freiheitsporzellan. Kant und Nocolai Hartman. - Japanese. - Datscher Gai st esat alsch Hart 1 日独文化協会(1978). 栗津則雄 自画像を描くまなざし 日本人間講座 平成十二年

広瀬俊雄 シュタイナーの人間観と教育方法 ミネルヴァ書房 昭和六十二年

学制百年史 文部省編集委員会 昭和四十七年 日本教育史・(一)

著者略歴 若松 秀俊 昭和二十一年福島県生まれ。昭和四十七年横濱国工工学系大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教授、福井大工学部教授を経て、平成四年より東京医科歯科大医学部教授。現在同大学院教授。専門は生体機能支援システム工学。昭和四十八年、五十年ドイツ学術交流会奨励学生としてエルランゲン・ニュルンベルク大学医学部ハイオサイバネティクス研究所研究員、米国立オレゴン州立大学、中国首都医科大学、韓国釜山国立立大学など客員教授歴任。工学博士(東京大学)。